三重県埋蔵文化財調査報告１７９

田村西瀬古遺跡

１９９９．３

三重県埋蔵文化財センター

序

今回発掘調査を行った田村西瀬古遺跡の所在する嬉野町は、雲出川の支流である中村川を中心に古代から交通の要衝として栄え、多くの文化遺産を見ることができます。また、当地域における発掘調査によって、新たな歴史的な発見が日々あいついであります。

こうした過去の歴史を振り返ることは、現在の我々の生活をより深く認識することでもあり、将来への発展の第一歩となります。

私たちは、これらの埋蔵文化財と呼ばれる文化遺産を保護し、後世に伝える義務を持っています。しかしながら、近年我々の生活向上につながる開発事業に伴い、破壊される遺跡が数多くあります。今後も、我々の最低限の責務である記録保存調査に努めると共に、新たな歴史を積み重ねていきたいと思います。

なお、今回の報告書が田村西瀬古遺跡の理解と今後の文化財保護に活用されることを希望し、文化財保護行政に一層のご協力を頂くようお願いいたします。

最後に、今回の発掘調査では、県土整備部道路整備課・津地方県民局道路建設部をはじめ、地元の方々から様々な形でご協力をいただきました。ここに深く感謝の意を表します。

平成１１年３月

三重県埋蔵文化財センター
所長　　大井　與生

例　　言

1．本書は、三重県一志郡嬉野町田村字西瀬古に所在する田村西瀬古（たむらにしせこ）遺跡の発掘調査報告書である。

2．本調査は、三重県教育委員会が三重県土木部より執行委任を受けて、平成９年度に主要地方道路松阪久居線緊急地方道路整備工事に伴って実施したものである。

3．調査は次の体制により実施した。

調査主体：三重県教育委員会

調査担当：三重県埋蔵文化財センター（調査第一課）

主幹兼調査第一課長 吉水 康夫

調査第一課第二係長 前川 嘉宏（調整）

技師 萩原 義彦（担当）

主事 坂倉 一光（担当）

4．本報告書の作成業務は、三重県埋蔵文化財センター調査第一課及び管理指導課が行った。遺構・遺物の写真は、萩原・坂倉が撮影した。執筆・編集は、担当者があたり、目次と文末に執筆者名を記して文責を明示した。

5．図版における方位は、国土調査法による第Ⅳ系座標を基準とし、方位は座標北を用いた。なお磁針方位は、西偏６°　20′（昭和62年）、真北方位は、西偏０°　18′である。

6．本書で記載した遺構・遺物に関する色調は、農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帳』（1088年度版）に準拠している。

7．挿図と写真図版の遺物番号は、実測図の番号と対応している。写真図版は、特に断らない限り縮尺不同である。

8．当発掘調査による図面・写真等の記録類及び出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターにおいて保管している。

9．本書で用いた遺構表示略記号は、下記のとおりである。

ＳＡ：柵　　ＳＢ：掘立柱建物　　ＳＤ：溝　　ＳＥ：井戸

ＳＫ：土坑　　ＳＸ：方形周溝墓・中世墓　　Pit：柱穴

10．調査にあたっては、三重県土木部道路建設課、久居土木事務所、中勢教育事務所ならびに地元各位の協力を得た。

11．付編については、昭和60年に三重県教育委員会によって行われた調査のものである。

12．スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本　文　目　次

Ⅰ．前言 ……（萩原義彦）…1
1　調査契機 ……1
2　調査方法 ……1
3　調査経過 ……1
4　調査日誌 ……1
5　文化財保護法等による諸通知 ……2
Ⅱ．位置と歴史的環境 ……（坂倉一光）…3
1　位置 ……3
2　歴史的環境 ……3
Ⅲ．遺構 ……（萩原義彦）…6
1　基本的層位及び地形 ……6
2　検出遺構 ……7
(1)　Ａ調査区 ……7
(2)　Ｂ調査区 ……14
Ⅳ．遺物 ……（萩原義彦）…27
1　Ａ・Ｂ調査区　旧石器～縄文時代 ……27
2　Ａ調査区 ……27
3　Ｂ調査区 ……31
Ⅴ．まとめ ……（萩原義彦）…49
1　旧石器～縄文時代について ……49
2　弥生時代について ……49
3　古墳時代について ……49
4　奈良時代について ……49
5　平安時代について ……49
6　中世について ……49
7　近世について ……50
8　まとめ ……50
Ⅵ．付編　御殿山遺跡について ……（萩原義彦）…51

挿　図　目　次

Fig. 1　遺跡位置図
Fig. 2　遺跡周辺地形図
Fig. 3　調査区位置図
Fig. 4　調査区地区割図
Fig. 5　SE25平面・断面図
Fig. 6　SK61平面・断面図
Fig. 7　A・B調査区遺構平面図
Fig. 8　A・B調査区土層図
Fig. 9　B調査区土層図
Fig. 10　SE1平面・断面図
Fig. 11　SE30平面・断面図
Fig. 12　SK51平面・断面図
Fig. 13　SK4平面・断面図
Fig. 14　SX92·93平面・土層断面図
Fig. 15　SD47断面図
Fig. 16　SX92土器出土状況図
Fig. 17　SX93土器出土状況図
Fig. 18　SX93土器出土状況図
Fig. 19　SX93土器出土状況図
Fig. 20　SD61断面図
Fig. 21　SB94·95·96, SA97 平面・柱穴断面図
Fig. 22　SD80 土器出土状況図
Fig. 23　SK25 平面・断面図
Fig. 24　SX62·63·64 平面・断面図
Fig. 25　SE42·3·7·29·10平面・断面図
Fig. 26　SB98 平面・柱穴断面図
Fig. 27　出土遺物実測図(1)石器
Fig. 28　出土遺物実測図(2)A調査区
Fig. 29　出土遺物実測図(3)B調査区弥生
Fig. 30　出土遺物実測図(4)B調査区古墳・奈良
Fig. 31　出土遺物実測図(5)B調査区奈良
Fig. 32　出土遺物実測図(6)B調査区平安・中世
Fig. 33　出土遺物実測図(7)B調査区中世
Fig. 34　出土遺物実測図(8)B調査区近世
Fig. 35　御殿山遺跡出土遺物実測図・平面図

表　目　次

Tab. 1　A調査区遺構一覧表
Tab. 2　B調査区遺構一覧表
Tab. 3　B調査区遺構一覧表
Tab. 4　B調査区柱穴一覧表
Tab. 5　出土遺物観察表
Tab. 6　出土遺物観察表
Tab. 7　出土遺物観察表
Tab. 8　出土遺物観察表
Tab. 9　出土遺物観察表
Tab. 10　出土遺物観察表
Tab. 11　出土遺物観察表
Tab. 12　出土遺物観察表
Tab. 13　出土遺物観察表
Tab. 14　出土遺物観察表
Tab. 15　出土木製品観察表
Tab. 16　出土土錘観察表
Tab. 17　出土石製品観察表
Tab. 18　出土銭貨観察表
Tab. 19　出土金属製品観察表

写真図版目次

PL.1	Ａ調査区完掘全景	Ａ調査区完掘全景
PL.2	Ａ調査区 SE25完掘状況	Ａ調査区完掘全景
PL.3	Ａ調査区 SE30 完掘状況	Ａ調査区 SE1 完掘状況
PL.4	Ｂ調査区完掘全景	Ａ調査区 SK61 完掘状況
PL.5	Ｂ調査区 SX93 完掘状況	Ｂ調査区完掘全景
PL.6	Ｂ調査区 SX93 土器出土状況	Ｂ調査区 SX92 土器出土状況
PL.7	Ｂ調査区 SB95 完掘状況	Ｂ調査区 SB94 完掘状況
PL.8	Ｂ調査区SD80土器出土状況	Ｂ調査区 SD61 完掘状況
PL.9	Ｂ調査区 SD80 完掘状況	Ｂ調査区 SD80 土器出土状況
PL.10	Ｂ調査区 SE10 断ち割り状況	Ｂ調査区 SE42 完掘状況
PL.11	Ｂ調査区ＳＥ３断ち割り状況	Ｂ調査区 SE7 断ち割り状況
PL.12	Ｂ調査区中世墓 SX62 完掘状況	Ｂ調査区中世墓 SX62 検出状況
PL.13	出土遺物 SD58 出土弥生土器	Ｂ調査区作業風景
PL.14	出土遺物	出土遺物 SD61出土須恵器
PL.15	出土遺物	出土遺物
PL.16	出土遺物SD80出土須恵器	出土遺物

Ⅰ．前　　言

1　調査契機

主要地方道路松阪久居線は、松阪・久居市を結ぶ県道であり、利用度が高いにもかかわらず狭隘・屈曲部分が多く、交通路としては不便をきたしている。そのため、道路の整備事業が計画された。

平成９年１月に嬉野町田村字西瀬古において試掘調査を実施し、遺構（土坑・溝等）・遺物（円筒埴輪片・灰釉陶器・土師器・陶器・磁器）を確認した。その結果、当地が遺跡と判断され、発掘調査を行うことになった。

調査地の南側は、三渡川が東流し、東側には南北方向にＪＲ名松線がはしる。西側に10数ｍの所で現在の県道松阪久居線が通る。遙か北方に伊勢中川の市街地をを望むことができる。現況は、水田・休耕田・建物跡地である。

調査は、建物跡地の基礎工事部分の撤去から行い、それらの作業が終了後、表土掘削にとりかかった。

調査区は、現道路・水道埋設部分を挟んで、約20×20ｍのＡ調査区と約20×100ｍのＢ調査区の２地区に分けて行った。また、下層調査も併せて行った。

現地調査は平成9年9月16日から開始し、平成10年1月30日に終了した。最終的な調査面積は、2,500㎡である。

2　調査方法

調査に際しての４ｍ方眼の地区割りについては、東西方向にアルファベット（東から西へＡ、Ｂ、Ｃ――――――）、南北方向に数字（南から北へ１、２、３――）を設定し、各グリッドの南東隅の名称をそのグリッド名とした。また、地区割りについては、任意の設定である。遺構番号は、Ａ・Ｂ調査区それぞれ番号を１番から付けている。

3　調査経過

発掘調査は、平成９年９月16日から重機による掘削を開始し、平成10年1月30日に現地作業を終了した。現地作業にあたっては、以下の方々の協力によって無事に調査を終えることができ、心から感謝の念を表したい。（敬称略）

池山福和・乾仁・小川守・川北由雄・古儀照美・越山光・越山峰子・柴田いとゑ・荘司君枝・辻本加代・中山一幸・長崎文次・長崎安三・広島初一・福島恵美子・福島千恵子・福山正次・前田正子・松下勇・松本文夫・松本素忠・水谷昭郎・山本克己

4　調査日誌

9／9　久居土木事務所と調査前の事前協議（建設１課：丸山、埋文センター：前川嘉宏、萩原義彦、坂倉一光）。

9／16　調査開始前に調査区内の産業廃棄物の処理。

9／18　Ａ調査区の重機による表土掘削開始、コンテナハウス等設置後器材の搬入。

9／19･22･23　Ａ調査区表土掘削終了後、排土をB調査区に送りB調査区表土掘削開始。

9／24　Ａ調査区に作業員投入。Ａ調査区排水溝切り及び東西・南壁精査。

9／25　Ａ調査区遺構検出、Ｂ調査区引き続き重機による排土除去。午後より雨の為作業中止。

9／26　雨天の為作業中止。

9／29　Ｂ調査区表土除去、Ａ調査区遺構検出・遺構掘削・略図作成（1／100）。

9／30･10／2･3･6･7　引き続きＡ調査区遺構掘削の作業。

10／8　Ｂ調査区重機による表土除去作業終了、Ａ調査区遺構検出・掘削。

10／9･13～15　Ａ調査区遺構検出・掘削。

10／16　Ａ調査区写真撮影の為、遺構清掃。

10／17　Ａ調査区写真撮影・Ｂ調査区ベルトコンベア設置作業。

10／20～24　Ａ調査区平面実測（1／20）

10／27～31　Ｂ調査区遺構検出・遺構掘削。

11／5～7　遺構検出により確認された柱穴掘削、大規模な柱穴が存在し、何棟かの掘立柱建物を確認した。

11／10～13　引き続き遺構掘削、大型の弥生時代 の方形周溝墓を確認した。

11／18～20　遺構検出・掘削。近世・近代にかかる溝や井戸を確認した。

11／25　引き続き遺構検出・掘削。

11／26　雨天の為、作業中止。

11／27　午前から水抜き作業。午後から遺構検出・掘削。隣接する中原小学校の小学６年生約35名見学。

11／28　引き続き遺構検出・掘削。方形周溝墓の周溝は、かなり深く約１ｍに及ぶことが判明。

12／2～5　遺構検出・掘削。中世と見られる溝の掘削。調査区を斜めに横断しており、中世における条里に関連すると考えられる。

12／9～12　遺構検出・掘削。埴輪等が出土する近世の溝を確認。奈良時代の掘立柱建物と同時期で平行する溝を確認。

12／15　遺構検出・掘削。嬉野町生涯学習センターの受講者10数名見学。

12／16～19　Ｂ調査区北半部の遺構検出・掘削。調査区北側の落ち込みは、近世の遺構とみられる。

12／22　写真撮影の為の清掃。

12／24　写真撮影全景（北から・南から・部分撮影）。

12／25　平面実測の為の割り付け作業を行う。

12／26　午後から遺物の取り上げ作業を行う。

1／6～9　Ｂ調査区平面実測作業（1／20）（前川・坂倉・萩原）。

1／12　実測終了部分からレベル入れにはいる。

1／13　午前、水抜き。午後から下層確認の為、３×15mのトレンチの設定及び掘削。ＳＤ80の遺物取り上げ、埋土の除去後清掃・写真撮影。

1／14　下層確認の為3×18mのトレンチを設定後、掘削。午後より雨の為作業中止。

1／16　下層確認作業。下層に遺構・遺物なし。ベルトコンベア搬出作業。

1／19～22　中世及び奈良時代の井戸の断ち割り作業・断面写真撮影・実測を行う（1／10）。

1／23　調査区西壁精査・実測を行う（1／20）。

1／26　Ｂ調査区の水抜き作業及び調査区東壁の精査・実測を行う（1／20）。

1／27～29　調査区周辺の清掃及び器材の洗浄を行う。

1／30　器材等の撤収を行う。作業員に今回の調査について説明する。

1／31　三雲町において遺跡説明会。

5　文化財保護法等による諸通知

文化財保護法（以下、法）等にかかる諸通知は、以下によって行っている。

・法第57条の３第１項（文化庁長官宛）

平成９年９月５日付道建第941号（県知事通知）

・法第９８条の２第１項（文化庁長官宛）

平成９年９月18日付教埋第467号（県教育長宛）

遺失物法第1条第1項の規定にかかる文化財発見・認定通知

平成10年3月20日付教文第６-105号（久居警察署長宛）

平成10年3月17日付教埋第11−59号（県教育長通知）

（萩原義彦）

Ⅱ．位置と歴史的環境

1　位置

田村西瀬古遺跡(1)のある一志郡嬉野町は、紀伊半島の東端にある伊勢平野の中央部に位置する。嬉野町は、一志郡美杉村三峰山に源を発して伊勢平野中央部を東流する雲出川と、その支流の中村川によって形成された沖積平野上に位置する。今回発掘調査を行った田村西瀬古遺跡は、嬉野町の東南部に位置し、遺跡の南側には三渡川が流れている。標高は３～４ｍである。

2　歴史的環境

嬉野町の中央を流れる中村川の周辺は、多種多様な遺跡が各時代にわたり密集している地域としてよく知られている上、発掘調査も数多く行われ貴重な成果が得られている地域である。一方、田村西瀬古遺跡のある三渡川流域は、近年になって、漸く発掘調査が行われるようになった地域であり、考古学的な資料としては今後蓄積されていくことが期待されている地域である。ここでは、中村川流域から三渡川流域を中心に関連する主な遺跡について述べる。

〈旧石器時代～縄文時代〉

旧石器時代では、中尾垣内遺跡(2)・天保遺跡(3)・焼野遺跡(4)などでナイフ形石器等が確認されている。[1] 天花寺丘陵内の清水谷遺跡(5)でも有茎尖頭器が確認されている。[2] 縄文時代になると、無数の集石群と多量の遺物によって著名な天白遺跡(6)[3]を始め、中村川中流域に遺跡が密に分布する。

〈弥生時代〉

下之庄東方遺跡(7)では、弥生時代中期前葉から後期後葉、さらに古墳時代前期初頭に至る方形周溝墓が計35基確認されている。[4] また、野田遺跡(8)の調査では、前期の土器が出土している。[5] 庵ノ門遺跡(9)では、分布調査により前期～後期の弥生土器が多数確認されている。低地部の遺跡として三渡川の右岸にある中ノ庄遺跡(10)がある。この遺跡からは、前期中段階の遺構・遺物が確認されており、伊勢平野における最古級の弥生集落となる。[6] 平成８年度の宮ノ腰遺跡(11)の調査では前期の壺と甕が出土し弥生時代前期遺跡の存在が指摘されている。[7] また、平成9年度の天花寺丘陵内遺跡群小谷赤坂地区(12)の調査では、後期の大型竪穴住居から鹿と船が描かれた線刻土器が出土し、[8] 話題を呼んだ。南へ下って松阪市内の阿形遺跡(13)では、環濠をもつ後期の拠点的集落が確認されている。[9]

〈古墳時代〉

前期初頭頃の墳墓として、戸峡（とばさま）・女牛谷（めうしだに）の墳墓群(14)のように台状墓の系譜に乗るも[10]のと、上野 1号墳(15)のような盛土を主体としたもの[11]が見られる。次に、前期にはいると、雲出川左岸で４基（筒野１号墳（16)・西山 1号墳(17)・向山古墳(18)・錆山古墳(19)）の前方後方墳が築かれている。天花寺丘陵内には、馬ノ瀬古墳群(20)・小谷古墳群(21)・清水谷古墳群(5) などの中～後期にかけての群集墳が形成され続け、濃密な古墳分布を示す。後期には中村川中流域と雲出川中流域に、横穴式石室を主体とした群集墳が多数築造される。

〈奈良時代・平安時代〉

一志郡内は古代寺院が密集して建てられた地域としてよく知られている。特に、嬉野町内においてはいくつかの古代寺院が推定されている。中村川左岸の天花寺廃寺(22)・一志廃寺(23)・中谷廃寺(24)は極めて近い距離にある。中村川右岸には、権現前に嬉野廃寺(25)、須賀に積善寺跡(26)、下之庄に上野廃寺(27)がある。この時期、雲出川及び中村川流域は寺院を中心に大いに栄えていたと考えられる。この時期の集落跡と考えられる堀田遺跡(28)[12]や平生遺跡(29)[13]では、畿内的な要素が強い土器が出土し、この地域と畿内との繋がりがうかがえる。南へ下ると、三彩陶器が出土し注目された伊勢寺廃寺(30)があり、この地域周辺にも何らかの権力基盤があったことがうかがえる。[14]

〈中世以降〉

一志郡内においては、古代末期～中世にかけて御厨・御園とよばれる神宮領が多く存在した。当遺跡周辺においても黒野御厨が存在したことが複数の文献資料から確認できる。[15] 平成 9年度に発掘調査が行われた宮ノ腰遺跡(11)Ｂ地区[16]や上ノ庄北出遺跡(31)[17]

では鎌倉時代の集落跡が確認された。その後、北畠氏が上多気に根拠地を構えてからは、中村川を下って伊勢平野に出る道が利用され、中村川流域には天花寺城(32)・須賀城(26)・釜生田城(33)・八田城・森本城(34)などの出城が存在した。田村西瀬古遺跡のある田村という地名の由来も、北畠氏家臣田村源内左衛門が居住し、その祖墓があることによるとする説もある。現在でも、当遺跡から西の山の頂に目を移せば、北畠氏の軍事的拠点であった阿坂城跡(35)を確認できる。

(坂倉一光)

Fig. 1　遺跡位置図（1／50,000）国土地理院発行1／25,000「大仰・松阪・松阪港・大河内」より

註
① 皇學館大学考古学研究会編『嬉野町の遺跡』 1989年
② 和気清章『三重県一志郡嬉野町埋蔵文化財調査概要』 嬉野町教育委員会 1991年
③ 森川幸雄ほか『天白遺跡』三重県埋蔵文化財センター 1995年
④ 吉水康夫・鈴木克彦ほか『一級河川中村川埋蔵文化財調査概要』 1・2三重県教育委員会 ・1988年
⑤ 和気清章『野田遺跡発掘調査報告』嬉野町教育委員会 1995年
⑥ 谷本鋭次『中ノ庄遺跡発掘調査報告』三重県教育委員会 1972年
⑦ 伊藤裕偉『宮ノ腰遺跡発掘調査報告Ⅰ』三重県埋蔵文化財センター 1997年
⑧ 原田恵理子『天花寺丘陵内遺跡群小谷赤坂地区発掘調査概要』三重県埋蔵文化財センター 1998年
⑨ 福田哲也『ヒタキ廃寺・打田遺跡・阿形遺跡ほか』三重県埋蔵文化財センター 1992年
⑩ 野田修久・前川嘉宏ほか『近畿自動車道（久居～勢和）埋蔵文化財発掘調査報告』第3分冊Ⅰ 三重県埋蔵文化財センター 1991年
⑪ 野田修久・伊藤裕偉「三重県」『定型化する古墳以前の墓制』第2分冊 第24回東海埋蔵文化財 研究集会 1988年
⑫ 早川裕己「堀田遺跡」『昭和56年度県営ほ場整 備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1982年
⑬ 吉村利男『平生遺跡発掘調査報告』平生遺跡発掘調査団 1976年
⑭ 倉田直純ほか『伊勢寺廃寺・下川遺跡ほか』三重県埋蔵文化財センター 1990年
⑮ 「三重県の地名」 平凡社 1983年
⑯ 水谷豊『宮ノ腰遺跡発掘調査報告Ⅱ』三重県埋蔵文化財センター 1998年
⑰ 山本義浩『上ノ庄北出遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 1998年

Fig. 2 遺跡周辺地形図（1／5,000）

Ⅲ. 遺　構

1　基本的層位及び地形

今回の調査地は、標高３～４mの三渡川の自然堤防上である。調査区はＡ・Ｂ調査区に分割され、Ｂ調査区南半部が最も高く、Ａ調査区つまり三渡川方向の部分とＢ調査区の北半部の伊勢中川方向に緩やかに傾斜している。

Ａ調査区：現況は、休耕田であり三渡川に向かって緩やかに傾斜し、基本的層位は、耕作土直下で遺構面となる。

Ｂ調査区：南半部では、過去に建物が存在したために旧水田面に盛土がなされている。層位的には、盛土、旧水田層直下で遺構面に達する。部分的に建物建設に伴う工事により部分的に攪乱を受けている。

北半部は、Ａ調査区と同様である。標高では、Ｂ調査区南半部とその他とでは、遺構検出面の標高が若干異なる。本来の遺構面は、Ｂ調査区南半部のレベルであったと考えられ、その他は、後世に削平を受けたものと想定される。

遺構については、主なものについて記述した。その他のものについては、遺構一覧表に記載した。

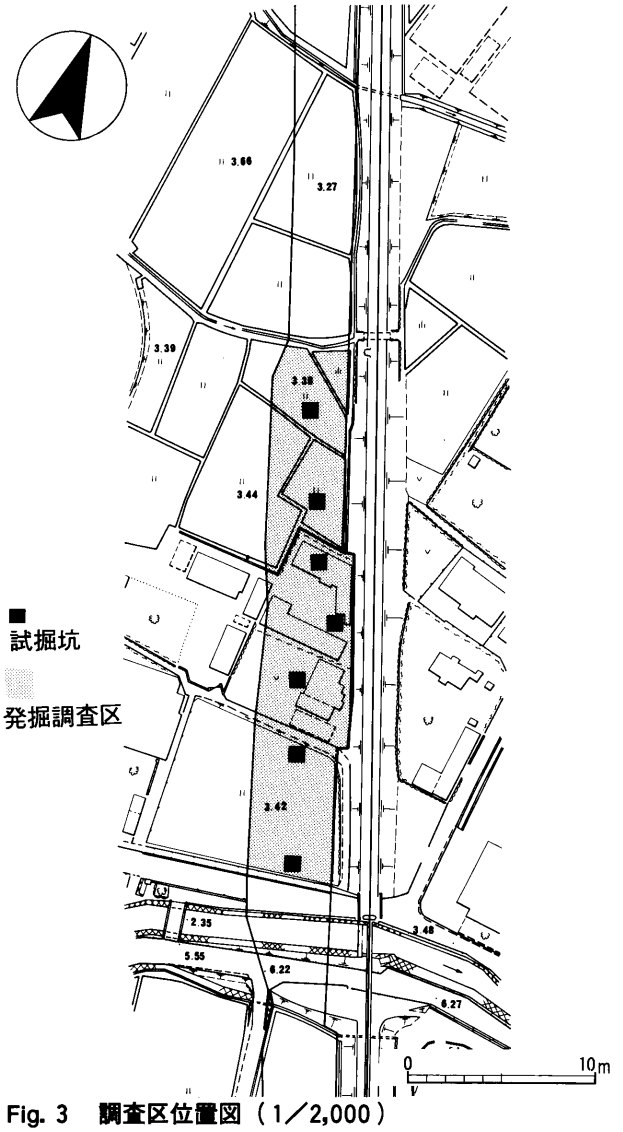


Fig. 3　調査区位置図（1／2,000）

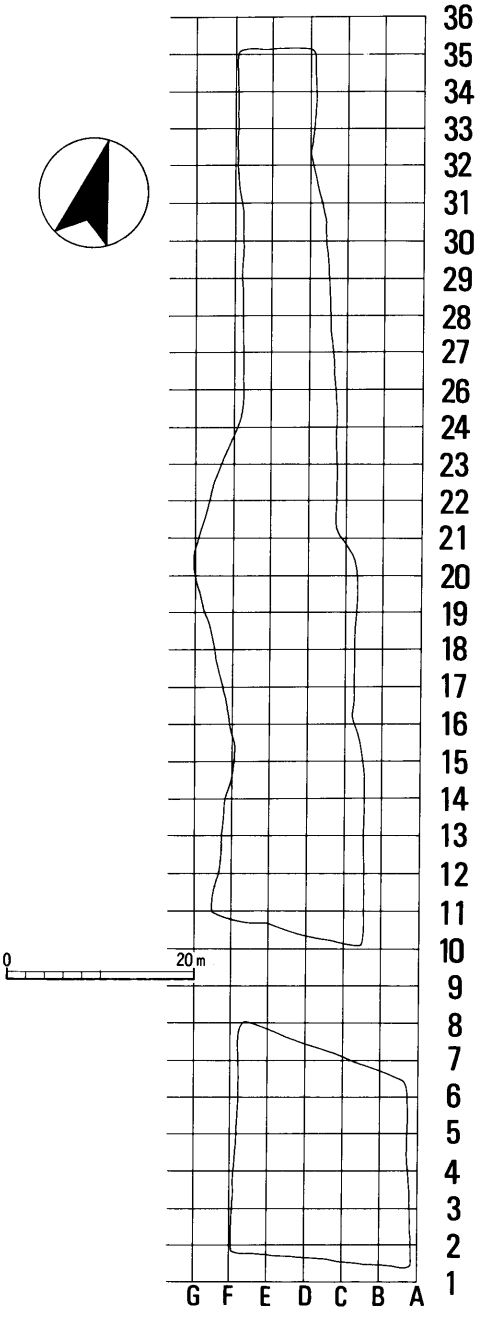


Fig. 4　調査区地区割図（1／800）

2　検出遺構

(1)　A調査区

この調査区で検出された遺構には、弥生・奈良時代から江戸時代にかけてのものがある。各時代の主な遺構について、以下にその概要を示す。

a．弥生時代

SE25（Fig.　5）　調査区の北西部D６区に位置する井戸である。平面形状は、ほぼ円形で直径約0.8m、深さ約１mの円筒形である。遺構の埋土は、ほぼ３層に分けられる。第１層は黒褐色土、第２層は黒褐色粘質土に黄橙色粘質土が混じる層であり、第３層は黒色粘土である。

遺物は、弥生土器の壺の体部片と小片のため図化できなかった高杯の杯部片とが埋土の第３層から出土した。時期は、中期と考えられる。

SK61（Fig.　6）　調査区南西隅D・E２区に位置する土坑である。平面形はほぼ長方形であり、南方に張り出す部分がある。長軸約3.6m、短軸約3.5m、深さ0.2mを残す。竪穴住居の可能性を持つが、柱穴や壁周溝を検出することができなかった。そのため、この遺構は土坑として捉えている。

遺物は、弥生土器の壺底部が出土している。

SD80は、調査区南西部SK61の近くに位置する溝である。幅約0.4m、深さ約0.1mである。一部分を近世の土坑であるＳＫ７１によって削平されている、本来は、SK61に取りつくと考えられる。

遺物は、広口壺の口縁部分が出土した。時期は、中期と考えられる。

b．奈良時代

SE1（Fig.　10）　調査区D２区に位置する素掘りの井戸である。平面形はほぼ円形であり、直径約1.8m、遺構検出面からの深さ約２mを残す。埋土は、第1層は黒色粘質土・第2層は青黒色粘質土・第３層は青黒色粘土である。埋土掘削にさいして、現在においても非常に水量は豊富であり、常時排水ポンプを稼働する必要があった。

遺物は、埋土第１層から３層までに破片が大量に入っていた。須恵器杯蓋・杯身・甕・土師器杯身・

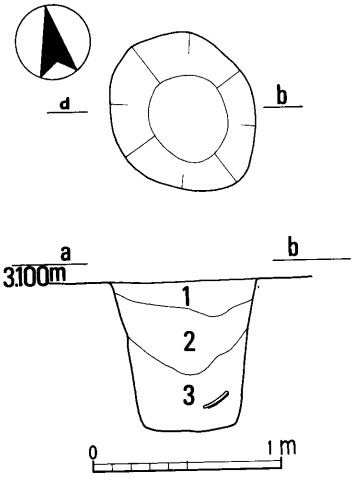


Fig. 5　SE25 平面・断面図（1／40）

SE25埋土土色
1．黒褐色粘質土
(Hue2.5Y5／1)
2．黄橙包粘質土
(Hue10YR7／6)
(黒褐色粘質土混)
3．黒色粘土
(Hue2.5Y3／1)
SK61埋土土包
4．黒色粘土
(Hue2.5Y3／1)

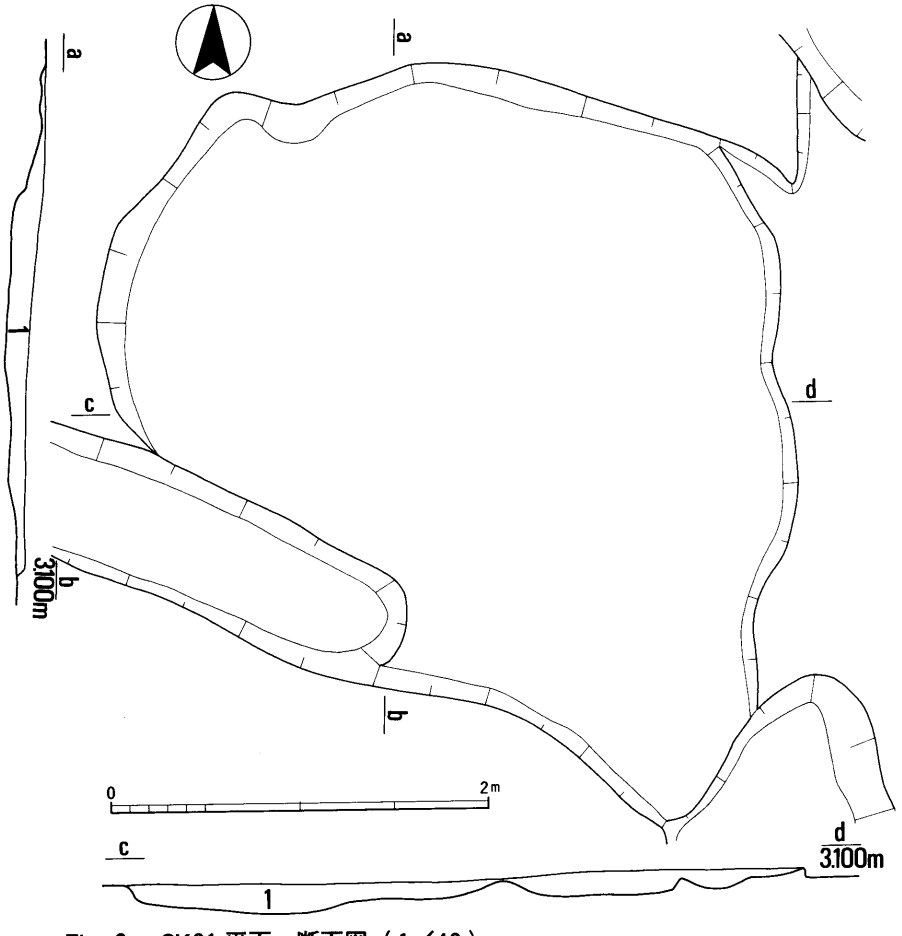


Fig. 6　SK61 平面・断面図（1／40）

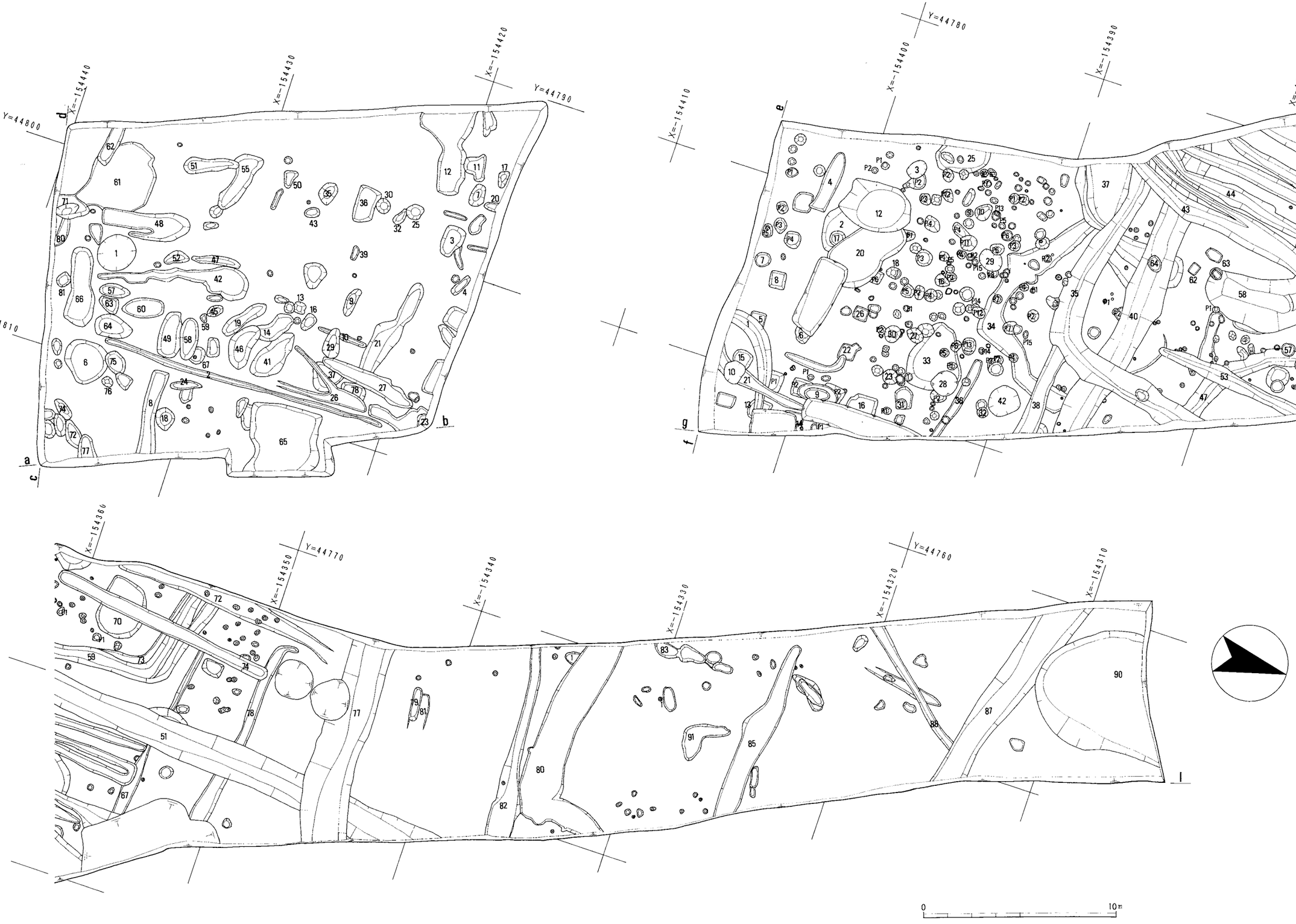
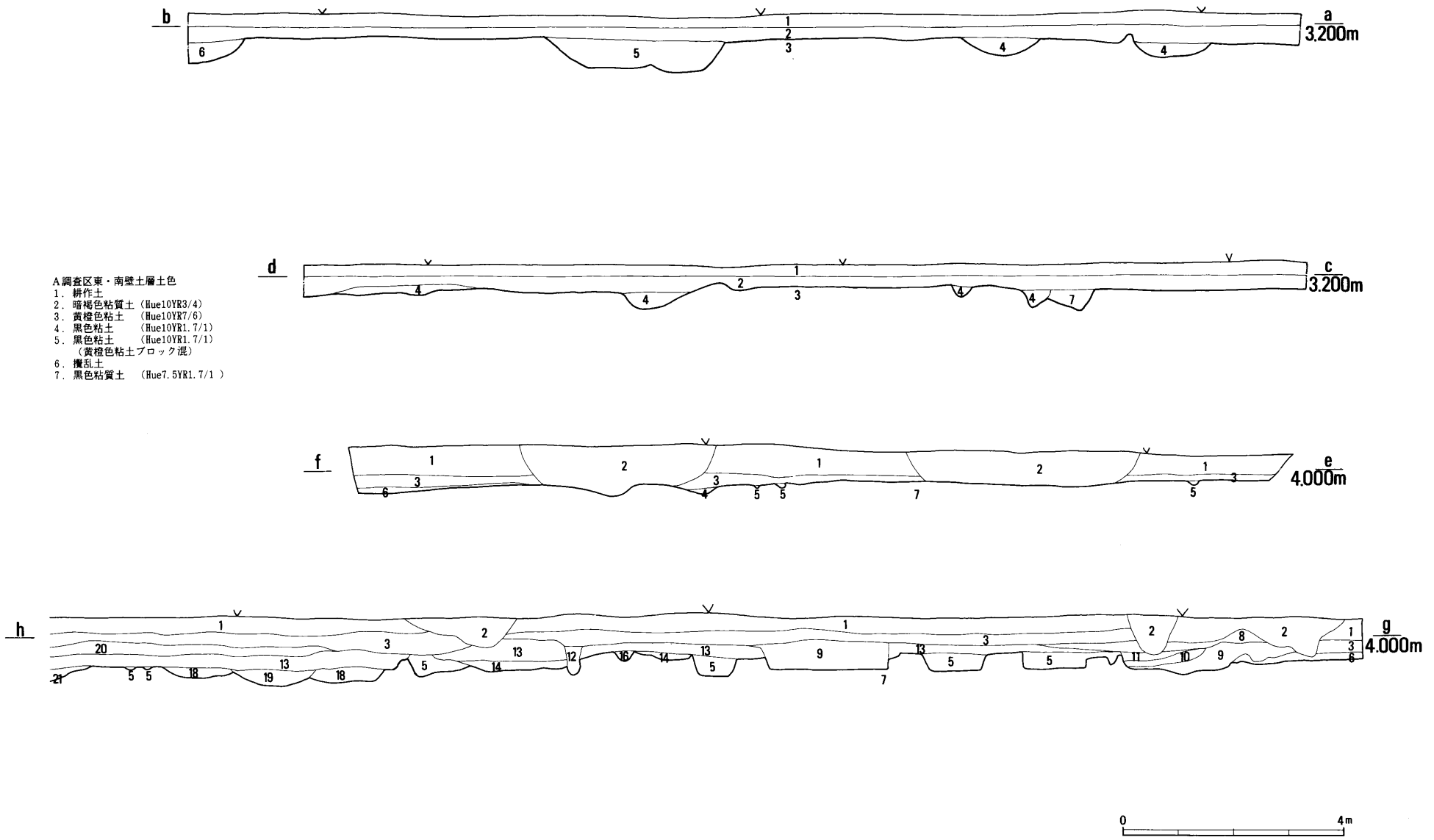
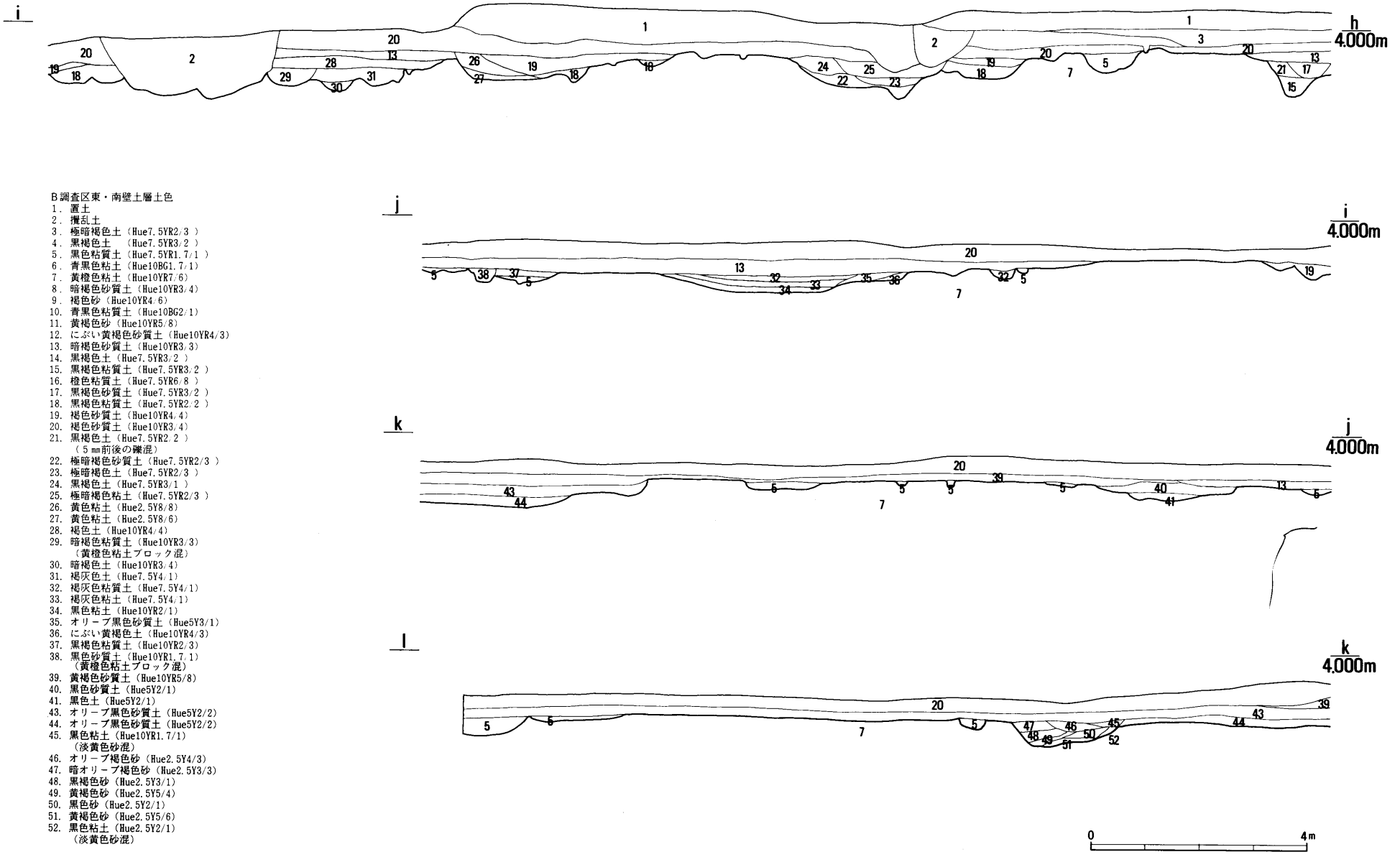


Fig. 7　調査区平面図（1／200）



A調査区東・南壁土層土色
1．耕作土
2．暗褐色粘質土（Hue10YR3/4）
3．黄橙色粘土　（Hue10YR7/6）
4．黒色粘土　　（Hue10YR1.7/1）
5．黒色粘土　　（Hue10YR1.7/1）
（黄橙色粘土ブロック混）
6．攪乱土
7．黒色粘質土　（Hue7.5YR1.7/1 ）

Fig. 8　A調査区東・南壁土層図・B調査区東・南壁土層図（1／100）



B調査区東・南壁土層土色
1. 置土
2. 攪乱土
3. 極暗褐色土（Hue7.5YR2/3）
4. 黒褐色土（Hue7.5YR3/2）
5. 黒色粘質土（Hue7.5YR1.7/1）
6. 青黒色粘土（Hue10BG1.7/1）
7. 黄橙色粘土（Hue10YR7/6）
8. 暗褐色砂質土（Hue10YR3/4）
9. 褐色砂（Hue10YR4/6）
10. 青黒色粘質土（Hue10BG2/1）
11. 黄褐色砂（Hue10YR5/8）
12. にぶい黄褐色砂質土（Hue10YR4/3）
13. 暗褐色砂質土（Hue10YR3/3）
14. 黒褐色土（Hue7.5YR3/2）
15. 黒褐色粘質土（Hue7.5YR3/2）
16. 橙色粘質土（Hue7.5YR6/8）
17. 黒褐色砂質土（Hue7.5YR3/2）
18. 黒褐色粘質土（Hue7.5YR2/2）
19. 褐色砂質土（Hue10YR4/4）
20. 褐色砂質土（Hue10YR3/4）
21. 黒褐色土（Hue7.5YR2/2）
（5㎜前後の礫混）
22. 極暗褐色砂質土（Hue7.5YR2/3）
23. 極暗褐色土（Hue7.5YR2/3）
24. 黒褐色土（Hue7.5YR3/1）
25. 極暗褐色粘土（Hue7.5YR2/3）
26. 黄色粘土（Hue2.5Y8/8）
27. 黄色粘土（Hue2.5Y8/6）
28. 褐色土（Hue10YR4/4）
29. 暗褐色粘質土（Hue10YR3/3）
（黄橙色粘土ブロック混）
30. 暗褐色土（Hue10YR3/4）
31. 褐灰色土（Hue7.5Y4/1）
32. 褐灰色粘質土（Hue7.5Y4/1）
33. 褐灰色粘土（Hue7.5Y4/1）
34. 黒色粘土（Hue10YR2/1）
35. オリーブ黒色砂質土（Hue5Y3/1）
36. にぶい黄褐色土（Hue10YR4/3）
37. 黒褐色粘質土（Hue10YR2/3）
38. 黒色砂質土（Hue10YR1.7/1）
（黄橙色粘土ブロック混）
39. 黄褐色砂質土（Hue10YR5/8）
40. 黒色砂質土（Hue5Y2/1）
41. 黒色土（Hue5Y2/1）
43. オリーブ黒色砂質土（Hue5Y2/2）
44. オリーブ黒色砂質土（Hue5Y2/2）
45. 黒色粘土（Hue10YR1.7/1）
（淡黄色砂混）
46. オリーブ褐色砂（Hue2.5Y4/3）
47. 暗オリーブ褐色砂（Hue2.5Y3/3）
48. 黒褐色砂（Hue2.5Y3/1）
49. 黄褐色砂（Hue2.5Y5/4）
50. 黒色砂（Hue2.5Y2/1）
51. 黄褐色砂（Hue2.5Y5/6）
52. 黒色粘土（Hue2.5Y2/1）
（淡黄色砂混）

Fig. 9　B調査区東壁土層図(1／100)

甕がある。

c．鎌倉から室町時代

SE30（Fig. 11） 調査区北側のＤ６区に位置し、素掘りの井戸と考えられる。平面は、ほぼ円形で直径約０.８ｍ、深さ約１ｍである。

SD2･10･26･47 検出したこれらの溝は、幅がそれぞれ異っているものの約30cmで、深さ約10cmである。一部の溝底から掘削時に鋤先と考えられる痕跡を確認できた。

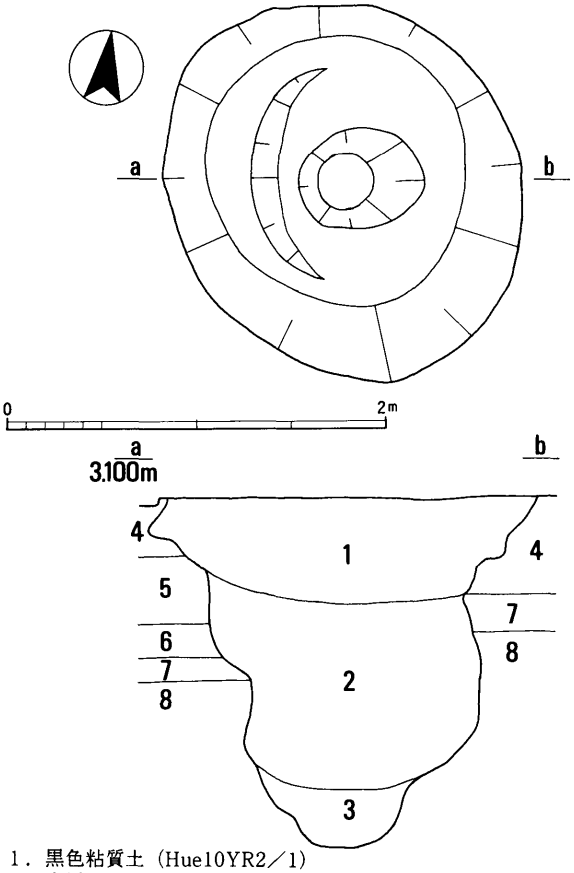
瓦器椀・陶器椀（山茶椀）が出土している。

d．江戸時代

SK4（Fig. 13） 調査区北側のＤ７区に位置する土坑である。規模は長軸約1.7m、短軸約１ｍ、深さ0.5mである。埋土は、黄褐色粘質土に黒褐色粘質土が混ざっている。

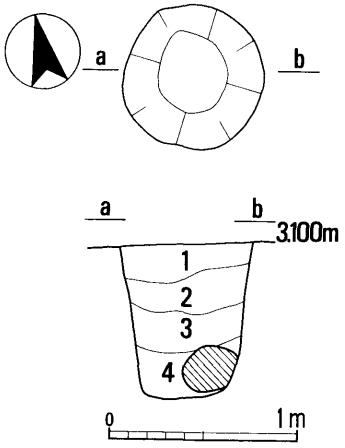
遺物は、「寛永通寶」１点がある。

SK51（Fig. 12） 調査区西側のＥ３・４区に位置する土坑である。規模は、長軸2.8m、短軸0.9m、深さ0.4mである。埋土は、SK4とほとんど変わらない。



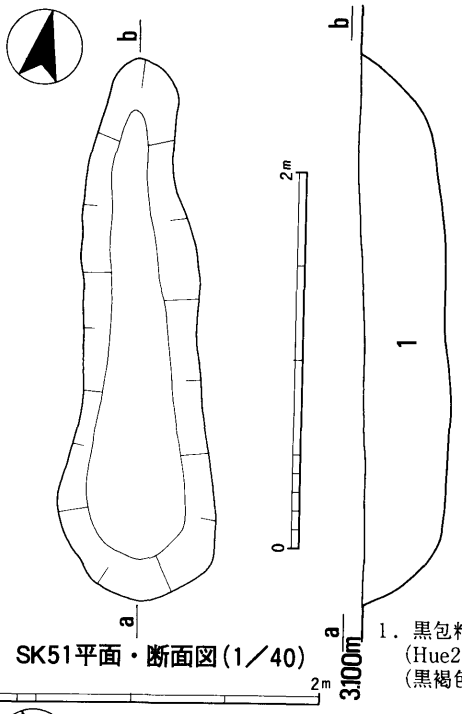
1．黒色粘質土（Hue10YR2／1）
2．青黒粘土（Hue10BG2／1）
3．青黒色微砂（Hue10BG2／1）
4．黄橙色粘質土（Hue10YR8／8）
5．明黄褐色砂質土（Hue10YR7／6）
6．黄褐色砂（Hue10YR5／8）
7．緑灰色砂（Hue5G6／1）
8．黄灰色砂（Hue10BG5／1）

Fig. 10 SE1 平面・断面図（1／40）



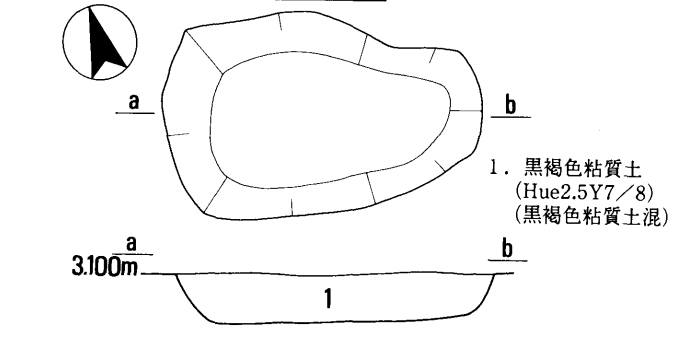
SE30埋土土色
1．黒褐色粘質土
(Hue2.5Y5／1)
(２～４cmの礫混)
2．黄色粘土
(Hue2.5Y7／8)
(２～４cmの礫混)
3．黒褐色粘質土
(Hue2.5Y3／2)
(２～４cmの礫混)
4．黒色粘土
(Hue2.5Y2／1)
(２～４cmの礫混)

Fig.11 SE30平面・断面図(1／40)



1．黒包粘質土
(Hue2.5Y7／8)
(黒褐色粘質土混)

Fig.12 SK51平面・断面図(1／40)



1．黒褐色粘質土
(Hue2.5Y7／8)
(黒褐色粘質土混)

Fig. 13 SK4 平面・断面図（1／40）

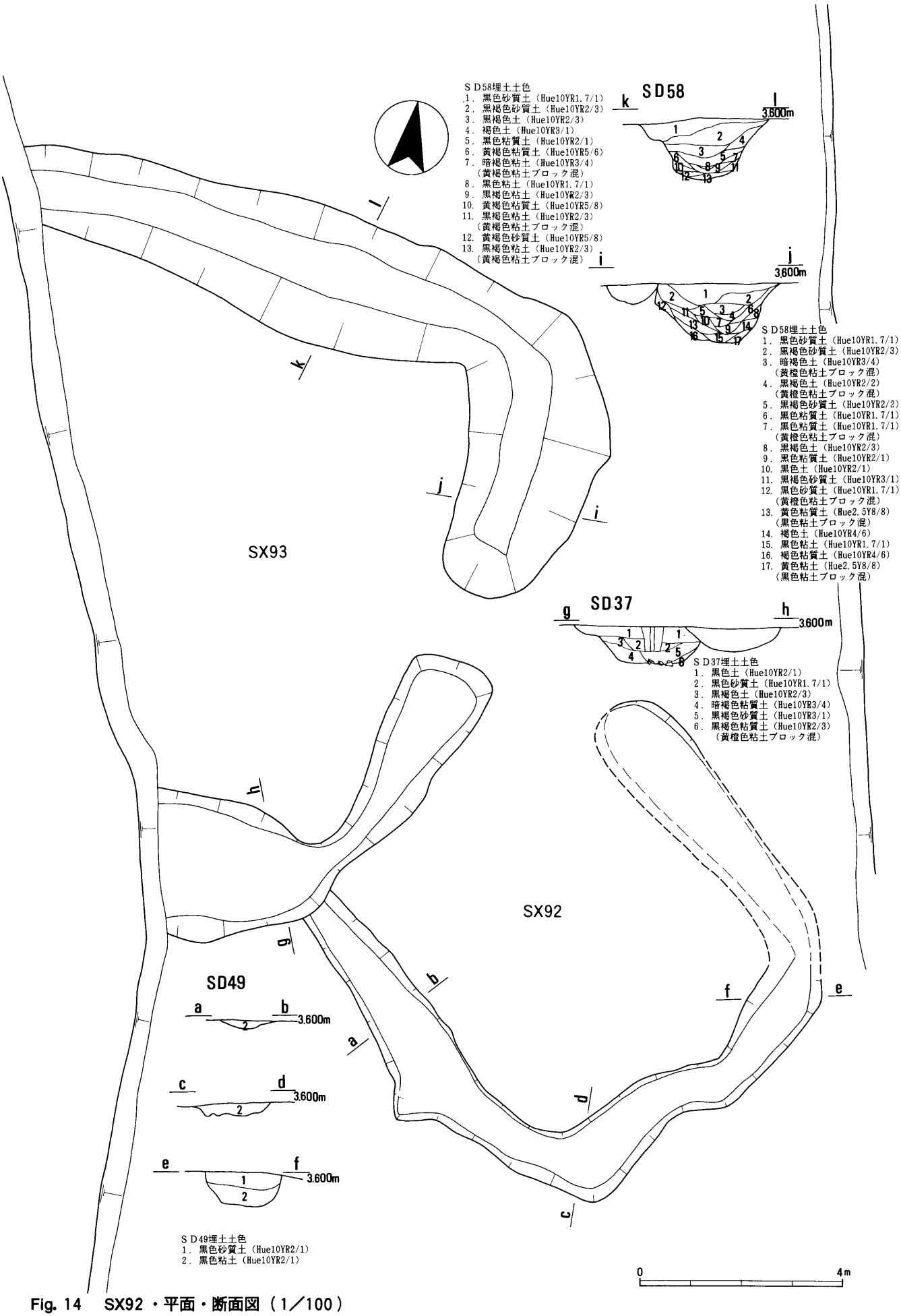


Fig. 14　SX92・平面・断面図（1／100）

遺物には、呪符木簡がある。

（2）B調査区

この調査区では、弥生時代から江戸時代にわたる遺構を確認した。以下、主な遺構について概略を記す。

a．弥生時代

SX93（Fig. 14） 東辺の中央に「陸橋」部分をもつ方形周溝墓である。規模は溝芯々で南北約10.4 m、東西は約10m以上である。若干長方形であろうと思われる。溝幅は、約1～2.8m、深さは、0.5 ～1mと大きく差異がある。南・北周溝の規模を比較すると、南側の方が幅・深さにおいて小さく、断面形状においても、南側が緩やかな逆台形で、北側がやや急なU字形である。

遺物は、南側の周溝から高杯2点、北側の周溝から高杯1点、台付甕2点が出土している。南側の周溝から出土した高杯は、杯部分を下に脚部分を上にした状態で周溝の溝底付近から出土している。出土状況からみて高杯は、溝底に据えられたものでなく、墳丘部分に供えられたものが転落し、上下逆の状態で埋没したものとみられる。

台付甕は、北側の周溝の埋土から出土している。高杯と同様に墳丘部分に供えられていたものが転落した後に、土圧によって原形を失ったと考えられる。

時期については、土器の様式からみて、欠山様式の古段階に属すると考えられる。

SX92（Fig. 13） ほぼ正方形とみられる方形周溝墓である。西周溝は、SX93の南周溝と重複し、北側に「陸橋」がある。方形周溝墓の規模は、溝芯々で南北約7m、東西約8mである。周溝の規模は、溝幅約1～1.4m、深さ0.1～0.3mである。それぞれの周溝の断面形は、浅い逆台形である。北東部分の周溝は、後世の遺構によって削平されて消失している。また、周溝は全体的にSX93と比較してかなり浅く、溝幅も縮小している。

遺物はほとんど出土していないが、北側周溝の部分から弥生土器の壺破片が出土しており、時期は、SX93より古いと考えられる。

b．古墳時代

SD47（Fig. 15） 調査区B16・C17・18区にかけて弧をえがくように巡る溝である。幅約1m、深さ約0.7 mで、断面形は、かなり急な逆台形である。遺物はまったく出土していない。確定はできないものの古墳の周溝と考えられる。仮に古墳とすると円墳ないし前方後円墳であり、直径約12～14mとみられる。

c．奈良時代

SB94（Fig. 21） 調査区南東部隅のA･B10～12区付近にある桁行4間、梁行1間以上の南北棟の総柱建物である。棟方向は、真北方向である。

柱掘形は方形を示し、規模は最大もので120 ㎝四方である。

建物規模は、南北6.50m、東西1.80m以上を測るそのため、建物全体の推定復元規模は南北6.36 m（21尺）、東西1.82m（6尺）以上とみられる。

時期は、柱穴から出土した土器からみて、奈良時代中期以降と考えられる。

SB95（Fig. 20） 調査区南部隅のB・C･D10～12区にある南北2間、東西3間の東西棟である。棟方向は、真東西の方向である。

柱掘形は方形を示し、規模は、大きいもので80㎝四方である。

建物規模は、南北4.90m、東西6.50mを測る。そのため、建物全体の推定復元規模は南北4.85m（16尺）、東西6.36m（21尺）とみられる。

時期は、SB94と同時期と考えられる。また、S

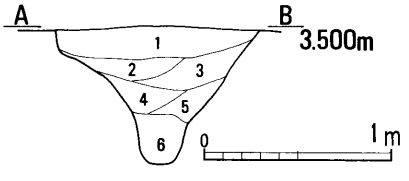


Fig. 15 SD47断面図（1／40）

1．黒色砂質土（Hue10YR3／1）
2．暗褐色砂質土（Hue10YR3／3）
3．黒褐色土（Hue10YR2／2）
4．黒褐色土（Hue10YR2／3）
5．黒褐色粘質土（Hue10YR3／2）
6．暗褐色粘質土（Hue10YR3／4）
（黄橙色粘土ブロック混）

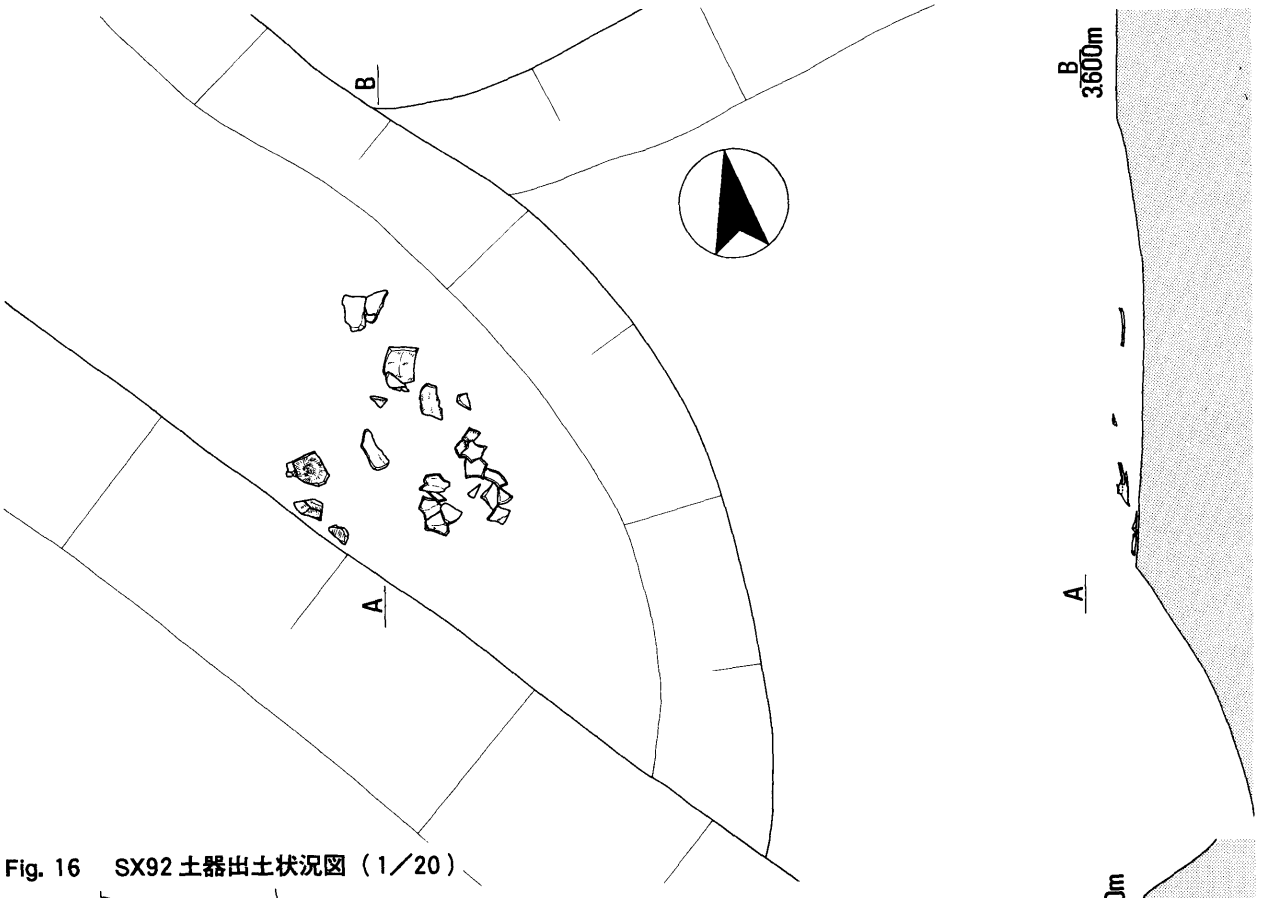


Fig. 16　SX92 土器出土状況図（1／20）

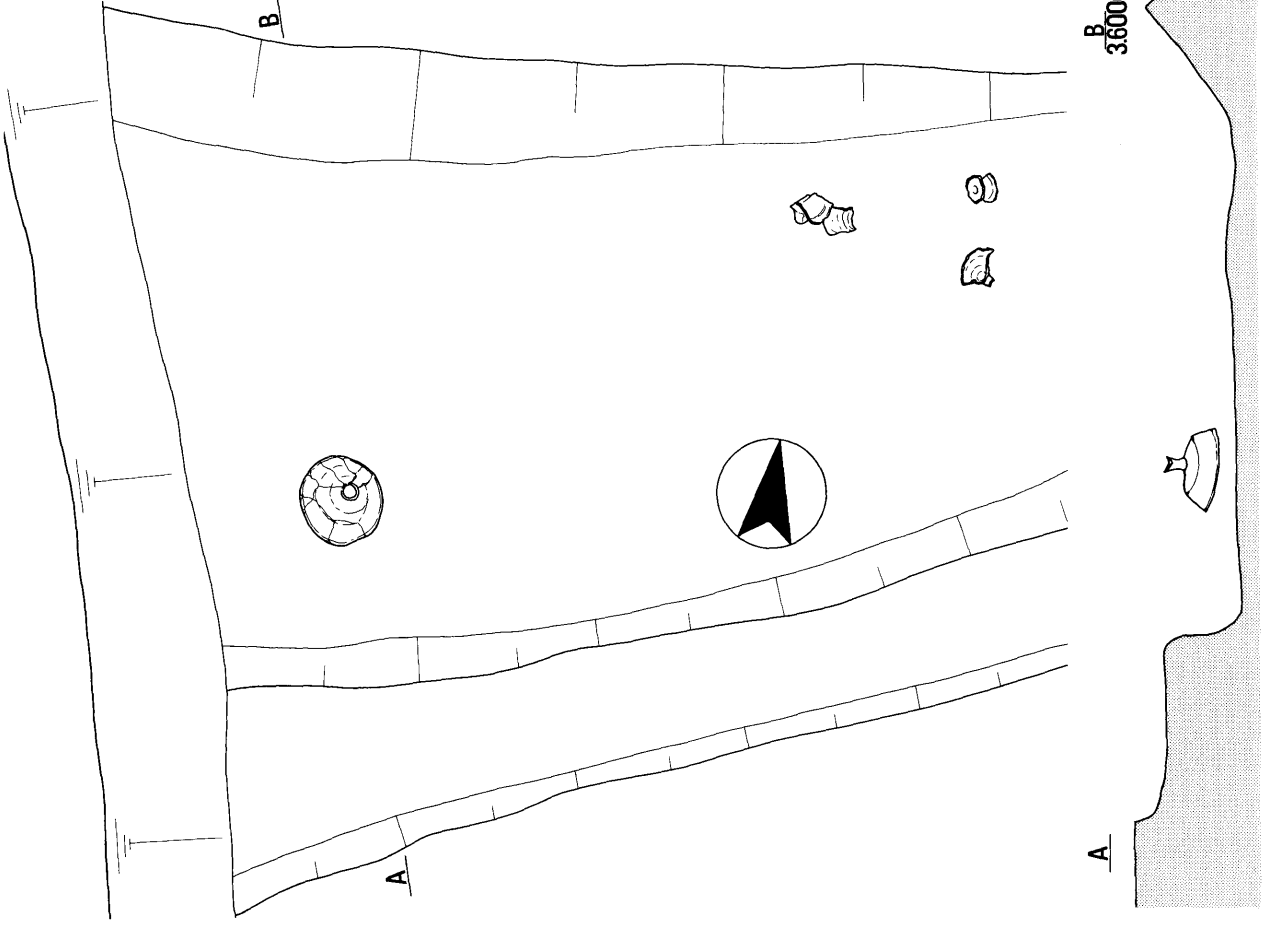


Fig. 17　SX93 土器出土状況（1／20）

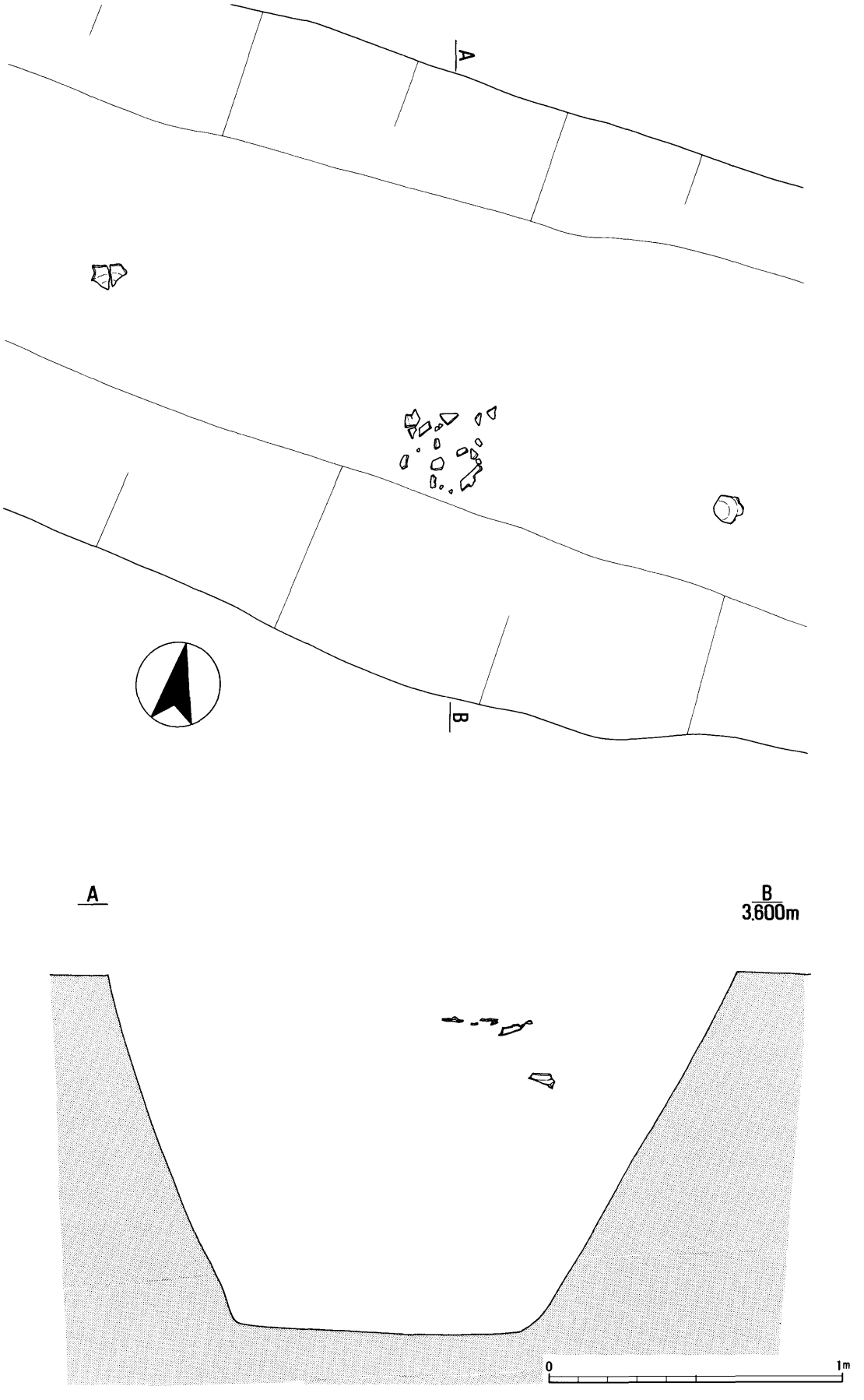


Fig. 18　SX93 土器出土状況図（1／20）

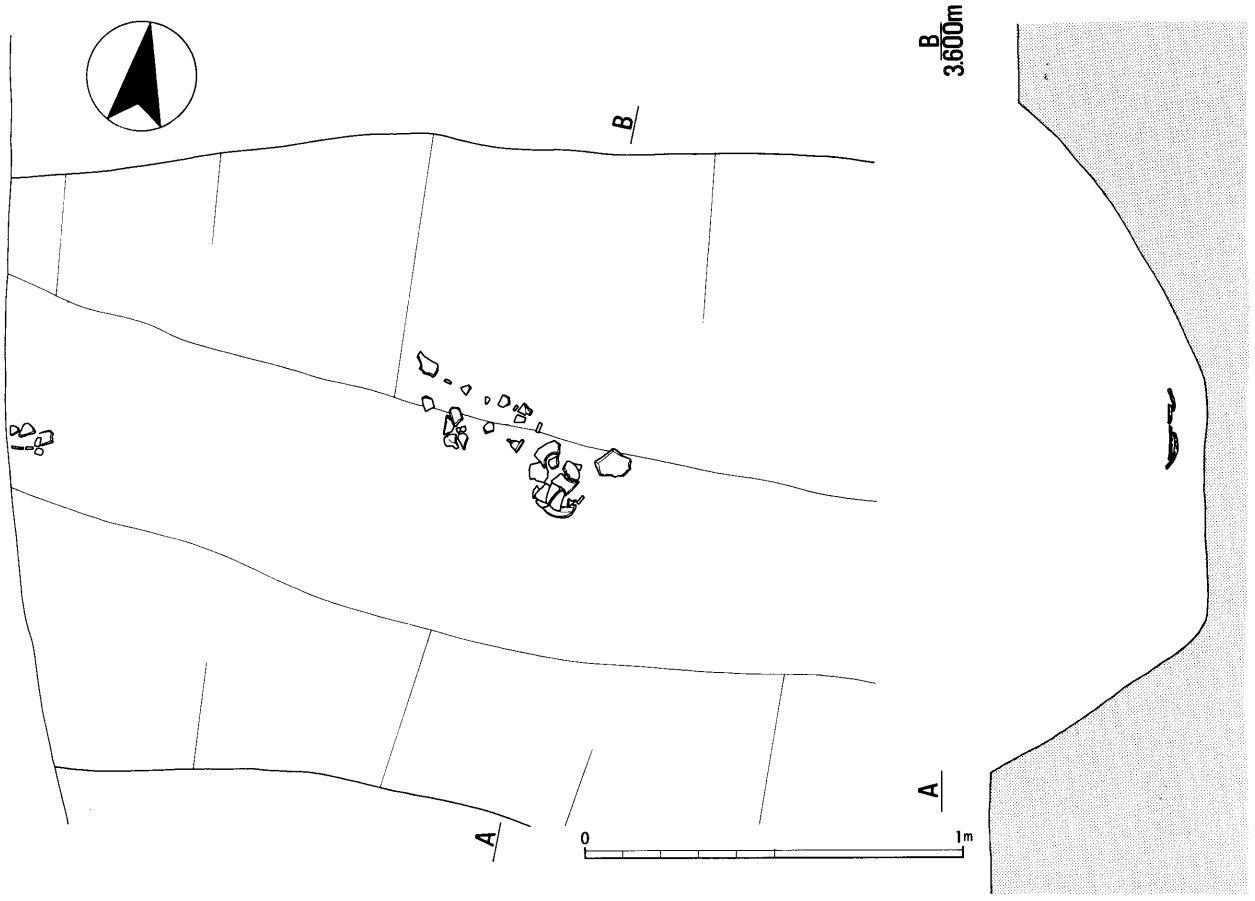


Fig. 19　SX93 土器出土状況図（1／20）

B94、SB95の南面が、2.50mの間隔をおいて揃えられている。

SB96（Fig. 20）　調査区南部SB95の北側のB・C・D12～14区に位置する。南北2間、東西3間の東西棟である。梁行方向はN 2°Eの方向である。

建物規模は、南北4.65m、東西6.35mを測る。建物の推定復元規模は南北4.55m（15尺）、東西6.06m（21尺）とみられる。

時期は、SB96がSB94・95と異なる方向を示しているため差異があると考えられる。

SA97（Fig. 20）　調査区D11～14区にかけて延びる柵とみられる。柱穴が一部欠けるものの5間分を確認できる。西側で対応するピットを確認できなかったが、西側に広がる掘立柱建物の可能性もある。SB94・95と同方向に揃えられているため、これらの掘立柱建物の囲う柵とみられる。

SD61（Fig. 15）　調査区中央付近のA20・B20・C21・D21・E22区にかけて東方向に流れる溝である。溝幅約2m、深さ約0.6mで、断面形は、緩

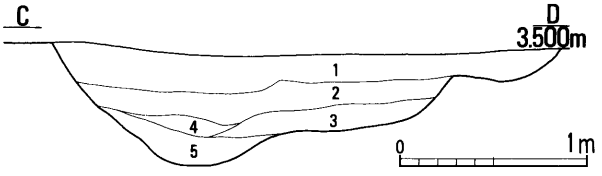


Fig. 20　SD61 断面図（1／40）

1．暗褐色砂質土（Hue10YR3／4）
2．暗褐色土（Hue10YR3／4）
3．黒褐色土（Hue10YR3／1）
4．黒褐色砂質土（Hue10YR3／1）
5．黒褐色粘質土（Hue10YR2／2）
（黄橙色粘土ブロック混）

やかなU字形である。これは、SB94・95とほぼ平行し、SB94の南端より約24m離れており、ほぼ同一時期である。そのため、建物群とと何らかの関係があるとみられ、推測ではあるが外部を区画するように溝が掘削されたと考えられる。

出土遺物には、須恵器杯蓋・身・甕・高杯、土師器杯身・甕がある。

SD80（Fig.21）　調査区北側B26, 27・C26・D26,27区に位置する溝である。これは、東方向

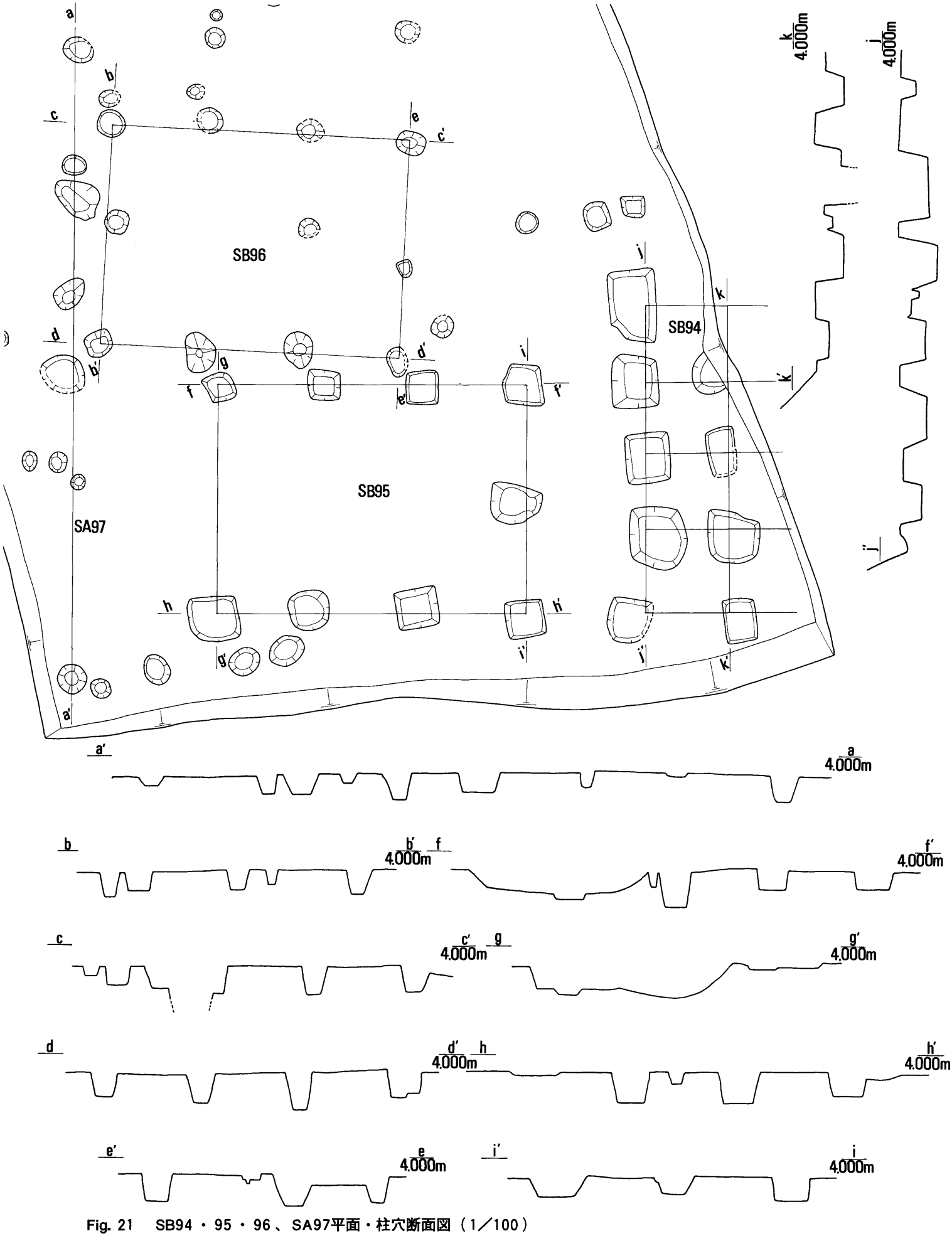


Fig. 21　SB94・95・96、SA97平面・柱穴断面図（1／100）

Fig. 22　SD80 土器出土状況図（1／40）

に流れ、途中で90°に北に屈曲する。東西部分で幅約2m、深さ約0.2mで、南北部分で幅約1m、深さ約0.2mである。

出土遺物は、須恵器甕・短頸壺・細頸壺・杯身・横瓶、土師器杯身がある。

溝の時期は、前述したSB94·95、SD61とほぼ同時期であるが、これらとの関連性は、この溝が北側に屈曲することから全く不明である。

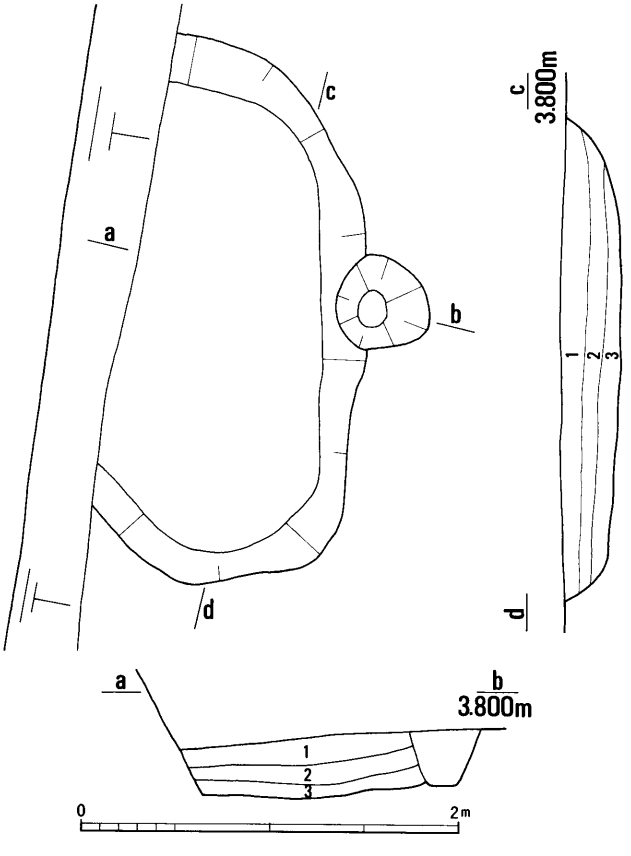
SD82（Fig. 21） 調査区北側に位置し、SD180の南に隣接し、平行する東西溝である。幅約0.6m、深さ約0.3mである。

時期は、SD80と同様に考えられる。

d.平安時代

SD87 調査区北隅B31·C31、32·D32区に位置する溝である。幅約1.5m、深さ約0.5mである。出土遺物は、灰釉陶器椀・土師器杯・土錘が出土している。

SK25（Fig. 23） 調査区南側E13区西壁そばに位置する土坑である。遺構の一部は、調査区外で



1. 黒褐色土（Hue10YR2／2）
2. 黒色粘質土（Hue10YR2／1）
3. 黒色砂質土（Hue10YR2／1）

Fig. 23 SK25平面・断面図

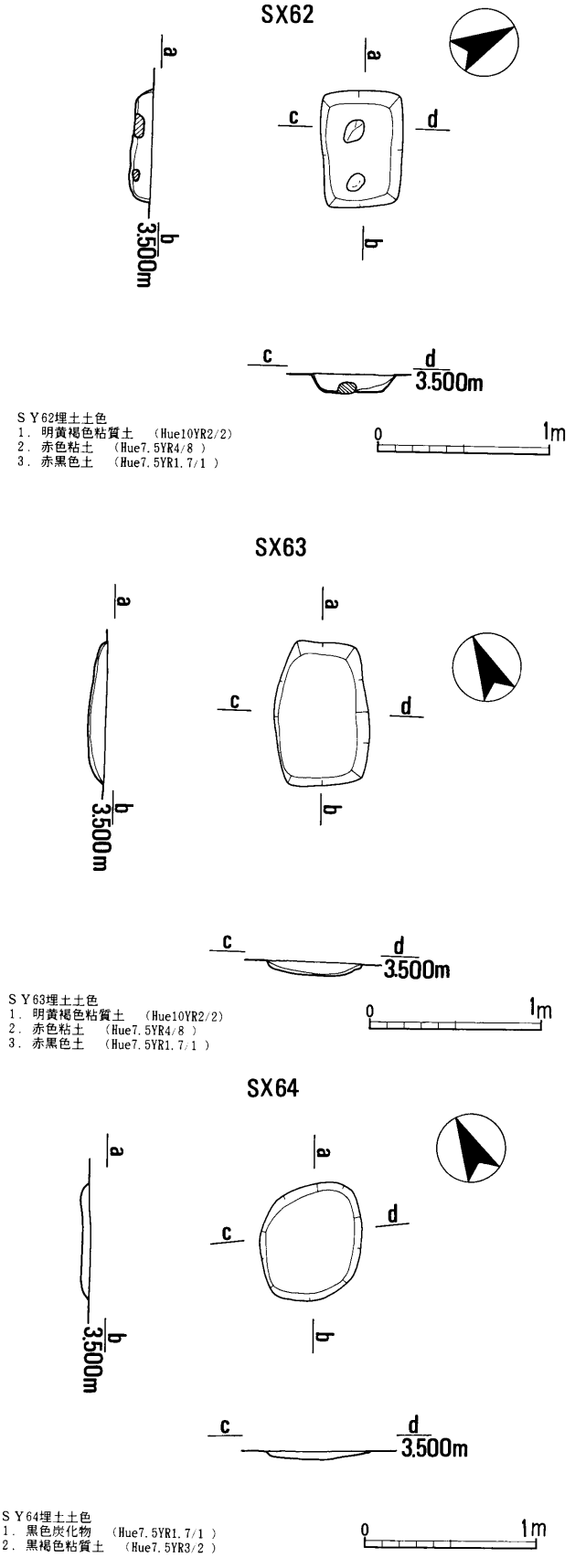


Fig. 24 SX62・63・64平面・断面図（1／40）

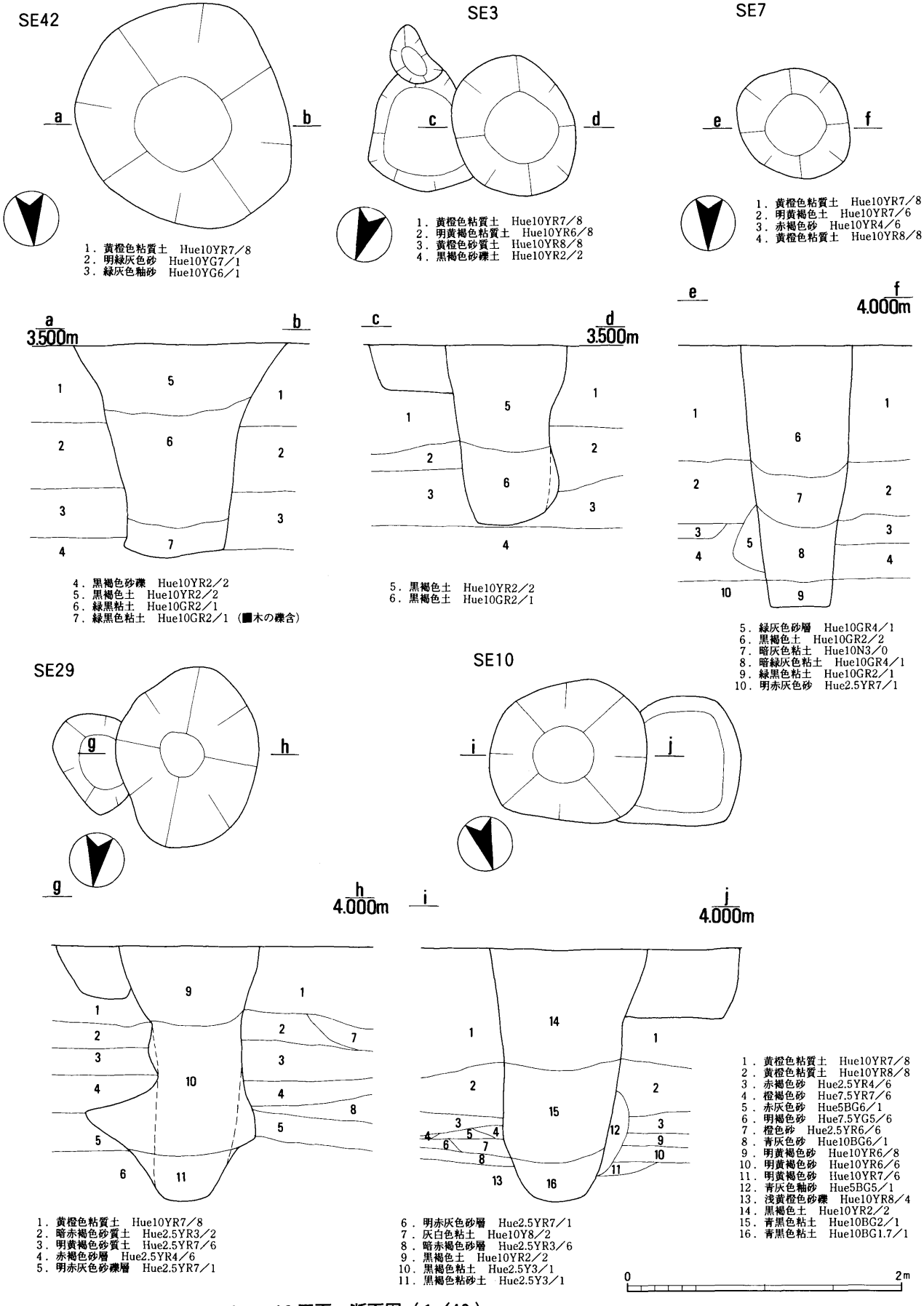


Fig. 25　SE42・3・7・29・10平面・断面図（1／40）

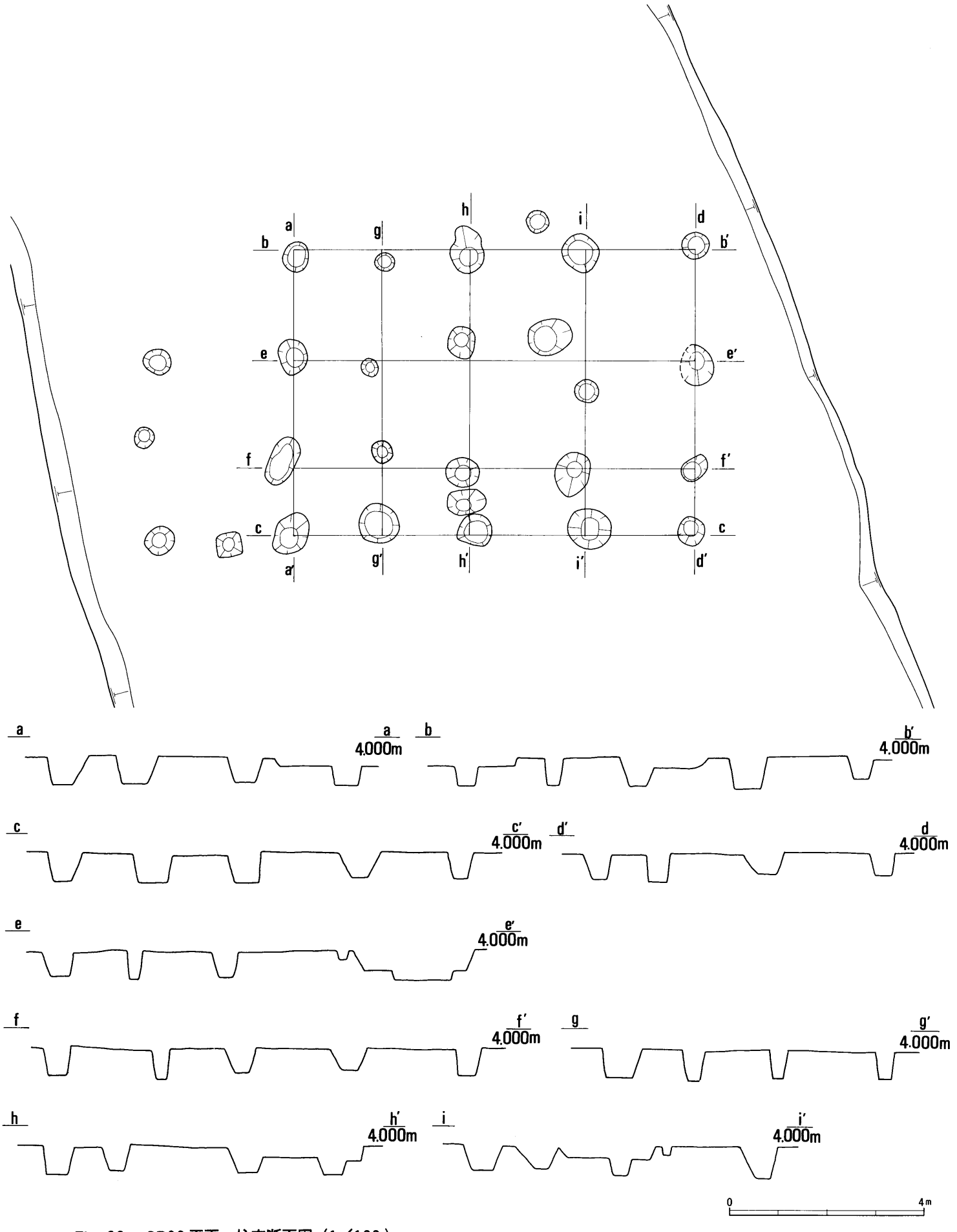


Fig. 26　SB98 平面・柱穴断面図（1／100）

あるものの規模は、南北方向約2.8m、深さ約0.3mの半楕円形状である。

出土遺物は、灰釉陶器壺口縁部片・土師器杯身がある。

e.. 鎌倉から室町時代

ＳＥ３（Fig. 25） 調査区南側西壁付近のD12区に位置する井戸である。平面は楕円形で、規模は直径１m、深さ1.3mを測る。

ＳＥ７（Fig. 25） 調査区南端のC10区に位置する井戸である。平面は円形で、規模は直径0.8m、深さ1.9mを測る。

SE42（Fig. 25） 調査区南側東壁付近のA13区に位置する井戸である。平面は楕円形で、規模は直径1.6m、深さ1.6mを測る。

出土遺物は、土師器小皿・山茶椀がある。

SE10（Fig. 25） 調査区南側のB10区に位置する井戸である。平面は円形で、規模は直径1.2m、深さ1.8mを測る。

SE29（Fig. 25） 調査区南側中央部のC13区に位置する井戸である。平面は楕円形で、規模は直径13m、深さ1.8mを測る。水量が豊富なために、井戸の掘形が浸食されている。

出土遺物は、山茶椀・土師器羽釜がある。

SD51 調査区中央部のB23、24･C21、22･D19、20･E17、18区において、北方向に流れる溝である。幅約1.8m、深さ約0.3mで、断面形は、緩やかなU字状である。

出土遺物では、土師器鍋・皿、陶器椀（山茶碗）がある。

SD35 調査区南側A15・B14・C15・D15区に位置する溝である。これは、東から西に流れ、途中で北方向に屈曲する。幅約1.5m、深さ約0.5mで、断面形は、V字状である。

出土遺物は、土師器鍋・皿、山茶碗がある。

SD34 調査区南側A15・B14・C15・D15区に位置する溝である。この溝は、SD35にほぼ平行する。幅約1.5m、深さ約0.4mで、断面形は、緩やかなU字状である。

時期は、SD35よりは古い。

出土遺物は、土師器鍋・皿、山茶碗がある。

SX62（Fig. 24） 調査区南寄りのC16区に位置する火葬墓である。規模は、長軸0.6m、短軸0.4m、深さ0.12mの隅丸方形形である。埋土には、炭化物が非常に多く、人骨片が混じる。

また、遺構の外縁部分が赤化しており、焼土痕跡がある。さらに、南北方向に２個の台石が並んで置かれていた。

SX63（Fig. 24） SX62のすぐ北側に位置する火葬墓である。長軸0.8m、短軸0.6m、深さ0.1mの楕円形である。埋土には、SX62とほぼ同様である。出土遺物には、土師器小皿がある。

SX64（Fig. 24） SX62のすぐ南側に位置する火葬墓である。長軸0.8m、短軸0.7m、深さ0.06mで、楕円形である。埋土は、SX62・63とほとんど変わらない。

f. 江戸時代

SB98（Fig. 26） 調査区南側のB12、13・C12、13・D13、14区に位置する掘立柱建物である。東西４間、南北３間の東西棟である。梁行方向が、N11°Eの方向である。

建物規模は、南北5.95m、東西8.23mを図る。建物の推定復元規模は南北5.76m（19尺）、東西8.18m（27尺）とみられる。

柱穴から陶磁器が出土している。

SK90 調査区北端に位置し、池ないし沼と考えられる。埋土からは、軒丸瓦や陶磁器片など、時期幅の広い範囲の遺物が出土している。（萩原義彦）

Tab. 1　A調査区遺構一覧表

遺構番号	小地区	性　格	時　期	備　　考	遺構番号	小地区	性　格	時　期	備　　考
SE1	C2他	井　戸		Fig. 10	SD42	C3他	溝	中　世	幅0.5m、深さ0.1m 時期不明
SD2	B2他	耕作溝		幅30cm、深さ5cm	SK43	D5	土　坑	時期不明	
SK3	D6他	土　坑		長辺1.2m、短辺0.4m、深さ約0.2m	SK44	D5	落ち込み		長辺0.8m、短辺0.5m、深さ0.1m
SK4	C6	土　坑	奈　良	Fig. 13	SK45	C3	土　坑	時期不明	長辺0.9m、短辺0.5m、深さ約0.15m
SK5	−	−	中　世	SK65と同一番号	SK46	B4	土　坑	時期不明	長辺2.5m、短辺1.2m、深さ約0.3m
SK6	B2	土　坑	江　戸	直径2.3m、深さ0.2 ～0.5m	SD47	C3	溝	中　世	幅0.4m、深さ0.2m
SK7	D7	土　坑	江　戸	長辺1.3m、短辺0.7m、深さ0.2 ～0.3m	SD48	D3他	溝	中　世	幅0.5m、深さ約0.1m
SD8	A2他	溝	−	幅0.8m、深さ約0.3m	SK49	B3他	中　世	時期不明	長辺2.4m、短辺1.2m、深さ約0.1m
SK9	C5	土　坑	弥　生	長辺1.6m、短辺0.7m、深さ約0.2m	SK50	D4	土　坑	時期不明	長辺1m、短辺0.6m、深さ約0.1m
SD10	B5	溝	江　戸	幅30cm、深さ約10cm	SK51	E3他	土　坑	江　戸	Fig. 12
SK11	E7他	土　坑	平　安	長辺1.5m、短辺1.2m、深さ0.1m	SK52	C3	土　坑	時期不明	長辺1.3m、短辺0.6m、深さ0.1 ～0.2m
SK12	E7他	土　坑	時期不明	長辺5m、短辺1.2m、深さ0.1 ～0.2m	SD53	−	土　坑	−	SD42と同一
SK13	C4	土　坑	中　世	0.5m四方、深さ約20cm	SD54	−	−	−	SD42と同一
SK14	B4他	土　坑	時期不明	長辺2m、短辺0.9m、深さ0.1m	SK55	D3	−	時期不明	長辺3.3m、短辺1.3m、深さ約0.2m
SK15	C4他	落ち込み	中　世		SD56	−	土　坑	−	SD42と同一
SK16	C5	土　坑	弥　生	長辺0.9m、短辺0.6m、深さ約0.2m	SK57	C2	土　坑	時期不明	長辺1.6m、短辺0.6m、深さ0.1m
SK17	D7	土　坑	平　安	長辺0.9m、短辺0.5m、深さ0.1mm	SK58	B3	土　坑	平　安	長辺2.2m、短辺0.9m、深さ約0.3m
SK18	A3	土　坑		長辺1.3m、短辺1.1m、深さ0.1 ～0.25m	SK59	C3	土　坑	時期不明	長辺0.4m、短辺0.3m、深さ0.1m
SK19	C4他	土　坑	時期不明	長辺1.3m、短辺1.1m、深さ約0.3 ～0.5m	SK60	C2	土　坑	時期不明	長辺2.1m、短辺1.1m、深さ約0.1m
SD20	D7	溝	時期不明	幅40cm、深さ約20cm	SK61	D2他	土　坑	弥　生	Fig. 6
SD21	B5他	溝	時期不明	幅0.6～1.4m、深さ0.2 ～0.5m	SD62	E2	土　坑	中　世	幅0.7m、深さ約0.2m
SK22	E7	落ち込み	奈　良		SK63	C2	土　坑	時期不明	長辺1.1m、短辺0.9m、深さ0.1 ～0.2m
SK23	A6	攪　乱	中　世		SK64	C2	土　坑	時期不明	長辺2m、短辺1.2m、深さ0.1m
SK24	B3	土　坑	奈　良	長辺1.7m、短辺1.2m、深さ0.1m	SK65	A4他	土　坑	中　世	長辺4m、短辺3.5m、深さ約0.7m
SE25	D6	井　戸		Fig. 5	SK66	C1他	土　坑	時期不明	長辺4.1m、短辺1.5m、深さ0.3m
SD26	B5他	耕作溝	現　代	幅40cm、深さ約5cm	SK67	B3	柱　穴	奈　良	長辺0.7m、短辺0.6m、深さ約0.2m
SD27	B5他	溝	時期不明	幅1m、深さ約5cm	SK68	D3	落ち込み	−	
SK28	D6他	落ち込み	弥　生		SK69	D3	落ち込み	−	
SK29	B5	土　坑	中　世	長辺1.7m、短辺0.9m、深さ約0.4m	SK70	D3	落ち込み	−	
SE30	D5	土　坑	中　世	Fig. 11	SK71	D2他	土　坑	江　戸	長辺1.6m、短辺1.3m、深さ0.6～0.7m
SK31	C6	落ち込み	江　戸		SK72	A1	土　坑	弥　生	長辺1.6m、短辺0.8m、深さ約0.3m
SK32	D6	土　坑	中　世	長辺1.1m、短辺0.6m、深さ約0.2m	SK73	−	−	−	SK6と同一
SK33	D6	落ち込み	時期不明		SK74	B1	土　坑	奈　良	長辺1.3m、短辺1.1m、深さ約0.2m
SK34	D6	落ち込み	時期不明		SK75	B2	土　坑	時期不明	長辺1.3m、短辺1m、深さ約0.2m
SK35	D5	土　坑	時期不明	長辺1.3m、短辺0.9m、深さ約0.3m	SK76	B2	土　坑	時期不明	直径0.5m、深さ約0.2m
SK36	D5	土　坑	平　安	長辺2m、短辺1.2m、深さ0.1m	SD77	A2	溝	中　世	幅0.4 cm、深さ約30cm
SK37	B5	土　坑	時期不明	長辺1.7m、短辺1.5m、深さ約0.3m	SK78	B5	土　坑	奈　良	長辺1.3m、短辺1m、深さ約0.3m
SK38	C3	落ち込み	弥　生		SK79	−	−	−	SK6と同一
SK39	D5	土　坑		長辺0.8m、短辺0.4m、深さ0.1m	SD80	D2	溝	弥　生	幅50cm、深さ約20cm
SK40	D5	落ち込み			SK81	C1	土　坑	時期不明	0.7m四方、深さ0.1m
SK41	B4	土　坑		長辺3.1m、短辺1.5m、深さ約0.4m					

Tab. 2　B調査区遺構一覧表

遺構番号	小地区	性格	時期	備考	遺構番号	小地区	性格	時期	備考
SD1	B10	溝	中世	幅0.9m、深さ約0.1m	SK41	D12	落ち込み	近世	
SK2	D12	土坑	奈良	長辺2.9m、短辺2.6m、深さ約0.7m	SE42	A11	井戸	中世	Fig. 25
SE3	E12	井戸	中世	Fig. 25	SD43	D16他	溝	近世	幅0.8m、深さ約0.3m
SD4	D11	溝	中世	幅0.7m、深さ約0.05m	SD44	D16他	溝	近世	幅1.1m、深さ約0.3m
P5	B,C11	柱穴	奈良	Fig. 21	SD45	D16他	溝	近世	幅1.6m、深さ約0.2m
P6	B11	柱穴	奈良	Fig. 21	SD46				SD34と同一
SE7	C11	井戸	中世	Fig. 25	SD47	B16他	溝	古墳	Fig. 20
P8	C10	柱穴	奈良	Fig. 21	SD48				SD40と同一
SK9	A11	土坑	中世	長辺2m、短辺0.8m、深さ約0.4m	SD49				SD37と同一
SE10	B10	井戸	中世	Fig. 25	SD50				SD43と同一
SK11	A10	落ち込み	－		SD51	E18他	溝	中世	幅1.6m、深さ約0.4m
SK12	D12	土坑	近世	長辺3.5m、短辺2.6m、深さ約0.4m	SD52				SD43･50と同一
P13	A10	柱穴	奈良	Fig. 21	SD53	B16他	溝	中世	幅0.7m、深さ約0.3m
P14	A11	柱穴	奈良	Fig. 21	SD54				SD53と同一
P15	B10	柱穴	奈良	Fig. 21	SK55	B18	落ち込み		
P16	C11	柱穴	奈良	Fig. 21	P56	B17	柱穴	中世	直径0.8m、深さ約0.3m
SK17	D12	攪乱	－		P57	B17	柱穴	中世	直径0.7m、深さ約0.2m
P18	C12	柱穴	奈良	Fig. 21	SD58	C17	周溝	弥生	Fig. 14
SD19				SD1と同一	SD59	E19他	溝	近世	幅0.7m、深さ約0.3m
SK20	C12	土坑	中世	長辺2.8m、短辺2.6m、深さ0.7m	SK60	C17	土坑	近世	長辺1.1m、短辺0.6m、深さ約0.3m
SD21	B10他	溝	中世	幅0.8m、深さ0.15m	SD61	A18他	溝	奈良	幅2.5m、深さ約0.6m
P22	B11	柱穴	奈良	Fig. 21	SX62	C16	中世墓	中世	Fig. 24
P23	B12	柱穴	近世	Fig. 26	SX63	C16	中世墓	中世	Fig. 24
SK24	A12	落ち込み	時期不明		SX64	C15	中世墓	中世	Fig. 24
SK25	E13	土坑	平安	Fig. 23	SD65				SD52と同一
P26	C12	柱穴	奈良	Fig. 21	SD66	D17	溝	近世	幅0.5m、深さ約0.2m
P27	B12	柱穴	近世	Fig. 26	SD67	C21他	溝	中世	幅0.7m、深さ約0.2m
SE28	B13	井戸	近代		SD68	E21他	溝	中世	幅0.8m、深さ約0.2m
SE29	C13	井戸	中世	Fig. 25	SK69	A19	土坑	中世	直径2m、深さ約0.3m
P30	B12	柱穴	近世	Fig. 26	SK70	E20	土坑	奈良	長辺3m、短辺2.4m、深さ約0.2m
SK31	A12	落ち込み	中世		SD71				SD45と同一
P32	A13	柱穴	近世	Fig. 26	SD72	E21他	溝	中世	幅1m、深さ約0.1m
SK33	B13他	土坑	古墳	長辺2.8m、短辺2.6m、深さ0.7m	SD73	D21他	溝	平安	幅1m、深さ約0.05m
SD34	C14他	周溝	弥生	Fig. 14	SD74				SD68と同一
SD35	C14他	溝	中世	最大幅1.8m、深さ約0.4m	SK75	D22他	落ち込み	中世	
SD36	A13他	溝	奈良	最大幅0.5m、深さ約0.2m	SK76	C20他	落ち込み	中世	
SD37	D15他	周溝	弥生	Fig. 14	SD77	C24他	溝	近世	幅2.3m、深さ約0.7m
SD38	A14他	溝	中世	最大幅1m、深さ約0.2m	SD78	D22他	溝	中世	幅0.7m、深さ約0.3m
SD39				SD35と同一	SD79	C24他	溝	中世	幅0.4m、深さ約0.15m
SD40	C15他	溝	中世	最大幅1.7m、深さ約0.5m	SD80	C26他	溝	奈良	Fig. 22

Tab. 3　B調査区遺構一覧表

遺構番号	小地区	性　格	時　期	備　　考	遺構番号	小地区	性　格	時　期	備　　考
SD81	C24他	溝	中　世	幅0.5m、深さ約0.1m	SK90	D33他	落ち込み	近　世	
SD82	C26他	溝	奈　良	Fig. 22	SK91	D23他	土　坑	近　代	
SK83	D28他	土　坑	中　世	長辺1.3m、短辺0.6m、深さ0.5m	SX92		方形周溝墓	弥　生	Fig. 14
SK84	C28他	落ち込み			SX93		方形周溝墓	弥　生	Fig. 14
SD85	C29他	溝	中　世	幅1m、深さ約0.2m	SB94		掘立柱建物	奈　良	Fig. 21
SK86	C30他	落ち込み	中　世		SB95		掘立柱建物	奈　良	Fig. 21
SD87	C32他	溝	平　安	幅1m、深さ約0.2m	SB96		掘立柱建	奈　良	Fig. 21
SD88	D31他	溝	時期不明	幅2m、深さ約0.3m	SA97		柵	奈　良	Fig. 21
SK89	D32	落ち込み		幅0.4m、深さ約0.4m	SB98		掘立柱建物	近　世	Fig. 26

Tab. 4　B調査区柱穴一覧表

地区番号	Pit番号	時　期	備　　考	地区番号	Pit番号	時　期	備　　考	地区番号	Pit番号	時　期	備　　考
A11	1	奈　良	SB94	B13	1	中　世			2	近　世	
	2	奈　良	SB91		2				3	奈　良	
B10	1	奈　良	SB94		3				4	中　世	
D10	5	中　世			4				5	中　世	
B11	1	中　世			5				6	奈　良	
D11	1	奈　良	SA97		6				7	近　世	
	2	奈　良			7				8	奈　良	
	3	奈　良			13				9	中　世	
	4	奈　良			14				10	奈　良	
A12	1	奈　良			15				11	近　世	
B12	1	奈　良		C13	1				12	奈　良	
	2	奈　良			2				13	奈　良	
C12	1	中　世			3				14	近　世	
	2	近　世			4			C14	1	奈　良	
	3	近　世			5				2	奈　良	
	4	奈　良	SB96		6				3	中　世	
	5	近　世	SB98	C13	7				4	奈　良	
	6	奈　良	SB95		8			C14	1	中　世	
	1	奈　良	SB95		11				2	中　世	
D12	2	奈　良	SB97		12			C15	1	中　世	
	3	奈　良	SB96		13				2	中　世	
	4	近　世	SB98		14			C16	1	近　世	
E12	1	奈　良			15			C19	1	中　世	
A13	1	中　世			16			C20	1	近　世	
	2	近　世	SB98	D13	1			C20	1	中　世	

Ⅳ. 遺　物

今回の調査で出土した遺物は、コンテナに整理して約40箱になる。その大部分が弥生・奈良時代から江戸時代に及ぶもので、弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器に分類される。

ここでは、調査によって出土した遺物を各遺構・時代ごとに分けて概略を記し、個々の詳細は、観察表を参照されたい。また、他の時期への混入の場合は、判別可能な限り遺物の時期を表記した。

1　A・B調査区

A 旧石器～縄文時代

旧石器～縄文時代草創期にかけての遺物は、A・B両地区から石器・剥片を含めて9点出土している。すべて他の時代の遺構から出土しており、混入とみられる。

3は、チャート製の有茎尖頭器である。2～9は、9を除き全てチャート製で、1は頁岩製のナイフ形石器である。2は、縦長剥片である。

2　A調査区

B 弥生時代

10は、SE25出土の甕である。口縁部は、受口を意識したように若干曲げている。体部に櫛描波状文が施され、上下には、4条の沈線がめぐる。また体部内外面には、タテハケによる調整がなされている。時期は、中期後半のものと考えられる。[1]

11は、SK72出土の壺の頸部である。頸部に刺突文による装飾がなされている。

12は、SK13出土のミニチュア壺である。口縁部分は、欠損している。体部外面から底部にかけてはヘラケズリ後ナデ、底部内外面は、ナデによる調整をしている。時期は、中期後半とみられる。[2]

13は、SK61出土の広口壺である。口縁端部は、下に拡張した部分を持ち、外側に櫛描波状文を施す。残存の割合が低く径は、不明である。弥生中期後半～後期のものとみられる。

14は、SK46出土の壺頸部～体部にかけての破片である。壺の頸部は、刻目を施した突帯を張り付けて、頸部～体部にかけて櫛描直線文、櫛描波状文、櫛目羽状文を1列、櫛描直線文、円形浮文、櫛描波状文をめぐらす。内面は、ナデによって調整されている。時期は、弥生中期後半～後期とみられる。[3]

15は、壺の底部である。14と同一個体とみられる。

16は、SD80出土の壺である。口縁端部は、上下にやや拡張している。端面には、竹管文を並べる。

17は、SK41出土の広口壺である。この壺は、口縁部が下に拡張し、口縁端部に広い面を持っている。端面には、沈線が5条めぐる。また、口縁部内面に櫛描扇形文が1列残る。弥生中期後半～後期とみられる。[4]

D 奈良時代

SE1出土の遺物は、土師器杯18・19、皿20、甕21～26、長胴甕27、須恵器杯身28・29がある。

18は、口縁端部を尖り気味にまとめ、19は、口縁端部を丸くまとめている。体部は両者共に緩やかな曲線を描くようにまとまる。

土師器甕には、頸部がくの字状に外反し、口縁端部が尖り気味の例(24)、丸くおさまる例(23･25)、頸部がくの字状に外反して口縁端部を上方につまみあげ、端部外面に端面をもつ例(21)、上下に肥厚し広い面をもつ例(26)、凹面状になる例(22)がみられる。

土師器皿20は、全体的に器壁が厚く、口縁端部は、丸くまとまっている。

土師器長胴甕27は、口縁部を「く」の字に屈曲し、口縁端部を摘み上げて外方に端面を作りだしている。

28は、口縁部を外反させ、口縁端部を丸くまとめる。

29は、体部が直線的に外反し、断面方形の高台がとりつく。口縁端部は、尖り気味にまとまる。底部は、高台部より突出している。須恵器の内外面は、使用による磨滅によって滑らかである。

30は、SK14出土の土師器杯である。口縁端部は、やや尖り気味にまとめている。

31･32はSK57出土の土師器台付杯と須恵器杯身

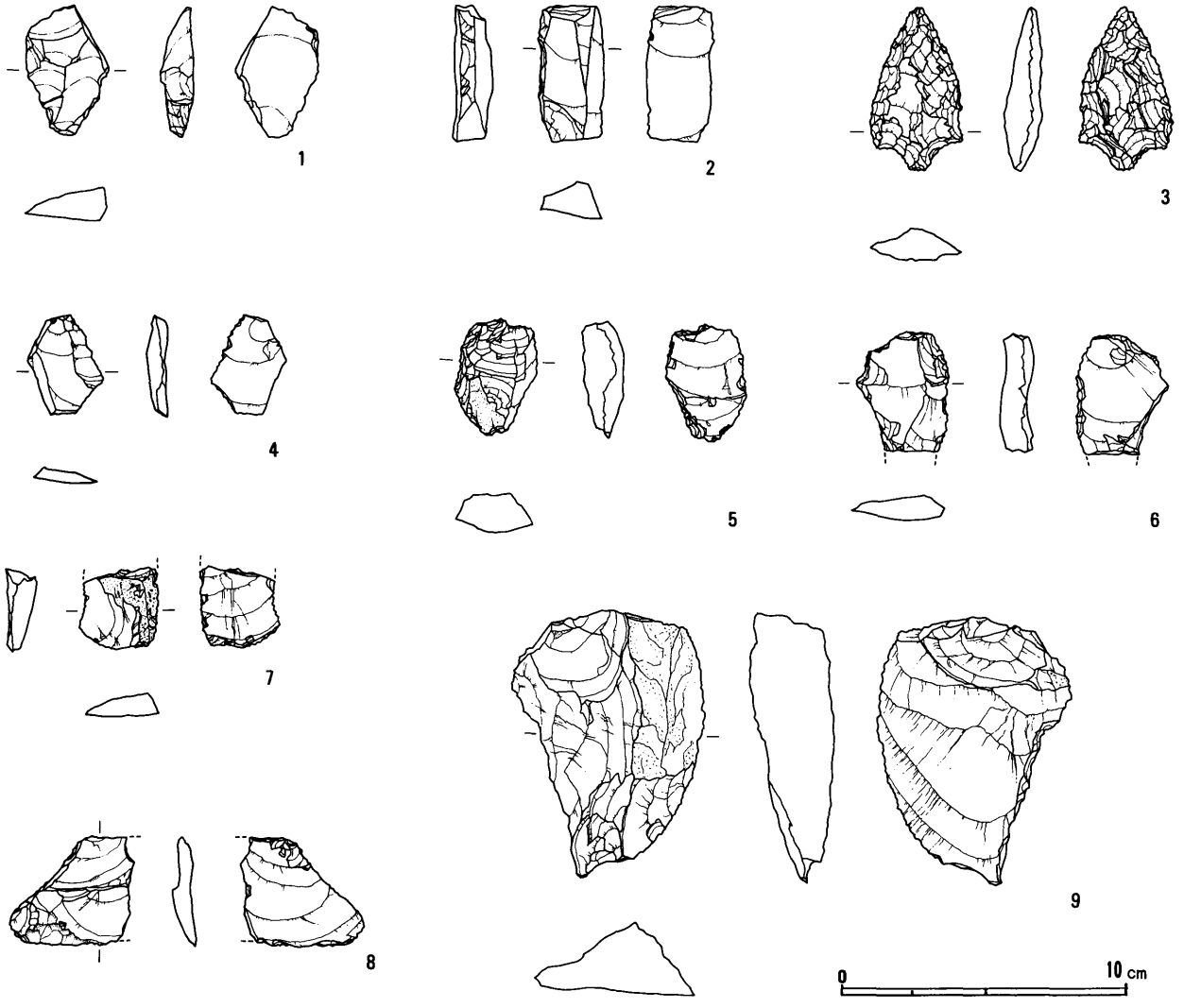


Fig. 27　出土遺物実測図(1)石器

Tab. 5　出土遺物観察表

報告書番号	登録	名称	出土位置 遺構	石材 (cm)	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	備考
1	S5−2	ナイフ形	C5区 SK44	頁岩	3.00	1.90	0.75	3.50	
2	S5−1	縦長剥片	D12区 SK2	チャート	3.20	1.50	0.90	5.40	
3	S1−1	有茎尖頭器	B2区 包含層	チャート	3.80	2.20	0.90	5.50	
4	S2−1	剥片	B2区 SK79	チャート	2.30	1.75	0.50	1.40	
5	S2−2	剥片	C5区 SK16	チャート	2.75	1.90	1.00	5.00	
6	S3−2	剥片	B4区 SK41	チャート	2.80	2.15	0.80	5.00	
7	S3−1	剥片	D7区 SK20	チャート	1.90	1.80	0.70	2.40	上部欠損
8	S1−2	剥片	D12区 SK2	チャート	2.55	2.90	0.60	4.30	
9	S4	剥片	SK33	チャート	6.30	4.50	2.00	36.80	

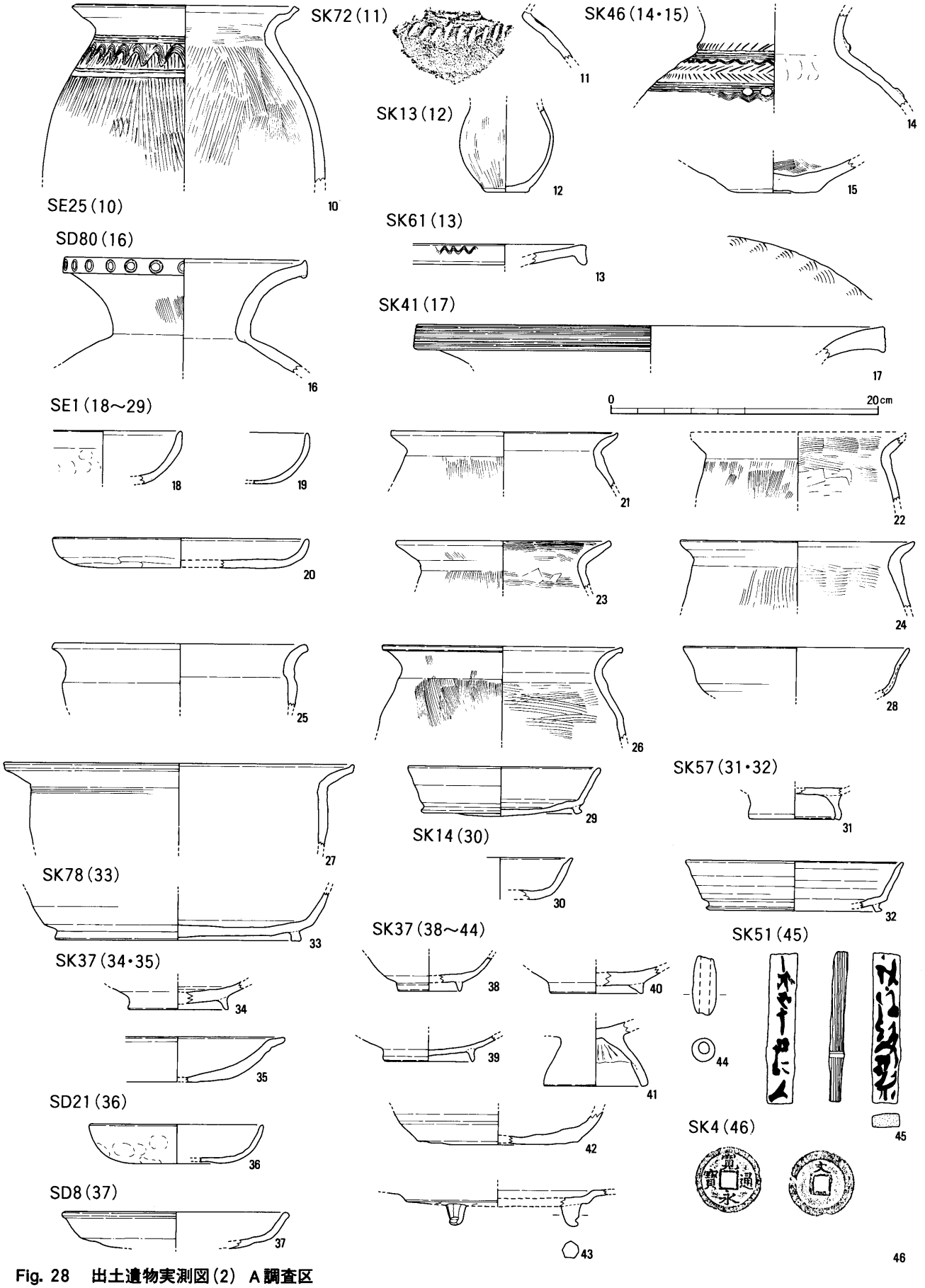


Fig. 28　出土遺物実測図(2)　A調査区

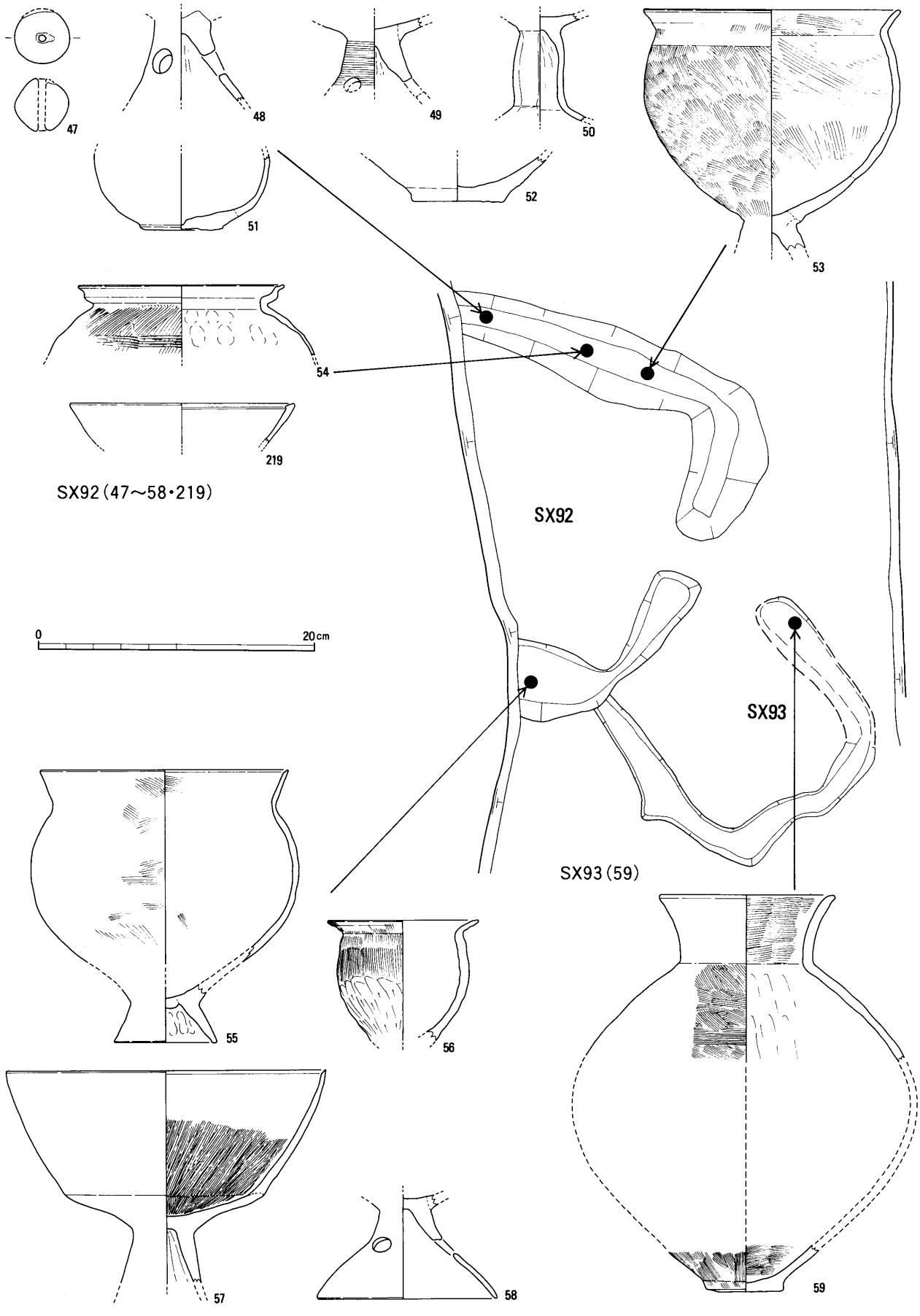


Fig. 29　出土遺物実測図(3)　B調査区　弥生

である。32は、口縁端部は、やや外反し尖り気味にまとめられている。体部～底部にかけては、強く屈曲し、断面方形の高台が貼り付けられている。

33は、SK78出土の須恵器杯身である。体部～底部にかけては、やや強く屈曲し、方形の高台が貼り付けられている。口径は、20cm以上のものとみられ大型のものである。猿投窯編年岩崎２５号窯式に相当する[5]。

F 鎌倉～室町時代

34・35はSK37の出土の陶器椀（山茶椀）と土師器皿である。34は渥美産のもので第5型式[6]とみられる。36は、SD21出土の土師器杯である。全体的に器壁は、薄く底部にユビオサエによる調整がされており、口縁端部は、丸くまとまる。37は、ＳＤ８出土の土師器皿である。

38～44は、SK65出土の土師器台付甕、灰釉陶器、山茶椀、土錘である。38･39･42･43は、灰釉陶器の一群でありそれぞれ椀、皿、甕、三足盤で、黒笹90号期[7]とみられる。40は、山茶椀であり渥美産の第５型式[8]とみられる。41は、台付甕の台部であり、古墳時代のものとみられる。44は土錘である。長さ4.4cm、幅1.8cm、孔径0.3cm、重さ10.2gの円筒形である。

G 江戸時代

45は、SK51出土の木簡である。長さ11.2cm、幅２cm、厚さ１cmである。表裏は不明であるが、判読が出来ない面が表側であろうとみられる。裏側の文字は「しずめ申す 円にん」と読める。何らかの呪符木簡である。

46は、SK4出土の「寛永通寶」である。裏面には『文』が記されている。

3 Ｂ調査区

B 弥生時代

47～58は、方形周溝墓93、59は、方形周溝墓92の周溝から出土したものである。

47は、丸玉状の土錘である。長さ3.8cm、幅4.0cm、孔径0.5～0.6cm、重さ50.1ｇである。

48～50は高杯である。全て脚部の破片であり、48･50は、全体的に風化著しい。49は、有稜高杯の脚部である。脚部には、櫛描直線文がめぐり、三方に透孔を持つ。

51は、壺底部とみられる破片である。

52は、壺の底部である。全体的に風化著しい。

53・55は、台付甕である。53は、頸部が緩やかに屈曲し、「く」の字形を呈し、口縁端部は、丸くまとめてある。

54は、S字状口縁台付甕の口縁部～体部にかけての破片である。口縁部の折り返しは、ほぼ垂直に立ち上がり、その後外方に向かって緩やかに広がり、口縁端部は、丸くまとまる。

55は、頸部は、緩やかな「く」の字形を呈し、口縁端部は丸くおさめ、内面に斜面を有する。外面をハケ、内面をナデによって調整されているが、磨滅が著しい。。

56は、小型の甕である。口縁部は、外方に向かって広がり、口縁端部を丸くおさめている。体部は、緩やかにまとまる。体部外面下半は、ヘラケズリ、上半は、ハケによって調整されている。

57は高杯である。高杯は、口縁部内面に斜面を有し、杯部全体が内弯する。脚部は、欠損しているものの全体としては長く、杯部同様内弯しているものと考えられる。外面は、風化による磨滅が著しい、内面は、ヘラミガキによって非常に精緻である。

58は、高杯の脚部である。風化が著しく、三方に透孔を持つ。

59は壺である。頸部は「く」の字に屈曲し、口縁端部は丸くおさまる。外面・内面共にハケによって調整されている。

219は、布留甕の口縁部の破片である。布留２型式とみられる。

出土土器の時期は、47～53･55～59は欠山様式中段階として考えられる。54・219は、欠山様式新段階のものとみられる[9]。

C 古墳時代

古墳時代の遺物は、他の時期の遺構の出土である。円筒埴輪（60～64）は、総数10点出土している。図化できるものを中心に掲載した。64は、底部片である。

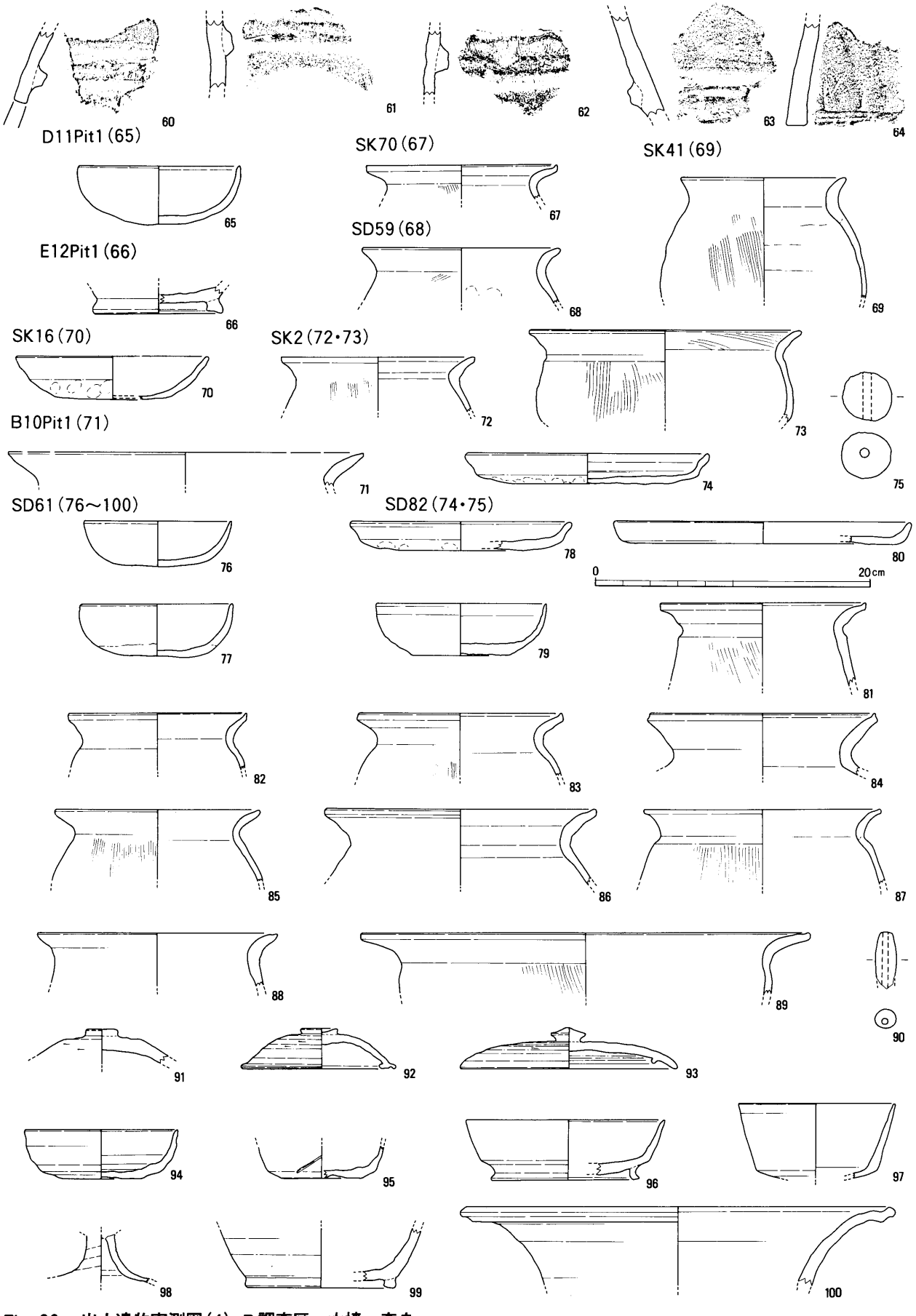


Fig. 30　出土遺物実測図(4)　B調査区　古墳・奈良

D 奈良時代

65･66･71は、柱穴から出土した。65は、土師器杯である。全体的にまるみを帯びる口縁部はやや尖り気味にまとまり、内斜面をもうけている。

66は、須恵器壺底部の破片である。高台は、断面台形を呈している。71は、土師器甕の口縁部片である。口縁端部はやや尖り気味に丸くまとまる。

67は、SK70出土の土師器甕である。口縁端部を上に拡張し、端面をつくっている。

68は、SD59出土の土師器甕である。口縁端部は、まるくまとまっている。

69は、SK41出土の土師器甕である。頸部が厚く肥厚し、「く」の字に屈曲し口縁端部はまるくまとまる。

70は、SK16出土の土師器杯である。口縁部は緩やかに外方に広がり、口縁端部は丸くまとまる。底部はユビオサエによって調整がなされている。

72・73は、SK16出土の甕である。72は、頸部が厚く肥厚し、口縁端部に端面を持ってまとまる。73は、口縁端部がやや尖り気味に丸くまとまる。

74・75は、SD82出土の土師器皿・土錘である。74は腰部での屈曲後内弯し、外方に開く。底部は、ユビオサエによって調整されている。75は長さ3.45㎝、幅3.65㎝、孔径 0.7㎝、重さ40.83 gの丸形の土錘である。

SD61からは、土師器杯・皿・長胴甕・土錘、須恵器蓋・身・椀・高杯・甕が出土した。

土師器杯76は口縁端部が尖り気味にまとまる。77は、丸くおさめる。体部は両者共に緩やかな曲線を描くようにまとまる。

土師器皿79は口縁端部が外反し、丸くおさまる。80は、腰部が肥厚し口縁端部は、丸くまとまる。

81～88は土師器甕である。頸部がくの字状に外反し、口縁端部が尖り気味におさまるもの(88)、丸くおさまるもの(85･87)、頸部がくの字状に外反して口縁端部を上方につまみあげ、端部外面に端面をもつもの(81)、凹面状になるもの(83･84) がみられる。

89は土師器長胴甕である。口縁部を肥厚させ口縁端部を上方につまみあげている。

90は土錘である。長さ 4.1㎝、幅 1.5㎝、孔径0.45㎝、重さ7.72gの円筒形を呈する。

92･93は、須恵器杯蓋である。口縁内部にかえりをもち、天井部に宝珠つまみをもつ。92は傘状に広がる、93は92と比較して緩やかに広がる。91は天井部に宝珠つまみを有するが、口縁部が欠損している。

94は杯身である。腰部が緩やかに屈曲し、体部が直線的にのび、口縁端部が若干外反する。焼成不良のため生焼の様相を呈している。95も腰部が緩やかに屈曲する。96は、口縁端部が尖り気味にまとまり、腰部でやや強く屈曲する。底部は、やや厚く外方に弯曲した高台が貼り付けられている。

97は椀である。体部～口縁部にかけて直線的に立ち上がり、口縁端部は尖り気味にまとまる。

98は高杯であり、脚部のみ残る。無蓋高杯とみられる。

99は長頸壺の底部とみられる。高台は断面方形のものがとりつく。

100は甕である。口縁端部が外反した後に上方につまみあげられ、丸くまとまる。

SD80からは、須恵器広口甕・杯・細頸壺・長頸壺・横瓶・甕・短頸壺、土師器杯・甕が出土した。

101～103は土師器皿である。 101は底部～体部にかけて緩やかに傘状に広がる。口縁端部は、丸くおさめてある。 102は、底部～体部にかけて明瞭に屈曲している。底部～体部中程は肥厚し、口縁端部は若干尖り気味に丸くまとめている。 103は、底部～体部にかけての緩やかであるが、屈曲させている。口縁端部は尖り気味に外反させる。

104は土師器杯である。 104は、底部～体部にかけて明瞭に屈曲している。口縁端部は内側に肥厚し、丸くおさめる。底部は、ユビオサエで調整している。

105は、土師器甕ないし長胴甕の口縁部の破片と見られる。 105の頸部は、肥厚し「く」字に屈曲している。口縁端部は、上方に肥厚し内反させている。

106は、内面にかえりを有しない須恵器杯蓋である。口縁部付近まで緩やかに傘状に広がり、口縁部を折り曲げている。

107は、須恵器杯身である。口縁端部は、尖り気味にまとめ、内面に斜面をもっている。体部は、ロクロナデによって調整され、高台は、ハの字形になるように外方にむけられて貼り付けられ、非常に精

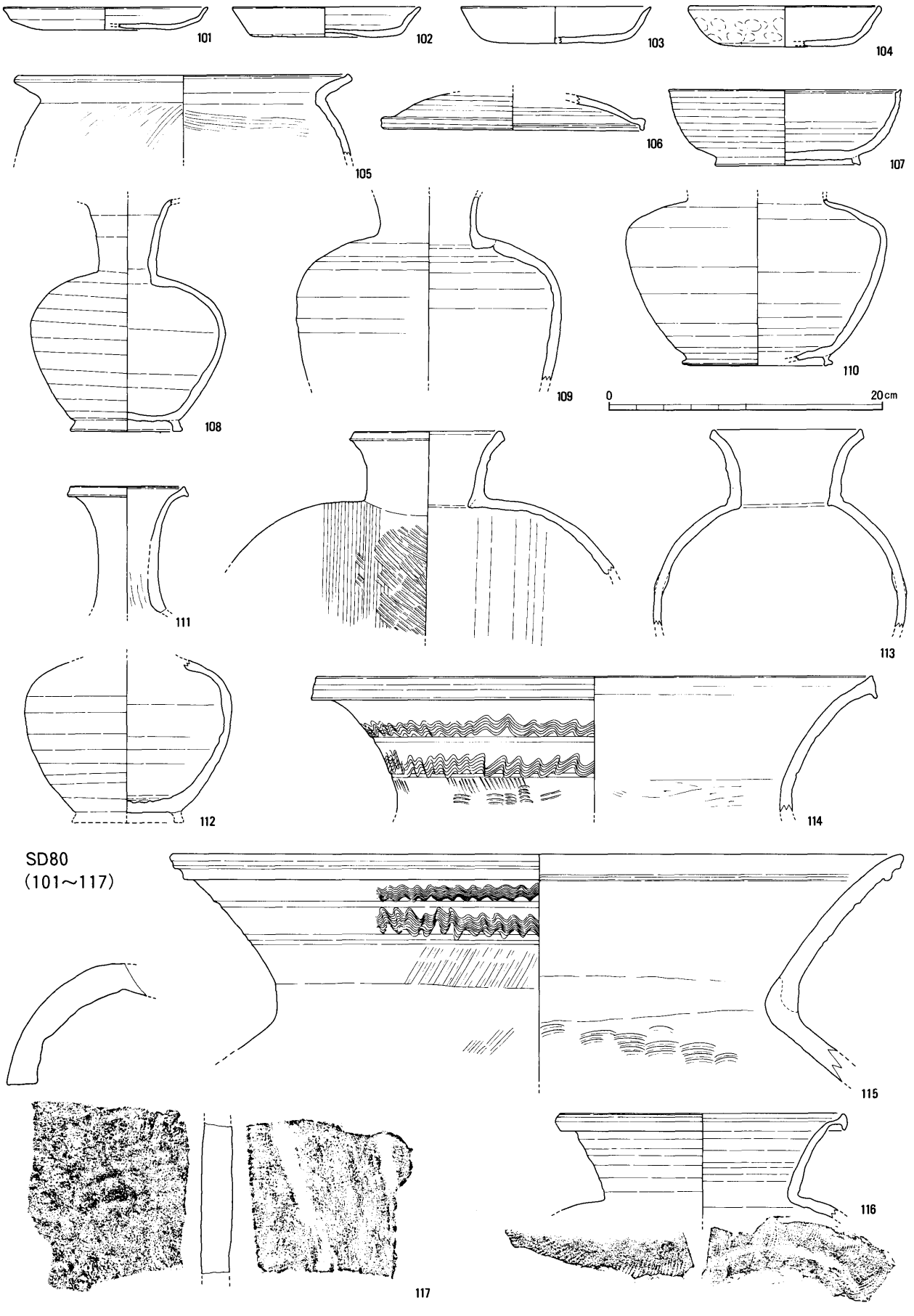


Fig. 31　出土遺物実測図(5)　B調査区　奈良

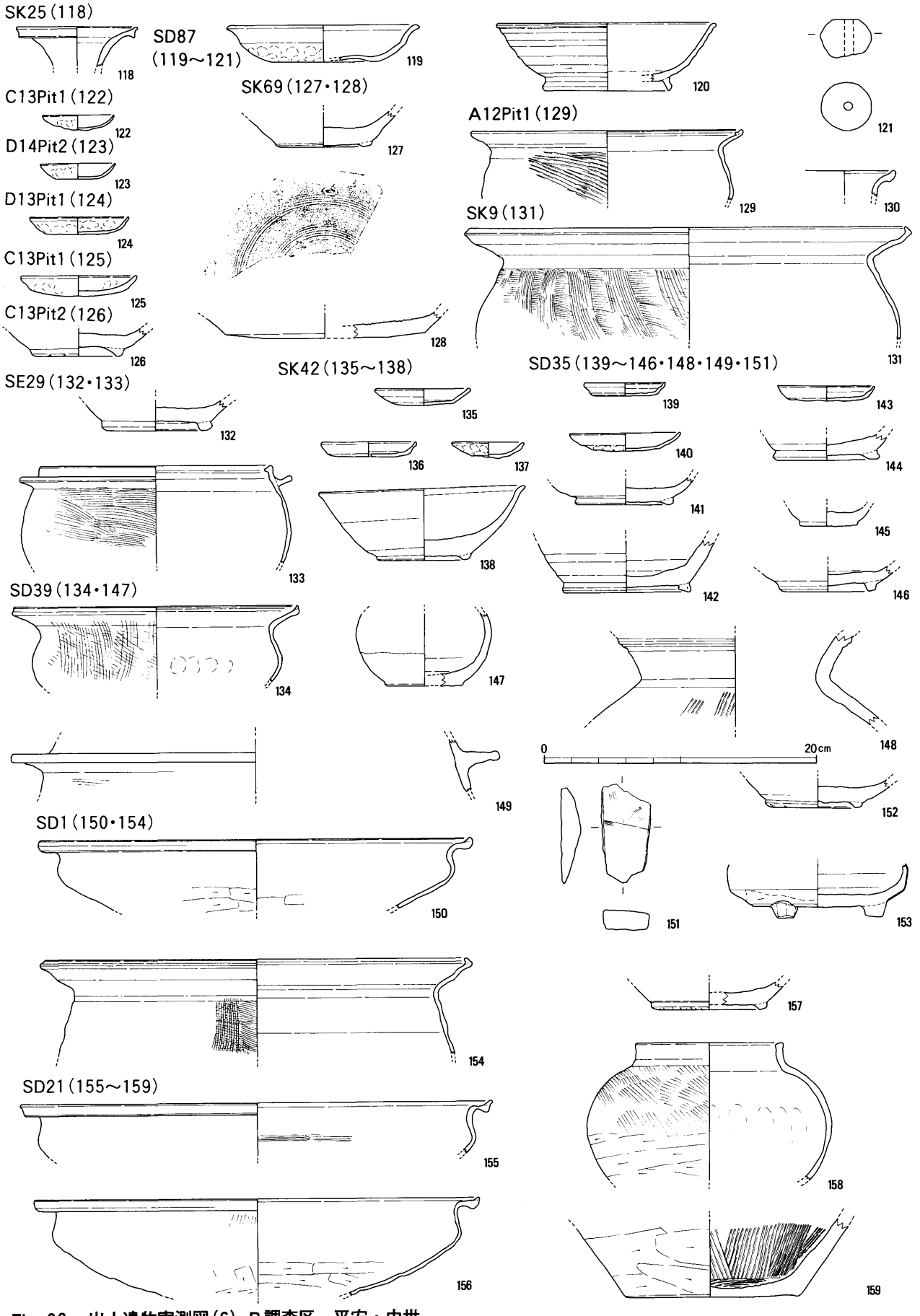


Fig. 32　出土遺物実測図(6)　B調査区　平安・中世

緻なつくりをしている。三重県下で同様のものはなく、類例としては斎宮跡から高台の無いものが出土している。

108は、細頸壺である。球形の体部に断面方形の高台が付く。頸部は緩やかに外方に向けて開き、残存部分付近で口縁部がくる。

109は、須恵器長頸壺ないし短頸壺の破片である。口縁部と底部は欠損している。肩部は緩やかに傾斜している。

110は、須恵器短頸壺とみられる。体部上方で緩やかに屈曲してほぼ球形を呈し、台形状の高台がとりつく。口縁端部は短く直立する。

111は、長頸壺の口縁である。口縁端部は下方に肥厚し、広い端面を持つ。

112は、長頸壺である。ほぼ球形の体部に高台が貼り付けられていたと考えられる。肩部に自然釉が掛かっている。

113は、横瓶である。縦方向にカキメを施している。

114は、須恵器広口甕の口縁部片である。口縁端部を下方に垂下させ、口縁外面に波状文を施す。沈線は、波状文下に施される。

115は、広口甕の口縁部の破片である。口縁端部は丸くおさめ、口縁端部直下で張り出す部分がある。波状文、沈線、波状文、2重の沈線の装飾があり、頸部は、ロクロナデにより調整されている。体部は、外面に平行タタキ目痕と内面に同心円文がある。

116は、須恵器甕の口縁～体部の破片である。口縁部を上下に引き延ばして端面をつくる。体部外面は平行タタキ、内面は、同心円文の当て具痕を残す。

117は丸瓦である。風化が著しく、布目をわずかに確認できる程度である。

SD80出土遺物は、猿投窯編年岩崎25号窯式に併行するものとみられる。[10]

E 平安時代

118は、SK25出土の灰釉長頸壺である。口縁端部は上下に肥厚し、凹面をつくりだしている。

119～121は、SD87出土の土師器杯、灰釉陶器椀、土錘である。119は、全体的に器壁が薄く、底部はユビオサエによって調整されている。120は、口縁端部は、外反して丸くおさめられている。高台は、三角形に近く貼り付けられている。121は、長さ2.8㎝、幅3.5㎝、孔径0.6㎝、重さ37.06gの丸玉状である。

灰釉陶器は猿投窯編年黒笹90号窯式に相当する。[11]

F 鎌倉～室町時代

122～126は各柱穴出土である。122～125は土師器小皿である。126は山茶椀であり、時期は尾張型第6型式[12]とみられる。

127・128は、SK69出土の山茶椀・陶器盤である。127は渥美型第6型式とみられる。128は古瀬戸の盤とみられ、内面に櫛目の装飾が施されている。15世紀後半のものとみられる。

129・131は、SK9出土の南伊勢系土師器鍋である。伊藤裕偉氏編年（以下伊藤編年[13]）の第3段階～第4段階のものとみられる。

130は、SK14出土の南伊勢系土師器鍋である。伊藤編年の第4段階c型式とみられる。

132・133は、SE29出土の山茶椀、土師器羽釜である。132は、渥美型第6型式とみられる。羽釜も同時期とみられる。

135～138は、SK42出土の土師器小皿、山茶椀である。138は、渥美型第6型式とみられる。

139～146・149・151はSD35出土の土師器小皿、山茶椀、羽釜、灰釉陶器壺、須恵器甕である。山茶椀は、尾張型ないし渥美型第6～7型式とみられる。142は灰釉陶器の壺底部片とみられる。148は、須恵器甕である。142・148共にSD35埋没時の混入と考えられる。151は砥石である。両面共にすりへっている。

134・147は、SD39出土の南伊勢系土師器鍋、陶器壺である。134は、伊藤編年の第4段階とみられる。147は茶入小壺とみられ15世紀後半以降のものとみられる。

150は、SK13出土の南伊勢系土師器鍋である。第4段階とみられる。

152・153はSD70出土の山茶椀、陶器香炉とみられる。152は、渥美型第6型式。153は古瀬戸香炉の底部片であり、15世紀後半のものとみられる。

154～158は、SD10出土の南伊勢系土師器鍋、

山茶椀、茶釜である。南伊勢系土師器鍋は、第４段階とみられる。157は山茶椀で、渥美型第６型式とみられ、SD10掘削時に紛れ込んだとみられる。

159はSD21出土の擂鉢である。瀬戸の15世紀後半のものとみられる。

160～181は、SD40・48出土の土師器小皿、南伊勢系土師器鍋、土師器羽釜、山茶椀、白磁椀である。山茶椀は、尾張型ないし渥美型の第６～７型式とみられる。南伊勢系土師器鍋は、第３段階のものである。175は、白磁椀で10世紀後半～11世紀のもので、溝への混入とみられる。

182～187はSD51出土の山茶椀、須恵器壺底部、土師器甕、緑釉陶器である。182～184は、尾張型・渥美型第6～7型式とみられる。185は、須恵器の壺底部である。186は土師器甕である。187は緑釉陶器の底部で、９世紀後半のものとみられる。

188～190はSD54出土の山茶椀、土師器甕、須恵器甕である。188は尾張型第７型式のものとみられる。189は口縁端部は、上方に肥厚させ、端面を作っている。体部はハケによる調整である。190は口縁端部を下方に肥厚させ、端面をつくっている。口縁部は上から沈線２条、刺突文、沈線３条を巡ら

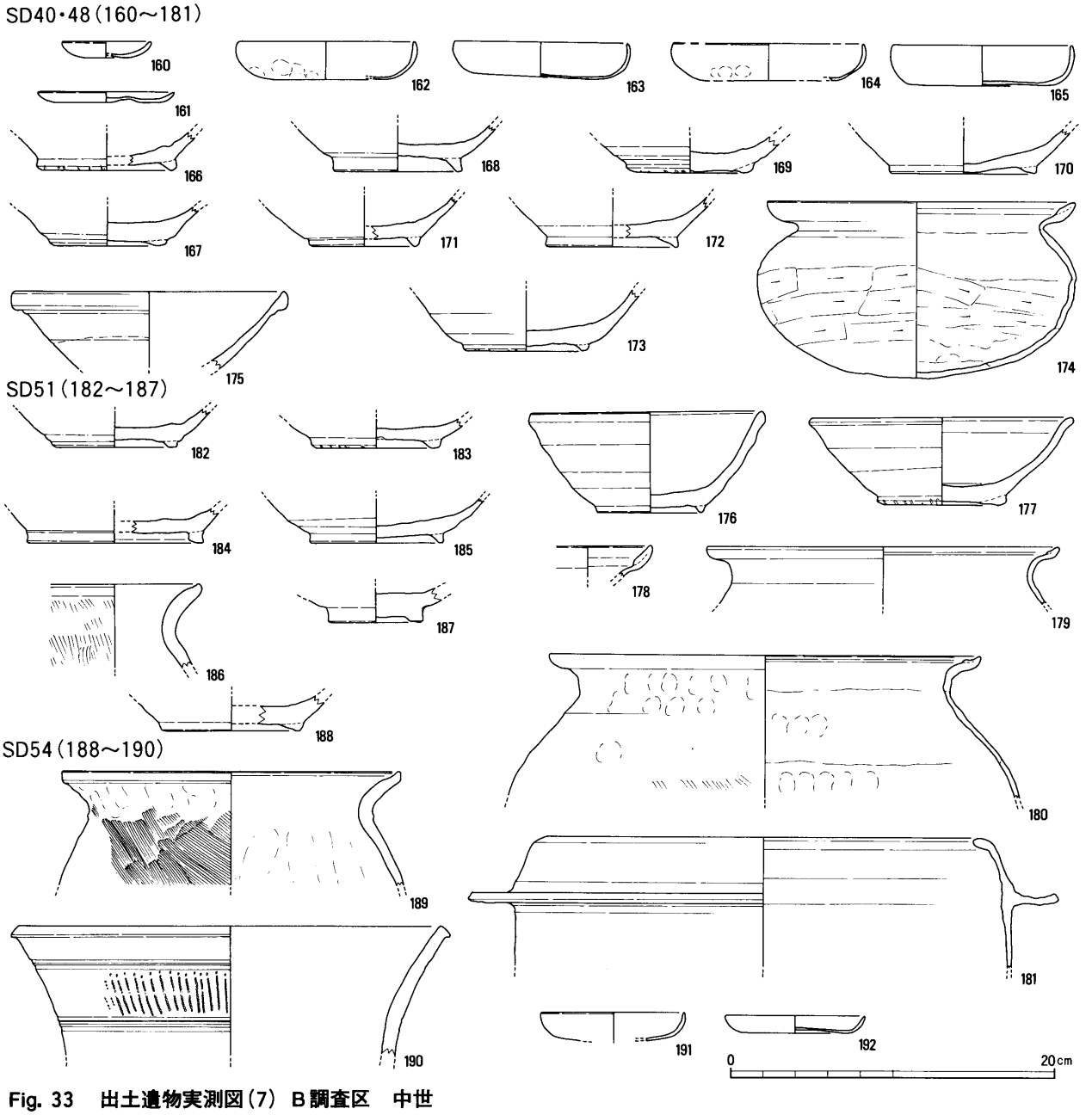


Fig. 33　出土遺物実測図(7)　B調査区　中世

している。猿投窯岩崎25号窯式を前後するものとみられる。189・190はSD54の埋没時の混入とみられる。

191・192は、SX63出土の土師器小皿である。共に器壁は、薄い。

G 江戸時代

陶器椀・皿、磁器椀が出土している[14]。

193は、c13pit12出土の陶器皿である。見込みには、笹ないし菖蒲類の草花が鉄釉によって描かれている。その他は灰釉による。瀬戸・美濃系で19世紀のものとみられる。

194は、B13pit5出土の天目茶碗である。口縁端部は、緩やかに外反し丸くおさまる。瀬戸大窯の第3段階の後半に属し、16世紀後半のものとみられる。

195は、B13pit4出土の唐津系の陶器丸椀である。文様は、内外面共に刷毛目状である。17世紀末～18世紀後半のものである。

196は、A14pit端反形の小杯である。文様は蝶が5個描かれている。肥前系とみられ、18世紀後半～19世紀後半のものとみられる。

197は、D13 pit 5出土の砥石である。

198は、C13 pit12出土の煙管の雁首である。脂返しの部分は欠損している。

199はSK30出土の陶器盤である。全体的に器壁は、厚い。底部は、ケズリによって調整されている。瀬戸・美濃系で、19世紀代のものとみられる。

200・202・203はSD65出土の磁器蓋、陶器椀である。200は肥前系の蓋である。文様は、人物・動物（牛？）・柳・草花類によって構成されている。18世紀後半以降のものとみられる。202は陶器椀である。半筒形で、高台部を除き灰釉が掛けられてい

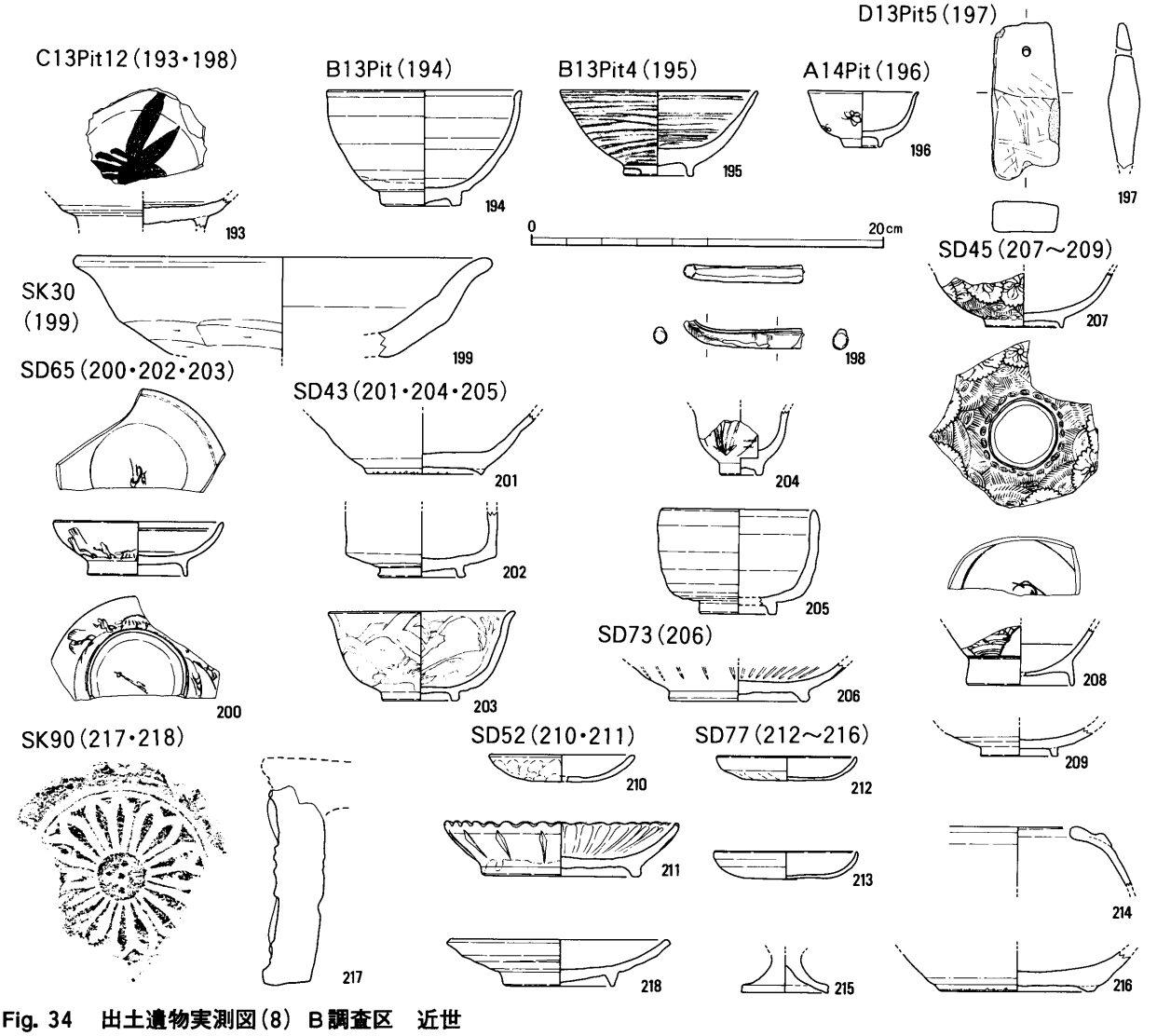


Fig. 34　出土遺物実測図(8) B調査区　近世

る。全体的に貫入が著しい。産地は瀬戸・美濃系とみられ、18世紀以降のものとみられる。203は陶器椀である。装飾は、内外面に白泥・鉄泥によるイッチン掛けで、釉薬は透明である。萩焼とみられ、19世紀以降のものである。

204・205は、SD43出土の磁器小杯、陶器椀である。204は磁器小杯である。文様は、菖蒲類の草花である。瀬戸・美濃系とみられ、19世紀以降のものである。205は陶器椀である。高台部を除き全面に鉄釉が掛けられている。高台はケズリ出しによる。瀬戸・美濃系で18世紀前半～19世紀後半のものとみられる。

206はSD73出土の陶器皿である。型打による成形で、菊花形を呈する灰釉皿である。瀬戸・美濃系のものとみられ、17世紀後半～18世紀のものである。

207～209はSD45出土の磁器、陶器である。207は磁器の紅猪口とみられる。文様は、水・渦巻・牡丹類の草花である。肥前系とみられ、18世紀後半のものである。208は広東形の椀である。文様は、破片が小さいために明瞭でない。肥前系とみられ、18世紀後半～19世紀後半のものである。209は陶器椀である。高台部を除き全面に灰釉を施す。全体的に貫入が著しい。瀬戸・美濃系であり、18世紀以降のものである。

210・211はSD52出土の土師器小皿、陶器皿である。211は、SD52出土の陶器皿である。型打による成形で、菊花型を呈する灰釉皿である。瀬戸・美濃系のものとみられ、17世紀後半～18世紀のものである。206と同様のものである。

212～216は、SD77出土の土師器小皿、土師器羽釜、山茶椀、陶製仏餉具である。212～214・216はSD77埋没時の紛れ込みとみられる。215は陶製仏餉具である。釉薬は褐色を呈し、瀬戸・美濃系とみられ、17世紀後半以降のものとみられる。

217は、SK90出土の複弁重弁八葉蓮華文軒丸瓦である。瓦当径（推定）14cm、中房径2.7cmとやや小型である。中房の蓮子は1＋4である。外区に珠文はない。周縁は無文出あり、内斜面はやや外彎する。外区部分に文様はない。この瓦は複弁から単弁に変化する過程のものとみられる。時期は8世紀第2・四半期頃のものとみられる。当型式例は、三重県下初出[15]である。

218はSK90出土の灰釉陶器小皿である。丸形底広の器形をしており全面に灰釉が掛かっている。瀬戸・美濃系のもので17世紀後半～18世紀のものとみられる。（萩原義彦）

註

①②③④⑨ 弥生土器に関しては、以下の文献を参考とした。
山田猛「山城遺跡・北瀬古遺跡」三重県埋蔵文化財センター 1994年

⑤⑩ 須恵器に関しては、以下の文献を参考とし、今回の調査の出土須恵器は、猿投窯編年によった。
田辺昭三「陶邑古窯址Ⅰ」平安学園考古学クラブ 1966年
また猿投窯編年については、次の文献を参考とした。
斎藤孝正「猿投・美濃須衛」『季刊 考古学』 第42号 雄山閣 1993年
斎藤孝正・後藤健一編 「須恵器集成図録」第3巻東日本編Ⅰ 1995年
古代の土器研究会編 「7世紀の土器 古代の土器5－1（近畿東部・東海編）」1997年

⑥⑧ 山茶椀に関しては、以下の文献を参考とした。
藤澤良祐「瀬戸古窯址群Ⅰ」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅰ』 1991年

⑦⑪ 灰釉陶器については、以下の文献を参考にした。
斎藤孝正「猿投窯における灰釉陶器の展開」『考古学ジャーナル No211』ニューサイエンス社 1982年

⑬ 伊藤裕偉「南伊勢系の土師器に関する一試論」『Miehistory』vol. 1、三重歴史文化研究会 1990年

⑭ 近世陶磁器については、以下の文献を参考にした。新宿区内藤町遺跡調査会「内藤町遺跡」第Ⅱ分冊〈I遺物編〉1992年

⑮ 三重県の古瓦刊行会「三重県の古瓦」1996年

Tab. 6　出土遺物観察表

報告書番号	登録番号	器種	出土位置 遺構	計測値（cm） 口径	計測値（cm） 器高	成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
10	027-02	弥生土器　甕	B5 SK25	16.4	残高 13.2	内面ハケ、口縁部ヨコナデ 外面ハケ	やや粗（～3㎜の砂粒含む）	並	にぶい黄橙色 10YR7/3	—	体部外面に沈線、波状文の装飾
11	002-05	弥生土器　壺	A1 SK72	—	—	内外面ナデ	やや粗（～4㎜の石含む）	並	にぶい橙 7.5YR6/4	—	外面肩部に刺突文
12	028-04	弥生土器　壺	C4 SK13	底径 3.2	残高 6.5	内面ナデ、外面ヘラミガキ後ナデ、底部ナデ	やや密	並	にぶい黄橙色 10YR7/2		
13	014-04	弥生土器　壺	D2 SK61	—	—	内外面ナデ	やや粗（～4㎜の石含む）	並	内　橙5YR6/6 外　にぶい橙 7.5YR6/4	—	口縁端部に波状文
14	040-01	弥生土器　壺	C4 SK46	—	—	内面ナデ	やや粗（～3㎜砂粒を含む）	並	淡黄色 2.5Y8/3	—	体部外面に、刻目、櫛描直線文、波状文、円形浮文の装飾と同一個体15と同一個体
15	002-03	弥生土器　壺	B4 SK46	底径 7.2	—	外面ナデ 内面ハケ	粗（～3㎜の石含む）	並	黄灰色 2.5Y6/1	底部 約50%	
16	026-02	弥生土器　壺	SD80	18.2	残高 8.0	内面風化著しい、口縁端部ヨコナデ、頸部ハケ	やや粗（～3㎜の小石含む）	並	浅黄橙色 10YR8/3	口縁部のみ残	口縁端部に横線6条施文
17	025-01	弥生土器　壺	B4 SK41	(35.2)	残高 2.2	内面ヨコナデ 外面ヨコナデ	やや粗（～3.5㎜の小石含む）	並	内　浅黄橙色 7.5YR8/4 外　浅黄色 2.5Y8/3	—	
18	046-05	土師器　杯	SE1	—	残高	内外面ナデ、外面体部ユビオサエ	やや密（～2㎜の小石含む）	並	にぶい橙 7.5YR7/4	—	
19	027-05	土師器　杯	SE1	—	—	剥離著しい	やや密（～1.5㎜の砂粒含む）	並	灰白色 2.5Y8/2	—	
20	034-03	土師器　皿	SE1	19.2	2.2	内外面ナデ、外面体部ケズリ、底部ナデ	やや密（～1㎜の小石含む）	並	浅黄橙色 7.5YR8/6	約10%	
21	007-04	土師器　甕	SE1	17.0	残高 4.2	外面ハケ、外面端部～内面ヨコナデ	密	やや不良	淡橙色 5YR8/3	—	
22	033-02	土師器　甕	SE1	—	残高 4.8	体部ハケナデ内面体部ケズリ、内面口縁部ハケ、外面口縁部ヨコナデ、外面体部ハケ	やや密（～1㎜の小石含む）	並	褐灰色 10YR5/1	—	
23	028-03	土師器　甕	SE1	16.2	残高 3.6	内面ハケ、外面口縁部ヨコナデ、外面体部ハケ	やや密 7.5YR4/1	並	褐灰色	—	
24	041-01	土師器　甕	SE1	17.5	残高 5.0	内面ハケ、口縁部ヨコナデ 外面ハケ	やや密（～1.5㎜の砂粒を含む	並	浅黄橙色 10YR8/3	—	
25	033-03	土師器　甕	SE1	19.3	残高 4.6	風化著しいく調整不明	やや粗（～3㎜の小石含む）	並	灰白色 10YR8/2	—	
26	008-02	土師器　甕	SE1	18.0	残高 7.0	外面ハケ、口縁端部ヨコナデ、内面ヨコハケ	やや粗（細砂含む）	やや不良	内 外	—	
27	034-02	土師器　長胴甕	SE1	26.4	残高 6.1	風化著しいく調整不明の小石含む）	やや粗（～1㎜ 10YR7/3	並	にぶい黄橙色	—	
28	042-02	須恵器　杯	SE1	17.0	残高 3.6	内外面ロクロナデ	やや密	良	内　灰　N6/1 外　灰　N5/	約10%	部分的に赤褐色を呈する、全体的に使用痕跡を留める
29	005-02	須恵器　杯	SE1			内面～外面体部ロクロナデ 底部ロクロケズリ	密	並	褐灰色 10YR4/1	約10%	
30	006-03	土師器　杯	C4 SK14	—	残高 3.1	内外面ナデ	密	並	浅黄橙色 7.5YR8/6	—	
31	012-03	土師器　台付杯	C2 SK57	底径 6.8	残高 2.4	内面ナデ、高台部ヨコナデ	ほぼ密（～1㎜の小石含む）	並	浅黄橙色 7.5YR8/3	—	
32	011-05	須恵器　杯	C2 SK57	16.3	3.7	内外面ロクロナデ	ほぼ密（～3㎜の小石を含む）	並	内　灰白色　N7/ 外　灰色　5Y4/1	約30%	
33	027-01	須恵器　杯	B5 SK78	高台径 17.2	残高 3.6	内面ロクロナデ 外面底部ロクロケズリ	やや密（～2㎜の砂粒を含む）	良	灰白色 5Y7/1		
34	038-04	陶器椀（山茶椀）	B5 SK65	高台径 7.4	残高 2.0	内外面ロクロナデ	密	並	灰白色 2.5Y8/1	底部のみ残	
35	039-04	土師器　皿	B5 SK37	—	残高 3.4	風化著しく調整不明	やや密（～2㎜の小石含む）	並	内　淡赤褐色　2.5YR7/4 外　にぶい橙色　5Y6/4	—	
36	040-07	土師器　皿	C6 SD21	13.0	2.9	内外面ナデ、体部外面指オサエ	やや粗（～2㎜の砂粒を含む）	並	浅黄橙色 7.5YR8/3	約30%	

Tab. 7　出土遺物観察表

報告書番号	登録番号	器種	出土位置 遺構	計測値（cm） 口径	計測値（cm） 器高	成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
37	002-04	土師器　皿	B3 SD8	17.1	残高 2.7	口縁部ヨコナデ 内外面ナデ	やや密 10YR7/3	並	にぶい黄橙	約10%	
38	039-06	灰釉陶器　椀 K90	A4 SK65	高台径 4.6	残高 2.6	内面～外面体部ロクロナデ 高台部～底部ロクロナデ	密（～1㎜の小石含む）	並	内　灰白色　10YR8/1 外　灰オリーブ色7.5Y6/2	底部のみ残る	体部外面に自然釉付着
39	038-03	灰釉陶器　皿	A4 SK65	高台径 6.6	残高 2.0	内外面ロクロナデ、高台部貼り付け後ヨコナデ	密	並	灰白色 2.5Y8/1	底部のみ残る	
40	032-04	陶器椀（山茶椀）	A4 SK65	高台径 7.1	残高 2.0	内面ロクロナデ、外面体部ロクロナデ、高台部ナデ、底部糸切り痕	やや密（～5㎜の小石含む）	並	灰白色 5Y8/1	—	
41	014-02	土師器　台付甕	A4 SK65	底径 7.1	残高 4.8	内外面ナデ	やや粗（1～2㎜の石含む）	並	灰黄色 10YR8/1	—	
42	032-03	灰釉陶器　甕	A4 SK65	底径 12.0	残高 2.5	内外面ロクロナデ、底部ロクロケズリ	やや密（～5㎜の小石含む）	並	灰白色 5Y8/1		
43	013-04	灰釉陶器　三足盤	A4 SK65	—	残高 2.8	内面ロクロナデ、外面ロクロケズリ後脚貼り付け、ロクロナデ	密（微砂含む）	並	灰白色 2.5Y8/2		
48	023-02	弥生土器　高杯	C18 SD58	—	残高 6.5	風化著しく調整不明	やや粗（～3㎜の小石含む）	並	にぶい橙色 5YR7/4	—	三方に透孔
49	046-04	弥生土器　高杯	C18 SD58	—	残高 5.0	内面ナデ、脚部外面ナデ	やや粗（～5㎜の小石含む）	並	橙色 7.5YR7/6	約20%	脚部に櫛描直線文、三方に透
50	016-06	弥生土器　高杯	C18 SD58	—	残高 6.9	風化著しく調整不明	やや密（1㎜以下の砂粒含む）	並	内　にぶい橙色7.5YR7/4 外　浅黄橙色 7.5YR8/3	—	
51	046-03	弥生土器　瓠壺	E18 SD58	底径 6.1	残高 5.5	内面～外面ナデ	やや粗（～7㎜の小石を含む）	並	内　にぶい橙色 7.5YR6/4 外　褐灰色 10YR4/1	約30%	全体的に風化著しい
52	043-03	弥生土器　壺	D18 SD58	底径 6.6	残高 3.2	内面～外面ナデ	粗（～8㎜の小石含む）	並	浅黄色 2.5Y8/3	底部のみ残る	
53	034-01	弥生土器　台付甕	D18 SD58	18.8	残高 17.5	内面下半ナデ、上半ハケメ 外面口縁部ヨコナデ、体部ハケメ、脚部ナデ	やや粗（～3㎜の小石含む）	並	にぶい黄橙色 10YR7/2	約60%	
54	046-02	土師器　甕	C17 SD58	15.1 推定	残高 5.1	内面ユビオサエ、ナデ、口縁部ヨコナデ、外面体部ハケメ	やや粗（～2.5㎜の小石含む）	並	にぶい橙色 7.5YR7/3	口縁部一部残	
55	046-01	弥生土器　台付甕	D17 SD58	18.2 底径 7.5	—	内面ナデ、口縁部内面ハケ口縁端部ナデ、体部外面ハケ、台部ナデ、ユビオサエ	やや粗（～6㎜の小石含む）	並	にぶい橙色 5YR7/4	約70%	全体的に風化著しい
56	024-03	弥生土器　甕	D15 SD37	11.0	残高 8.7	内面タテナデ、外面体部下半ケズリ、体部上半ハケ	やや粗（～5㎜の小石含む）	並	橙色 5YR6/8	約50%	
57	026-01	弥生土器　高杯	D15 SD37	23.4	残高 15.5	内面ミガキ、内面上半～外面風化著しく調整不明	粗（3～5㎜前後の小石含む）	並	橙色 5YR7/6	約80%	
58	045-03	弥生土器　高杯	D15 SD37	底径 13.1	残高 7.6	風化著しく調整不明	粗（～5㎜の小石含む）	並	にぶい橙色 5YR7/4	—	
59	017-01	弥生土器　壺	B15 SD37	12.7 底径 5.5	—	内面底部ハケメ、体部ユビオサエ、口縁部ヨコハケ、外面底部ナデ、体部ハケメ口縁部ヨコナデ	やや粗（～3㎜前後の小石の含む）	並	内　にぶい橙色 5YR6/4 外　にぶい橙色 7.5YR7/4	約40%	
60	044-03	円筒埴輪	SD77	—	—	内面ナデ、外面タテハケ、突帯部ヨコナデ	粗（～2㎜の小石含む）	並	橙色 5YR7/6	—	透孔（円形）
61	013-03	円筒埴輪	D24 SD79	—	—	風化著しく調整不明	やや粗（～3㎜の小石含む）	並	浅黄橙色 10YR8/4	—	
62	013-02	円筒埴輪	D24 SD77	—	—	内面ナデ、ユビオサエ 外面風化著しく調整不明	やや粗（～2㎜の小石含む）	並	浅橙色 5YR8/4	—	
63	027-04	円筒埴輪	C25 SD82	—	—	内面ナデ、外面ナデ、突帯部ナデ	やや粗（～2.5㎜の小石含む）	並	内　橙色 7.5YR8/4 外　浅黄橙色 7.5YR7/6	—	
64	013-01	円筒埴輪	C26 SD82	—	—	内面ナデ、外面タテハケ、底部ヨコナデ	粗（～3.5㎜の小石含む）	並	橙色 7.5YR7/6	—	円筒埴輪の底部
65	004-01	土師器 杯	D11 Pit1	11.7	4.5	風化著しく調整不明	やや粗（～1㎜の小石含む）	並	灰白色 10YR8/2	約70%	
66	036-06	須恵器 壺	E12 Pit3	底径 9.1	残高 1.9	内面ロクロナデ、外面底部糸切り、高台部ナデ		良	灰白色 2.5Y7/1	—	

Tab. 8　出土遺物観察表

報告書番号	登録番号	器種	出土位置 遺構	計測値（cm） 口径	計測値（cm） 器高	成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
67	007-03	土師器　甕	E20 SK70	14.0	残高 2.5	内面ナデ、外面ハケ	密	やや不良	内　にぶい橙色7.5YR7/4 外　にぶい橙色5YR7/4	—	
68	017-03	土師器　甕	SD59	14.3	残高 4.0	風化著しく調整不明	密	並	内　浅黄橙色 2.5Y7/4 外　浅黄橙色 5YR5/1	—	
69	029-01	土師器　甕	D12 SK41	12.0	残高 8.7	内面ナデ、口縁部ヨコナデ外面ハケメ	やや密（1㎜以下の砂粒含む）	並	内　淡橙色 5YR8/3 外　灰白色 10YR8/2	—	
70	023-01	土師器　杯	A12 SK16	14.2	3.15	内面～口縁部ナデ、外面体部～底部ユビオサエ	やや密（～2㎜の小石含む）	並	橙色 5YR7/6	約30%	
71	029-05	土師器　甕	B10 Pit1	25.8	残高 2.3	ヨコナデ	やや密（微砂含む）	並	橙色 5YR6/6	—	
72	008-03	土師器　甕	D11 SK2	14.2	残高 4.0	外面体部ハケ	やや粗（1㎜前後の砂粒含む）	やや不良	内　灰黄褐色 10YR6/2 外　浅橙色 5YR8/4	—	
73	012-02	土師器　甕	D12 SK2	19.8	残高 6.8	内面ナデ、口縁部ハケ、外面口縁部ヨコナデ、体部ハ	ほぼ密（～3㎜の小石含む）	並	内　浅黄色 2.5Y8/3 外　にぶい黄橙色 10YR7/4	—	
74	010-05	土師器　皿	B26 SD82	17.6	2.2	内面ナデ、外面ナデ、ユビオサエ	やや密（微砂含む）	並	橙色 5YR6/6	約40%	
76	020-03	土師器　杯	E19 SD61	10.8	3.3	内面ナデ、口縁部ヨコナデ外面風化著しく調整不明	やや粗（～2.5㎜の砂粒含む）	並	浅黄橙色 10YR8/3	ほぼ完形	
77	027-03	土師器　杯	E19 SD61	11.2	3.8	内外面ナデ	やや粗（～3㎜の砂粒含む）	並	浅黄橙色 10YR8/3	ほぼ完形	
78	024-02	土師器　杯	D19 SD61	12.4	3.8	風化著しく調整不明	やや粗（～4㎜の小石含む）	並	内　浅黄色 2.5Y8/3 外　灰褐色　5YR5/2	ほぼ完形	
79	019-03	土師器　皿	E19 SD61	16.1	2.1	内面ナデ、内面口縁部～外面口縁部ヨコナデ、外面底部ユビオサエ、ナデ	やや密（～1㎜の砂粒含む）	並	内　浅黄橙色 10YR8/4 外　橙色 5YR6/6	約30%	
80	041-04	土師器　皿	E19 SD61	21.8	1.6	内面～外面ナデ	やや密	並	内　橙色 5YR7/6 外　浅黄橙色 7.5YR8/6	約50%	
81	014-04	土師器　甕	B18 SD61	15.1	残高 6.0	内面体部ナデ、口縁部ヨコナデ、外面体部ハケメ	やや粗（1～2㎜の小石含む）	並	にぶい淡橙色 10YR7/2	—	
82	008-04	土師器　甕	D19 SD61	13.0	残高 4.2	風化著しく調整不明	やや粗（～1㎜の砂粒含む）	やや不良	内　にぶい橙色7.5R6/4 外　にぶい赤褐色5R5/3	—	
83	019-03	土師器　甕	D19 SD61	14.8	残高 4.6	風化著しく調整不明	やや粗（～2㎜の砂粒含む）	並	浅黄橙色 10YR8/3	—	
84	020-04	土師器　甕	E19 SD61	16.8	残高 4.6	風化著しく調整不明	やや粗（～1.5㎜の砂粒を含む	並	内　淡黄色 2.5YR8/3 外　浅黄橙色 10YR8/3	—	
85	019-02	土師器　甕	D19 SD61	14.8	残高 5.3	風化著しいく調整不明	やや粗（～2㎜の砂粒含む）	並	内　にぶい褐色7.5R5/3 外　橙色 7.5YR6/6	—	
86	008-01	土師器　甕	D19 SD61	19.8	残高 5.6	風化著しいく調整不明	密	やや不良	浅黄橙色 10YR8/3	—	
87	019-04	土師器　甕	D19 SD61	17.3	残高 5.5	内面風化著しいく調整不明外面口縁部ユコナデ、体部ハケメ	やや密（～1㎜の砂粒含む）	並	内　浅黄橙色 10YR8/3 外　橙色 5YR6/6	—	
88	020-05	土師器　甕	B18 SD61	17.5	残高 3.9	風化著しいく調整不明	粗（～3.5㎜の砂粒含む）	並	内　灰黄褐色 10YR5/2 外　浅黄橙色 10YR8/3	—	
89	002-01	土師器　長胴甕	C18 SD61	33.0	残高 4.6	内面ナデ、口縁部ヨコナデ外面体部ハケメ	やや粗（～2㎜の小石を含む）	並	浅黄橙色 7.5YR8/3	—	
91	040-06	須恵器　蓋	E19 SD61		残高 2.5	内面ロクロナデ、外面ロクロケズリ、宝珠部貼り付け後ナデ	やや粗（～2㎜の砂粒を含む）	並	灰白色 5Y7/1	約50%	
92	036-04	須恵器　蓋	E19 SD61	11.0	2.95	内面～外面体部下半ロクロナデ、体部上半ロクロケズリ、宝珠部貼り付け後ナデ	やや密（微砂含む）	良	灰白色 N8/0	ほぼ完形	
93	036-03	須恵器　蓋	E19 SD61	15.6	3.0	内面ナデ、かえり貼り付け後ナデ、口縁部ロクロナデ外面体部ロクロケズリ、宝珠部貼り付け後ナデ	やや密（～3㎜の小石含む）	良	灰白色 N8/0	ほぼ完形	
94	019-05	須恵器　杯	D19 SD61	11.1	3.6	風化著しいく調整不明	やや密（～1.5㎜の砂粒含む）	不良	灰白色 2.5Y8/1	ほぼ完形	

Tab. 9　出土遺物観察表

報告書番号	登録番号	器種	出土位置 遺構	計測値（cm） 口径	計測値（cm） 器高	成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
95	036-05	須恵器　杯	D19 SD61	—	残高 2.3	内面～外面体部上半ロクロナデ、体部下半ロクロケズリ、底部ヘラ切り	やや粗（1～2㎜の砂粒含む）	良	灰白色 N7/0	約80%	
96	006-02	須恵器　杯	E19 SD61	14.5 高台径 10.7	4.4	内面～外面体部ロクロナデ 高台部貼り付け後ナデ	やや密（～1㎜の小石含む）	並	内　灰白色 5Y7/1 外　灰白色 N7/1	約70%	
97	042-04	須恵器　椀	E19 SD61	11.2	残高 5.5	内面～外面ロクロナデ、底部ロクロケズリ	密	良	灰色 7.5Y6/1	約60%	
98	020-02	須恵器　高杯	D19 SD61	—	残高 3.6	内面・外面ロクロナデ	やや粗（～1.5㎜の砂粒含む）	良	灰白色 N7/0	約30%	
99	042-03	須恵器　壺	E19 SD61	高台径 10.6	残高 4.4	内面ロクロナデ、外面ロクロナデ、ロクロケズリ、高台部貼り付け後ナデ	やや密	良	灰白色	—	
100	042-01	須恵器　甕	E19 SD61	31.0	残高 5.8	内外面ロクロナデ	やや密（～1㎜の砂粒含む）	良	内　灰色　N5/ 外　灰色　N4/	—	
101	041-02	土師器　皿	C26 SD80	14.8	1.7	内面ナデ、口縁部ヨコナデ 外面ナデ	やや粗（～2㎜の砂粒含む）	並	橙色 7.5YR7/	約70%	
102	041-06	土師器　皿	C26 SD80	13.6	2.2	内面～外面ヨコナデ、底部ナデ、ユビオサエ	やや密	並	浅黄橙色 7.5YR8/6	約70%	
103	043-05	土師器　皿	C26 SD80	13.8	2.7	風化著しいく調整不明	密	並	浅黄橙色 7.5YR8/4	約70%	
104	041-05	土師器　杯	C26 SD80	16.0	3.0	内面ナデ、口縁部ヨコナデ 底部ナデ、ユビオサエ	やや密	並	浅黄橙色 7.5YR8/6	約30%	
105	038-05	土師器　長胴甕	D26 SD80	24.2	残高 6.0	内面ハケ、口縁部ナデ、外面風化著しく調整不明	やや粗（～3㎜の小石を含む）	並	橙色 5YR7/6	—	
106	044-01	須恵器　杯	D26 SD80	18.6	残高 2.6	内面～外面ロクロナデ	やや密（～2㎜の小石含む）	並	内　灰色　N7/ 外　灰白色 5Y7/1	約20%	
107	024-01	須恵器　蓋	C26 SD80	17.2	5.6	内面～外面ヨコナデ、外面体部下半ロクロケズリ、高台部貼り付け後ナデ	密（微砂含む）	良	内　灰白色 7.5Y7/1 外　灰オリーブ色　5Y6/	ほぼ完形	
108	032-01	須恵器　細頸壺	C26 SD80	高台径 8.2	残高 17.0	内面ロクロナデ、外面ロクロナデ、高台部貼り付け後ナデ、底部ヘラ切り	やや密（～2㎜の小石含む）	並	灰色 5Y4/1	約90%	
109	045-02	須恵器　長頸壺	C26 SD80	—	残高 13.5	内面ロクロナデ、外面ロクロナデ	やや密（～4㎜の小石含む）	並	黄色 2.5Y5/1	約40%	
110	036-01	須恵器　長頸壺	C26 SD80	高台径 10.1	残高 12.3	内面ロクロナデ、外面体部上半ロクロナデ、下半ロクロケズリ、高台部貼り付け後ナデ、底部ヘラ切り	やや粗（1～2㎜の小石含む）	良	内　灰白色 N8/0 外　灰色 N6/0	約70%	
111	028-01	須恵器　長頸壺	B26 SD80	8.3	残高 9.3	内外面ロクロナデ	やや密	良	内　灰白色 N8 5YR7/6	約80%	
112	032-02	須恵器　長頸壺	C26 SD80	—	残高 11.2	内外面ロクロナデ	やや密（～0.25㎜の小石含む）	並	灰黄褐色 10YR5/2	約60%	
113	033-01	須恵器　横瓶	C26 SD80	11.3	残高 15.0	内面ロクロナデ、口縁部ロクロナデ、外面体部タタキ、カキメ、体部下半ロクロナデ	やや密（～1㎜の小石含む）	並	黄灰色 2.5Y6/1	約40%	
114	045-01	須恵器　広口甕	C26 SD80	41.8	残高 10.0	内外面ロクロナデ、外面体部タタキ	やや密～4㎜の小石含む）	並	褐灰色 10YR5/1	—	頸部に波状文、沈線の装飾
115	035-01	須恵器　広口甕	C26 SD80	53.4	残高 14.4	口縁部内外面ロクロナデ、内面体部・外面体部タタキによる調整	やや粗（～2㎜の小石含む）	良	灰色 N6/0	—	頸部に波状文、沈線の装飾
116	044-02	須恵器　甕	C26 SD80	21.0	残高 7.1	口縁部内外面ロクロナデ、体部内外面タタキ	密（～1㎜の小石含む）	並	内　灰白色　10YR7/1 外　灰色 N4/	—	
117	040-02	丸瓦	B26 SD80	—	—	内外面布目	やや粗	不良	にぶい黄橙色 10YR7/3	—	
118	008-06	灰釉陶器　壺	E13 SK25	8.8	残高 3.0	内外面ナデ	密（～2㎜前後の砂粒含む）	良	灰白色 10YR7/1	—	

Tab. 10　出土遺物観察表

報告書番号	登録番号	器種	出土位置 遺構	計測値（cm） 口径	計測値（cm） 器高	成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
119	017-04	土師器　杯	D32 SD87	13.6	2.7	内面ナデ、口縁部ヨコナデ 外面底部ユビオサエ、ナデ	やや密	並	内　浅黄橙色 7.5YR8/3 外　浅黄橙色 10YR8/3	ほぼ完形	
120	036-02	灰釉陶器　椀	D32 SD87	16.0	4.95	内面～外面体部上半ロクロナデ、体部下半ロクロケズリ、高台部貼り付け	やや粗（～2㎜の砂粒含む）	良	灰白色 N8/0	約50%	K−90
122	038-09	土師器　小皿	A13 SK32	5.4	1.2	内外面ナデ、外面底部ユビオサエ	密	並	内　にぶい橙色 5YR7/4 外　橙色 7.5YR7/6	半完形	
123	038-08	土師器　小皿	D14 Pit2	5.5	1.1	内外面ナデ、外面底部ユビオサエ	密	並	淡橙色 5YR8/3	完形	
124	011-04	土師器　小皿	C13 Pit1	7.3	1.3	内外面ナデ、ユビオサエ	やや粗（～2.5㎜の小石含む）	並	内　橙色 5YR7/6 外　橙色 7.5YR7/6	完形	内面に油煙付着
125	038-01	土師器　小皿	D13 Pit1	8.5	1.5	内外面ナデ、ユビオサエ	やや粗（～3㎜の小石含む）	並	にぶい橙色 7.5YR7/4	約40%	
126	016-01	陶器椀（山茶椀）	C13 Pit2	底径 5.8	残高 2.0	内面ロクロナデ、外面体部ロクロナデ、高台部貼り付け後ナデ、底部糸切り	密	良	灰白色 2.5Y8/1	—	
127	022-04	陶器椀（山茶椀）	B19 SK82	7.1	残高 2.7	内面ロクロナデ、外面体部ロクロナデ、高台部貼り付け後ナデ、底部ナデ	やや密（～2㎜の小石含む）	並	灰黄色 2.5Y7/2	—	
128	030-01	陶器　盤	B19 SK69	14.8	残高 1.8	内面ロクロナデ、外面ロクロケズリ	やや密（1㎜以下の小石含む）	良	淡黄色 2.5Y8/3	—	内面に櫛目4本ずつ2条
129	011-06	土師器　鍋	A13 Pit1	—	5.2	内面ユビオサエ、ナデ、口縁部ヨコナデ、外面ハケ	やや粗（～1㎜の砂粒含む）	並	内　灰白色　2.5Y8/2 外　淡黄色2.5Y8/3	約40%	
130	005-06	土師器　鍋	A11 SK14	20.0	2.0	口縁部ナデ	やや密（～1㎜の小石含む）	並	内　橙色 5YR6/6 外　橙色 7.5YR6/6	—	
131	007-01	土師器　鍋	B11 SK9	32.2	8.4	内面～口縁部ナデ、体部外面ハケ	やや密（～2㎜の砂粒含む）	やや不良	浅黄橙色 10YR8/3	約40%	
132	043-04	陶器椀（山茶椀）	C13 SE29	底径 7.3	2.2	内面～外面ロクロナデ、高台部貼り付け後ナデ、底部糸切り	密（～2㎜の小石含む）	並	灰黄色 2.5Y7/2	—	
133	037-01	土師器　羽釜	C13 SE29	16.8	残高 7.2	内面体部調整不明、口縁部ナデ、外面体部ハケ	やや粗（1～2㎜の小石含む）	並	褐灰色 10YR5/1	約40%	
134	038-06	土師器　鍋	B15 SK39	20.9	残高 5.7	内面ユビオサエ、口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ	密	並	内　浅黄橙色 10YR8/3 外　にぶい橙色 7.5YR7/3	約40%	
135	037-04	土師器　小皿	A13 SK42	6.8	1.2	内面ナデ、外面ユビオサエ ナデ	やや密	並	にぶい橙色 5YR7/4	ほぼ完形	
136	043-02	土師器　小皿	A13 SK42	7.0	1.05	内面ナデ、口縁部ヨコナデ 底部ナデ	粗（～8㎜の小石含む）	並	にぶい橙色 5YR7/4	ほぼ完形	
137	037-06	土師器　小皿	A13 SK42	5.6	1.7	内面ナデ、外面ユビオサエ	やや密（1～2㎜の砂粒含む）	並	浅黄橙色 7.5YR8/4	ほぼ完形	
138	029-04	陶器椀（山茶椀）	A13 SK42	15.0	5.0	内面～外面ロクロナデ、高台部貼り付け後ナデ、底部糸切り後ナデ	やや密（微砂含む）	並	灰色 5Y8/1	約80%	内面にスス付着
139	023-05	土師器　小皿	A13 SD38	6.0	1.0	内面ナデ、口縁部ヨコナデ 底部ナデ	やや密	並	浅黄橙色 7.5YR8/3	約50%	
140	023-03	土師器　小皿	A14 Pit1	8.2	1.3	内面ナデ、口縁部ヨコナデ 底部ユビオサエ	やや密	並	にぶい橙色 7.5YR7/4	ほぼ完形	
141	015-03	陶器椀（山茶椀）	A15 SD39	底径 6.7	残高 2.0	内面ロクロナデ、外面ロクロナデ、高台部貼り付け後ナデ、底部糸切り	やや粗（1～2㎜の小石を含む）	並	灰白色 2.5Y8/1	—	
142	038-07	灰釉陶器　壺	B15 SD39	底径 9.3	残高 3.8	内面ロクロナデ、外面ロクロケズリ、底部ロクロケズリ、高台部貼り付け	やや密（～3㎜の小石を含む）	並	にぶい黄橙色 10YR7/2	—	自然釉付着
143	008-05	土師器　小皿	A13 SD38	7.2	1.1	内面ナデ、口縁部ヨコナデ 底部ユビオサエ後ナデ	密（微砂含む）	良	灰白色 10YR8/2	約50%	
144	015-05	陶器椀（山茶椀）	B15 SD39	底径 7.3	残高 1.7	内面ロクロナデ、外面ロクロナデ、高台部貼り付け、底部ナデ	やや密（1～2㎜の小石含む）	並	灰白色 2.5Y8/1	—	

Tab. 11　出土遺物観察表

報告書番号	登録番号	器種	出土位置 遺構	計測値（cm） 口径	計測値（cm） 器高	成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
145	004-05	陶器皿（山皿）	C14 SD35	底径 4.1	残高 1.3	内面～外面ロクロナデ、底部糸切り	密（～1㎜の砂粒含む）	並	灰白色 2.5Y8/1	約50%	
146	004-03	陶器椀（山茶椀）	B14 SD35	高台径 6.3	残高 1.8	内面～外面体部ロクロナデ 底部ロクロナデ、高台部貼り付け後ナデ	密（～2㎜の小石含む）	並	灰白色 10YR8/1	—	
147	005-03	陶器　小壺	B14 SD39		残高 5.5		密	良	灰色 7.5Y6/1	約60%	
148	039-03	須恵器　甕	B15 SD35	—	残高 6.7	内面ナデ、口縁部ロクロナデ、体部外面タタキ	密	並	灰白色 2.5Y8/1	—	
149	006-01	土師器　羽釜	A14 SD35	—	残高 3.8	内外面ナデ	粗（～2㎜の小石含む）	並	にぶい黄橙色 10YR6/3	—	
150	002-02	土師器　鍋	A10 SD1	32.0	残高 5.2	内面底部ケズリ、内面体部～外面ナデ、底部ケズリ	やや密（～1㎜の小石含む）	並	にぶい褐色 7.5YR6/3	約50%	
152	004-04	陶器椀（山茶椀）	B20 SD72	底径 6.3	残高 2.0	内面～外面ロクロナデ、底部糸切り、高台部貼り付け後ナデ	密	並	灰白色 10YR7/1	—	
153	005-01	陶器　香炉	B20 SD72	底径 9.4	残高 3.9	内面ロクロナデ、外面ロクロケズリ、底部ロクロケズリ後ナデ、脚部貼り付け後ナデ	密	並	灰白色　5Y8/2（釉薬）内　灰白色　2.5Y8/2 外　褐色　7.5YR4/4	—	釉掛
154	007-02	土師器　鍋	B10 SD1	31.0	残高 7.1	内面ナデ、口縁部ナデ、外面体部ハケ	やや密（1㎜前後の砂粒含む）	やや不良	灰白色 10YR8/2	約40%	
155	022-02	土師器　鍋	B10 SD21	35.0	残高 3.7	内面ナデ、口縁部ナデ、底部ナデ	やや密	並	にぶい橙色 7.5YR7/3	約40%	
156	022-01	土師器　鍋	B10 SD21	33.0	残高 7.2	内面底部ケズリ、内面体部上半ナデ,口縁部ヨコナデ、外面体部ハケ、底部ケズリ	やや密（～0.25㎜の小石を含む	並	にぶい橙色 7.5YR7/3	約50%	
157	003-01	陶器椀（山茶椀）	B10 SD21	底径 8.5	残高 2.0	内面～外面ロクロナデ、底部糸切り、高台部貼り付け後ナデ	やや密（～1㎜の小石含む）	並	灰白色 2.5Y8/2	—	
158	010-02	土師器　茶釜	B10 SD21	10.8	残高 10.2	内面ユビオサエ後ナデ、口縁部ヨコナデ、外面体部ハケ、体部下半ケズリ	やや密（1㎜前後の小石含む）	並	浅黄橙色 10YR8/4	約40%	
159	006-04	陶器　擂鉢	B10 SD21	底径 12.6	残高 5.6	内面スリメ、外面体部ケズリ、外面底部糸切り	やや粗（～5㎜の小石含む）	並	暗赤褐色 5YR3/3	—	
160	040-03	土師器　小皿	B15 SD40	5.3	1.0	内外面ユビオサエ、ナデ	やや密	並	灰白色 2.5Y8/2	約50%	
161	040-04	土師器 小皿	B15 SD40	8.4	7.0	内外面ユビオサエ、ナデ	やや密	並	淡黄色 2.5Y8/3	約50%	
162	040-05	土師器　小皿	D16 SD48	10.8	2.4	内外面ユビオサエ、ナデ	やや粗（～2㎜の砂粒含む）	並	淡黄色 2.5Y8/3	約50%	
163	014-03	土師器　小皿	C15 SD48	10.7	2.2	風化著しく調整不明	やや粗	並	灰白色 10YR8/2	約40%	
164	043-01	土師器　小皿	C15 SD40	11.8	2.3	内外面ユビオサエ、ナデ	やや密（～2㎜の小石含む）	並	灰白色	約40%	
165	014-06	土師器　小皿	C15 SD48	11.0	2.45	風化著しく調整不明	矢や粗 2.5Y8/3	並	淡黄色	約30%	
166	003-02	陶器椀（山茶椀）	C15 SD40	底径 8.6	残高 2.3	内外面ロクロナデ、底部糸切り、高台部貼り付け後ナデ	やや密（～1㎜の小石含む）	並	にぶい黄橙色 10YR7/2	—	
167	016-02	陶器椀（山茶椀）	D15 SD40	底径 6.3	残高 2.4	内外面ロクロナデ、底部糸切り、高台部貼り付け後ナデ	密（～2㎜の小石含む）	良	灰白色 2.5Y7/1	—	
168	015-02	陶器椀（山茶椀）	C15 SD48	底径 7.7	残高 2.8	内外面ロクロナデ、底部糸切り、高台部貼り付け後ナデ	やや密（～1㎜の小石含む）	並	灰白色 2.5Y8/1	—	

Tab. 12　出土遺物観察表

報告書番号	登録番号	器種	出土位置 遺構	計測値（cm） 口径	計測値（cm） 器高	成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
169	009-02	陶器椀（山茶椀）	D15 SD40	底径 6.6	残高 2.3	内外面ロクロナデ、底部糸切り、高台部貼り付け後ナデ	やや密（2㎜前後の砂粒含む）	良	にぶい黄橙色 10YR7/2	—	
170	001-03	陶器椀（山茶椀）	D16 SD40	底径 9.2	残高 2.7	内外面ロクロナデ、底部糸切り、高台部貼り付け後ナデ	やや粗（～3㎜の小石含む）	並	にぶい黄橙色 10YR7/2	—	
171	001-04	陶器椀（山茶椀）	C15 SD48	底径 6.8	残高 3.0	内外面ロクロナデ、底部糸切り、高台部貼り付け後ナデ	やや粗（～2㎜の小石含む）	並	灰白色 10YR8/1	—	
172	016-05	陶器椀（山茶椀）	D16 SD40	底径 8.2	残高 3.2	内外面ロクロナデ、底部糸切り、高台部貼り付け後ナデ	やや密（3㎜前後の小石含む）	並	灰白色 2.5Y8/1	—	
173	028-02	陶器椀（山茶椀）	B15 SD40	底径 6.8	残高 3.4	内外面ロクロナデ、底部糸切り、高台部貼り付け後ナデ	やや粗（～1.5㎜の砂粒含む）	良	灰白色 2.5Y7/1	—	
174	025-02	土師器 鍋	C15 SD40	19.2	10.9	内面底部ケズリ後ユビオサエ、内面体部上半ユビオサエ後ナデ、口縁部ヨコナデ 外面体部上半オサエ後ナデ 底部ケズリ	やや粗（～1.5㎜の小石含む）	並	内　灰白色 7.5YR8/2 外　灰白色 2.5Y8/2	約30%	
175	018-02	白磁椀	D16 SD40	16.7	残高 4.8	内外面ロクロケズリ	密	良	灰白色　N8/ 釉薬　灰白色 10Y8/1	—	
176	022-03	陶器椀（山茶椀）	D16 SD40	14.6 底径 6.7	6.3	内面～外面ロクロナデ、底部糸切り、高台部貼り付け後ナデ	やや粗（～3㎜の小石含む）	並	にぶい黄橙色 10YR7/2	ほぼ完形	
177	001-02	陶器椀（山茶椀）	D16 SD40	16.4 底径 8.0	5.5	内面～外面ロクロナデ、底部糸切り、高台部貼り付け後ナデ	やや粗（～2㎜の小石含む）	並	にぶい黄橙色 10YR7/2	約40%	
178	043-07	土師器 鍋	C15 SD40	—	残高 1.9	ヨコナデ	やや粗（～2㎜の小石含む）	並	浅黄橙色 10YR8/3	—	
179	017-02	土師器 鍋	C15 SD40	21.8	残高 3.5	内面調整不明、口縁部ヨコナデ、外面調整不明	やや粗（～2㎜の小石含む）	並	浅黄橙色 10YR8/3	—	
180	039-02	土師器 鍋	A14 SD48	26.5	残高 8.7	内面ナデ、口縁部ヨコナデ、頸部オサエ後ナデ、体部外面ハケ	粗（～1㎜の小石含む）	並	黄橙色 10YR7/3	約20%	
181	011-01	土師器 羽釜	D16 SD40	25.2	残高 6.0	内面～外面ヨコナデ	やや粗（～3.5㎜の小石含む）	並	内　にぶい黄橙色 10YR 7/3 外　淡黄色 2.5Y8/3	約20%	
182	016-04	陶器椀（山茶椀）	C22 SD51	底径 7.0	残高 2.3	内面～外面ロクロナデ、底部糸切り、高台部貼り付け後ナデ	やや密（～4㎜の小石含む）	並	灰白色 2.5Y8/1	—	
183	001-05	陶器椀（山茶椀）	C22 SD51	底径 8.0	残高 1.8	内面～外面ロクロナデ、底部糸切り、高台部貼り付け後ナデ	やや粗（～4㎜の小石含む）	並	灰白色 2.5Y8/1	—	
184	015-01	須恵器 長頸壺	C22 SD51	底径 7.0	残高 2.0	内面～外面ロクロナデ、底部糸切り、高台部貼り付け後ナデ	やや密	良	灰白色 N8/0	—	
185	020-06	陶器椀（山茶椀）	C22 SD51	底径 10.0	残高 2.3	内面～外面ロクロナデ、底部糸切り、高台部貼り付け後ナデ	やや密（～2㎜の小石含む）	良	灰白色 N8/0	—	
186	019-06	土師器 甕	D19 SD51	—	5.2	内面調整不明、口縁部ナデ、外面体部ハケ	やや密（1.5㎜の砂粒含む）	並	橙色 5YR7/6	—	奈良時代の甕と考えられ、中世溝掘削時に混入
187	003-03	緑釉陶器 椀	C22 SD51	底径 5.8	残高 2.2	内面～外面ロクロナデ、高台部削りだし、底部ケズリ	密（2㎜の小石含む）	並	灰白色 5Y7/1	—	内面施釉
188	001-06	陶器椀（山茶椀）	A16 SD54	底径 8.7	残高 2.2	内面～外面ロクロナデ、底部糸切り、高台部貼り付け後ナデ	やや粗（～3㎜の小石含む）	並	灰白色 10YR8/1	—	
189	012-01	土師器 甕	B17 SD54	20.9	残高 7.0	内面オサエ後ナデ、口縁部ヨコナデ、外面体部ハケ	やや粗（～2㎜の小石含む）	並	内　灰白色 7.5YR8/2 外　淡黄色 2.5Y8/3	—	

Tab. 13　出土遺物観察表

報告書番号	登録番号	器種	出土位置 遺構	計測値（cm） 口径	計測値（cm） 器高	成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
190	001-01	須恵器　甕	B17 SD54	26.2	残高 8.0	内面～外面ロクロナデ	やや密（～2㎜の小石含む）	並	灰白色 2.5Y7/1	—	
191	023-04	土師器　小皿	C16 SK63	9.0	残高 1.8	内面ナデ、口縁部ヨコナデ 底部ナデ	やや密	並	浅黄橙色 7.5YR8/3	—	
192	014-07	土師器　小皿	C16 SK63	8.6	1.1	風化著しく調整不明	やや粗 7.5YR8/3	並	浅黄橙色	約50%	
193	012-05	陶器　皿	C13 Pit12		残高 1.7	外面体部ロクロケズリ、高台部貼り付け後ロクロナデ	密（微砂含む）	並	灰白色 2.5Y8/1	—	鉄釉（草花類）
194	030-04	天目茶碗	B13 Pit5	10.9 底径 3.5	6.65	外面底部ロクロケズリ、高台削出	やや密 2.5Y8/1	良	灰白色	約50%	鉄釉
195	030-05	陶器　椀	B13 Pit5	11.1 底径 3.3	4.9	高台削出	密 7.5YR6/1	良	灰褐色	約50%	刷毛目模様施釉
196	039-07	磁器　椀	A14 Pit1	6.2 底径 2.1	3.2	内面～外面ロクロナデ、高台削出	密	並	白色 N8/	ほぼ完形	蝶5個
199	039-01	陶器　盤	B12 SK30	23.5	残高 5.6	内面～外面ナデ、外面底部ロクロケズリ	やや粗（～2㎜の小石含む）	並	にぶい赤褐色 2.5YR5/4	約30%	
200	031-02	磁器　蓋	B19 SD65	9.6 5.5	3.1	高台削出	密	良	明緑灰色 10GY8/1	約60%	
201	010-04	陶器椀（山茶椀）	D15 SD43	底径 6.4	残高 3.5	内面～外面ロクロナデ、底部糸切り、高台部貼り付け後ナデ	やや密（～3㎜の小石含む）	並	灰白色 2.5Y8/1	—	
202	015-06	陶器　椀	B20 SD65	底径 4.6	残高 3.7	内面ロクロナデ、外面ロクロナデ、高台削出	密	良	灰白色 2.5Y8/2	約30%	灰釉、半筒形
203	014-05	陶器　椀	B19 SD65	10.5 底径 4.2	5.1	外面ロクロナデ、高台削出	密	良	浅黄橙色 10YR8/3	約70%	白泥、透明釉
204	018-07	磁器　小杯	D16 SD43	底径 2.0	残高 3.7	高台削出	密	良	明緑灰色 10GY8/1	約60%	草花類
205	009-01	陶器　椀	D15 SD43	8.6 底径 4.2	6.0	内面～外面ロクロナデ、高台部貼り付け後ナデ	密	良	灰白色 2.5Y8/1	約60%	鉄釉
206	018-03	陶器　皿	D21 SD73	底径 7.8	残高 2.2	高台削出後ヨコナデ、底部ロクロケズリ	密	良	灰白色 7.5Y8/1	約40%	菊花形の型打、灰釉
207	018-05	磁器　紅猪口	D17 SD45	底径 4.2	残高 3.2	高台削出	密	良	明緑灰色 10GY8/1	約50%	梅、渦巻模様染付
208	018-06	磁器　椀	D17 SD45	底径 6.0	残高 3.3	高台削出	密	良	灰白色 10Y6/1	約30%	広東形
209	023-06	陶器　椀	D16 SD45	底径 4.4	残高 1.7	内面ロクロナデ、外面ロクロケズリ、高台削出、底部ケズリ	やや密（～1㎜の小石含む）	並	灰白色 5Y8/1	約40%	灰釉、貫入著しい
210	020-01	土師器　小皿	D16 SD52	8.1	1.5	内面ナデ、口縁部ヨコナデ、外面ユビオサエ後ナデ	やや粗（～1.5㎜の小石含む）	並	橙色 5YR7/6	約80%	
211	021-01	陶器　皿	C18 SD52	13.2 高台径 8.5	3.1	高台削出、底部ロクロケズリ	やや粗（～1㎜の砂粒含む	並	淡黄色 2.5Y8/3	約50%	
212	011-02	土師器　小皿	B24 SD77	7.9	1.3	内面～外面ナデ、外面底部ユビオサエ後ナデ	密（微砂含む）	並	内　浅黄橙色 7.5YR8/3 外　灰白色 10YR8/2	約50%	
213	011-03	土師器　小皿	B24 SD77	8.2	1.6	内面～外面ナデ、外面底部ユビオサエ後ナデ	密（微砂含む）	並	灰白色 2.5Y8/2	約50%	
214	018-01	土師器　羽釜	C23 SD77	—	残高 3.4	内外面ヨコナデ	やや密（～1㎜の小石含む）	並	灰白色 10YR8/2	—	
215	043-08	陶器　仏餉具	C23 SD77	—	残高 2.2	内外面ロクロナデ	密	並	灰白色 5Y8/2	—	

Tab. 14　出土遺物観察表

報告書番号	登録番号	器種	出土位置 遺構	計測値（cm） 口径	計測値（cm） 器高	成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
216	016-03	陶器椀（山茶椀）	C23 SD77	高台径 8.3	残高 2.3	内面～外面ロクロナデ、底部糸切り、高台部貼り付け後ナデ	密	良	灰白色 2.5Y8/1	－	
217	031-01	軒丸瓦	D33 SK90	—	残高 11.5	内面ケズリ	やや密	良	灰白色 2.5Y8/1	－	
218	028-05	灰釉陶器 皿	C33 SK90	12.4 高台径 6.0	2.7	内面ロクロナデ、外面ロクロケズリ、底部ロクロケズリ、高台部貼り付け後ナデ	密	良	灰白色 5Y8/1	半完形	
219	044-04	土師器 甕	C33 SD58	16.4 推定	残高 2.9	口縁部内外面ナデ	やや粗	並	橙色 7.5YR6/8	－	

Tab. 15　出土木製品観察表

報告書番号	登録番号	名称	出土位置 遺構	長（cm）	幅（cm）	厚（cm）	備考
45	046-01	木簡	SK51	11.3	2.0	1.1	

Tab. 16　出土土錘観察表

報告書番号	登録番号	出土位置	長（cm）	直径（cm）	重さ（g）	特徴	備考
44	037-07	A4 SK65	4.4	1.8	10.28	円筒形	
47	016-07	E17 SD58	4.0	3.8	50.1	円筒形	
75	024-05	C26 SD82	3.45	3.65	40.83		
90	003-04	C18 SD82	1.5	0.45	7.72		
121	024-05	D32 SD87	2.8	3.5	37.06		

Tab. 17　出土石製品観察表

報告書番号	登録番号	名称	出土位置 遺構	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	備考
151	005-05	砥石	C14 SD35	7.3	3.45	1.4	42.7	
197	037-03	砥石	D13 Pit5	9.0	3.95	1.8	79.9	

Tab. 18　出土銭貨観察表　（A）（B）は縦、（C）（D）は横、内径は外縁部分を除い

報告書番号	登録番号	銭貨名	出土位置 遺構	初鋳年 国名	銭径（A）	銭径（B）	内径（C）	内径（D）	厚さ（cm）	重さ（g）	備考
46	030-03	寛永通寶	D7 SK4	163 日本	2.5	2.5	2.05	2.05	1.5	2.5	背文

Tab. 19　金属製品観察表

報告書番号	登録番号	名称	出土位置 遺構	長さ（cm）	火皿径（cm）	接合部径（cm）	重さ（g）	備考
198	037-02	雁首	D11 Pit5	6.9	——	1.15	7.6	

〔遺物観察表註〕

報告書に掲載した弥生土器、土師器、須恵器、陶器、磁器、土製品、木製品、金属製品の観察表は以下の規則によって作成した。

A 出土土器観察表

1 観察表左端の番号は、各実測図の番号に対応する。これは、器種・材質如何を問わず通し番号である。ただし、これは掲載した実測個体のみであり、実測図を作成できない破片には番号をふっていない。従って、この番号が遺物のすべてではない。

2 登録番号は、実測図面の番号に対応している。

3 検出地点のA、B、C～は、地区割によるものでFig. 4を参照されたい。また遺構については 遺構一覧表Tab. 1に対応している。

4 計測値について記載した口径、高台径、残高はそれぞれ最大値をとっている。（口径＝口縁部径・高台径＝高台部径・残高＝残存部の器高）また 「——」は、計測できないものとしている。

5 成形・技法については、あくまでも遺物個体になされている技法のみをとりあげ、成形順序によるものではない。

6 胎土については、粗密について記し、カッコ内に石、砂粒の有無や大きさについて記載している。

7 焼成については、良・並・不良に分け、その中間に位置する場合は、ややを付記している。

8 色調については、『新版 標準土色帖』（小山・竹原編19版 1997.1）を基準として表記している。

9 残存の度合は、遺物を完形としてみた割合によって％を用いて表している。「——」は、表しきれないものについて使用している。

10 備考の欄については、土器における装飾、特徴的な要素について記載している。

V　まとめ

今回の調査では、弥生時代後期～近世に至る遺構・遺物を確認することができた。これらの成果を踏まえ、まとめと課題について述べたい。

1　旧石器～縄文時代について

B調査区を中心として、有茎尖頭器を含む石器を数点検出した。全てが他の時代の遺構からの出土である。そのため、下層調査を行ったものの、旧石器～縄文時代の遺構を確認することができなかった。

しかし、遺物が出土している点から、この時期に該当する遺跡が近域に存在するとみられる。

2　弥生時代について

調査対象地付近に弥生時代の遺跡は、ほとんどみることができない。しかしながら、今回の調査区内において弥生時代中期・末期として捉えられる土器等を確認している。

A調査区の井戸や溝・土坑から第Ⅲ様式後半に位置する広口壺の破片等が出土しており、調査地域周辺に中期の集落が存在すると考えられる。

また、方形周溝墓は出土遺物から弥生時代後期として考えられる。そのため、調査地は中期において集落の一部であり、その後に、後期の段階に墓域として利用されたと思われる。なお、弥生時代中期にかかる遺跡として北へ約1.5㎞のところに下之庄東方遺跡などを挙げることができる。当地と周辺の遺跡との関連性については、具体的には存在しないものの、今後から繋がりを考えておく必要があると思われる。

3　古墳時代について

嬉野町内には、多くの古墳が造営されている。田村西瀬古遺跡からほぼ西方向に向山古墳、やや北方向に算所、上算所古墳がある。それらは、田村西瀬古遺跡を含め西方から突き出す丘陵上に位置している。

B調査区の北半部において、円筒埴輪片が奈良・平安・近世の溝から出土しており、近域に古墳が存在したと思われる。しかし、奈良時代の溝から出土していることを考えれば、すでに古墳は、破壊されていたと考えられる。

また、今回の調査地内の古墳時代とみられる溝もあるが、周溝の可能性は低い。

4　奈良時代について

掘立柱建物３棟を確認することができた。なかでも大型の掘形をもつ掘立柱建物２棟、柵、それらに伴う時期の溝を検出した。

今回の掘立柱建物は、真北に統一されている。ただ調査区の制限上、塀として捉えた柱穴は、西側にも建物が存在する可能性を有する。

仮定であるが、西側に建物が存在するとすると建物群の建物配置は、「コ」の字形の建物配置となりうる可能性を持つ。

調査地近域の調査例のなかで掘立柱建物を検出した遺跡としては、嬉野町焼野、御殿山、天保、堀之内、下ノ庄東方遺跡などがある。

今回と同様の柱掘形をもつ建物が確認されたのは、御殿山遺跡のみである。御殿山遺跡の掘立柱建物１棟は、規模こそ不明であるが、1×0.7m、深さ1.2ｍの方形の掘形を検出している。

また、SK90出土の軒丸瓦は、瓦当部を一部欠いているものの複弁八葉蓮華文から単弁十六葉蓮華文への変化のきざしを見せる軒丸瓦とみられる。今回出土の軒丸瓦は、三重県下のどの寺院出土の軒丸瓦と比較しても異なり、他に類例をみない。旧一志郡下には、白鳳寺院跡が集中しており、瓦葺建物か未確認の寺院の存在も考えられる。

5　平安時代について

調査区内では、遺構・遺物共に確認しており、当遺跡に当該期の集落が存在したとみられる。

6　中世について

田村において検出された中世の遺構のなかでA調査区～B調査区SD48以南に柱穴や井戸が偏ってい

る。したがって、この空間が当時の人々の居住域としてみれる。それ以外の部分では耕作痕跡があるため、畑ないし水田として利用されていたとみられる。

また、田村の地区内には条里に由来する小字上分田、鍋垣内がある。調査地にみられる溝等は、それらと関連するものと考えられる。しかし、今回の調査だけで結論をだすことが出来ないため、この地域の土地制度については、今後の検討課題である。

7　近世について

田村は、江戸時代において津藩領に属し、人口約400人の村落である。江戸時代の集落は、現在のそれとほぼ重なるものとみられる。B調査区検出の掘立柱建物の存在によりそれが窺える。しかし、建物から南側には多数の南北溝があるだけで、どのような土地利用がなされていたものか不明である。

また、A調査区出土の呪符木簡は、裏面に「しずめ申す○○○」と読むことができる。それは、何らかの鎮壇具の代替物とも考えられ、そういったものを必要とする事由があったとみられる。

8　結語

以上にわたって、発掘調査によって得られた成果を基に今後の課題を述べた。

今回の注目すべき点は、当地が弥生時代～近世における遺跡という事である。

つまり、当地が重要な地域の一角であると考えられ、当地域のさらなる発掘調査の成果を待ちたい。

Ⅵ．付編　御殿山遺跡について

調査は、農村基盤総合パイロット整備事業に伴い昭和60年11月18日～11月27日に行われた。調査面積は、約360㎡である。調査地は、田村西瀬古遺跡から西方に約２㎞の地点に所在する。

調査の結果、奈良～平安時代にかけての遺構が検出されている。

１．遺構

竪穴住居３棟、掘立柱建物１棟、溝、土坑である。竪穴住居の規模は、SH1で3.3 ×4m、SH2で3.2 ×４m、SH3で3×1.7m以上である。SH1・２共に長方形を呈している。SH1は、東側の部分にカマドを有している。

時期は、出土遺物から奈良時代後期を前後するものとみられる。

掘立柱建物は、規模は不明であるが東西で２間分を検出している。方位は、N８°Eの東西棟である。また、この掘立柱建物は、長辺1m、短辺0.7m、深さ1.2mの方形の柱掘形を有し、大型の建物として考えられる。

時期は、出土遺物から奈良時代後期を前後するものとみられ、竪穴住居より新しいとみられる。

２．遺物

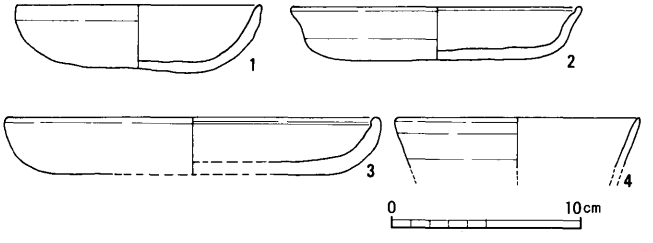
出土遺物としては、土師器杯(1)・(2)がSK1、土師器皿(3)がSH1、須恵器杯(4)が柱穴から出土している。

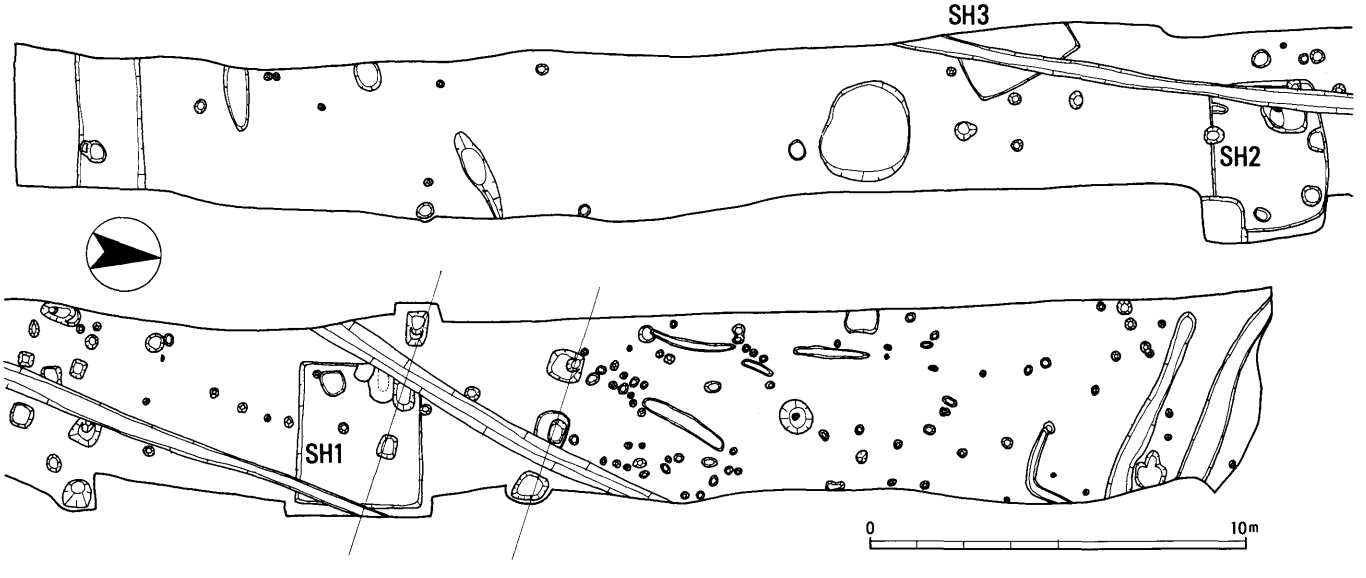
(1)は、口径12.8cm、器高3.4 cmで、外面底部をヘラケズリ、ユビオサエ、口縁部をヨコナデ、内面底部をユビオサエによって調整がなされている。口縁部は、緩やかに立ち上がり、端部は、丸くまとまる。口縁部の器壁は、厚い。

(2)は、口径15.2cm、器高2.9 cmで、内外面をナデによって調整がなされている。口縁部は外反し、端部は、内側に丸くおさめて肥厚させている。

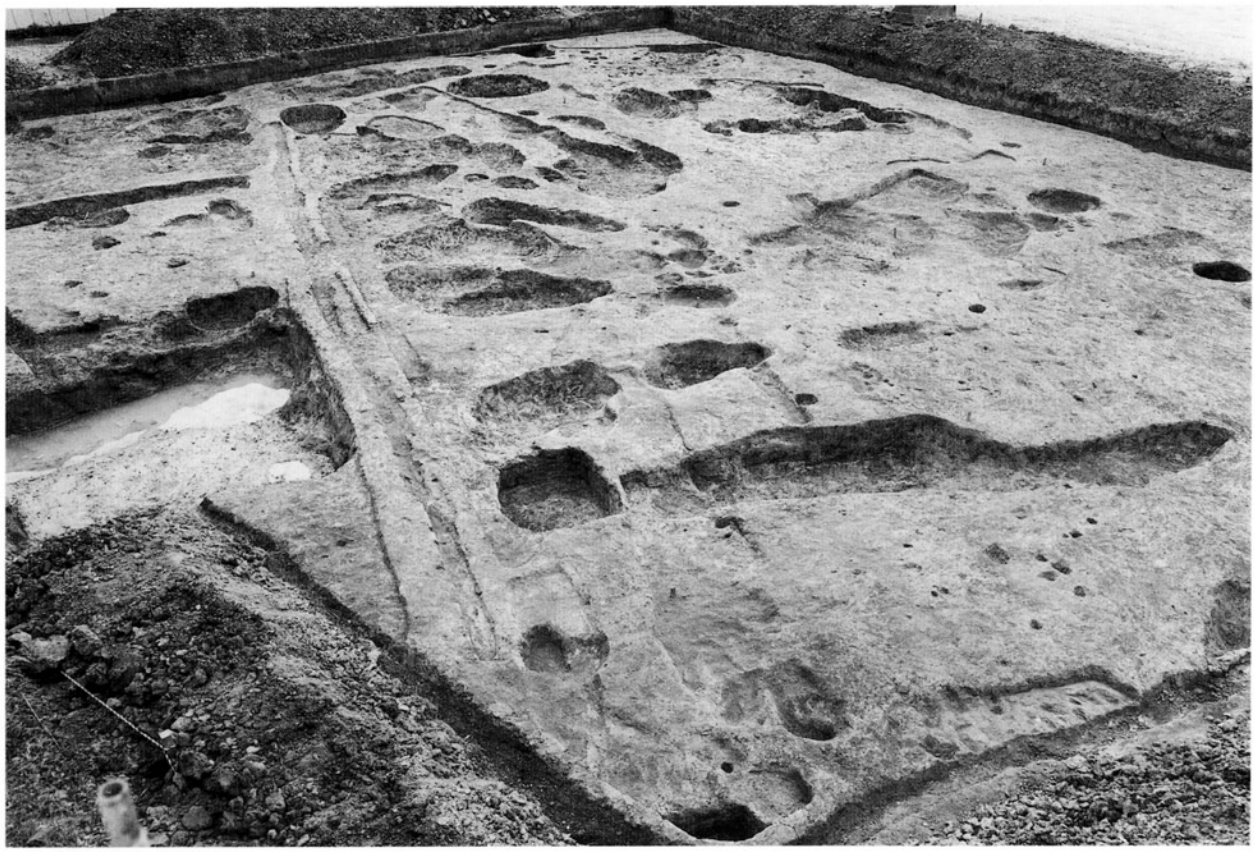
(3)は、推定口径19.4cm、器高3.0 cmで、内外面共に剥離著しく調整は、不明である。器壁は、全体的に厚く、緩やかに立ち上がる。口縁端部は、丸くまとまり、若干肥厚させている。内面全体にススが付着している。

(4)は、推定口径12.8cmで、残高2.7cmである。口縁部は、やや尖り気味にまとめられ、内外面共にナデによって調整されている。

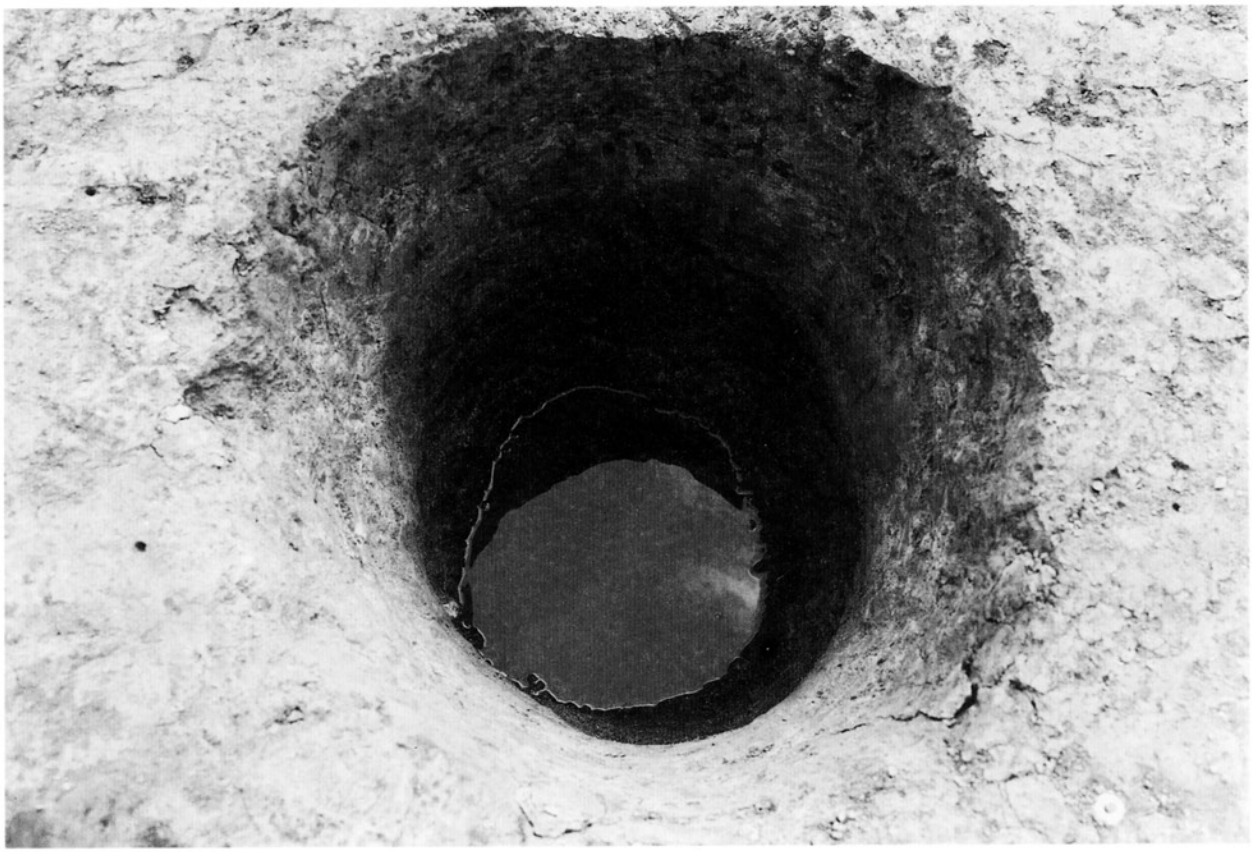




A 調査区完掘全景



A 調査区完掘全景



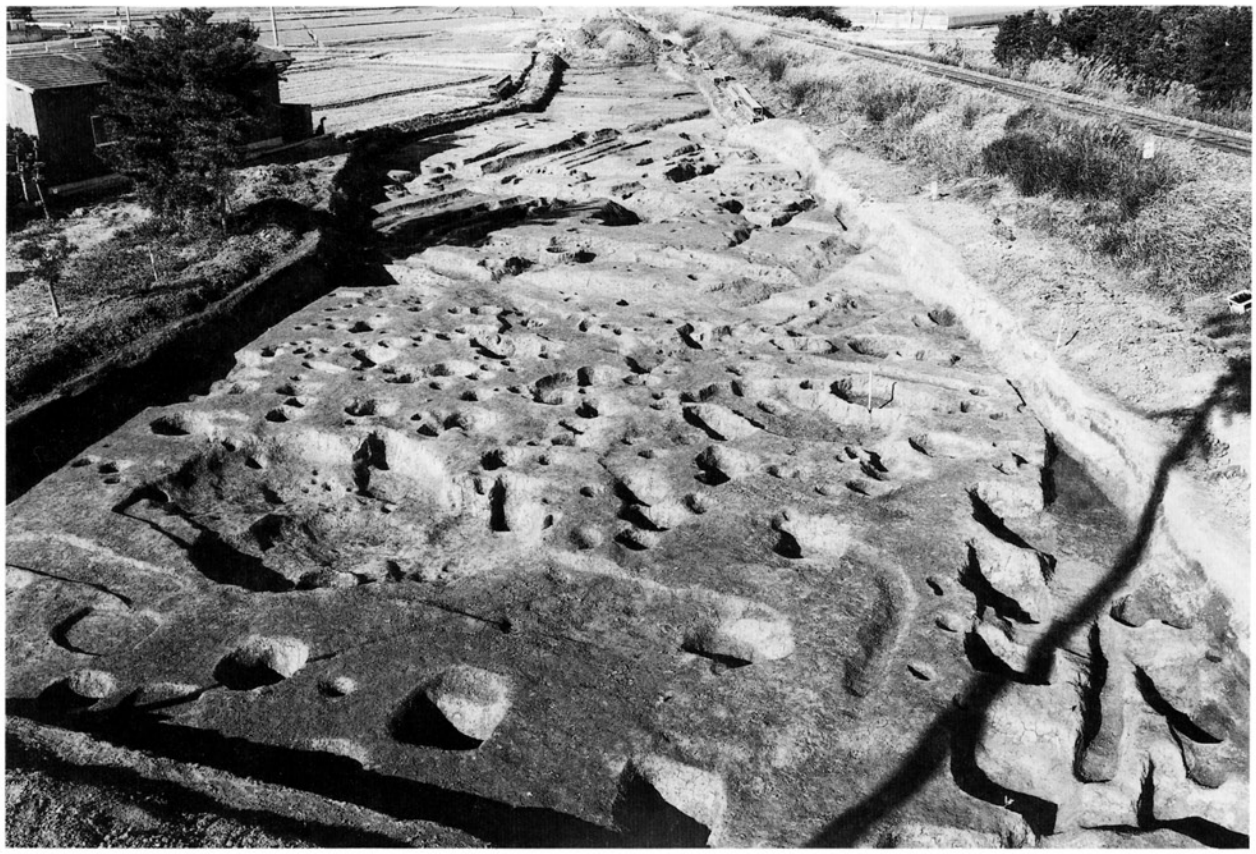
A 調査区 SE25 完掘状況

A 調査区 SE1 完掘状況

A調査区 SE30 完掘状況

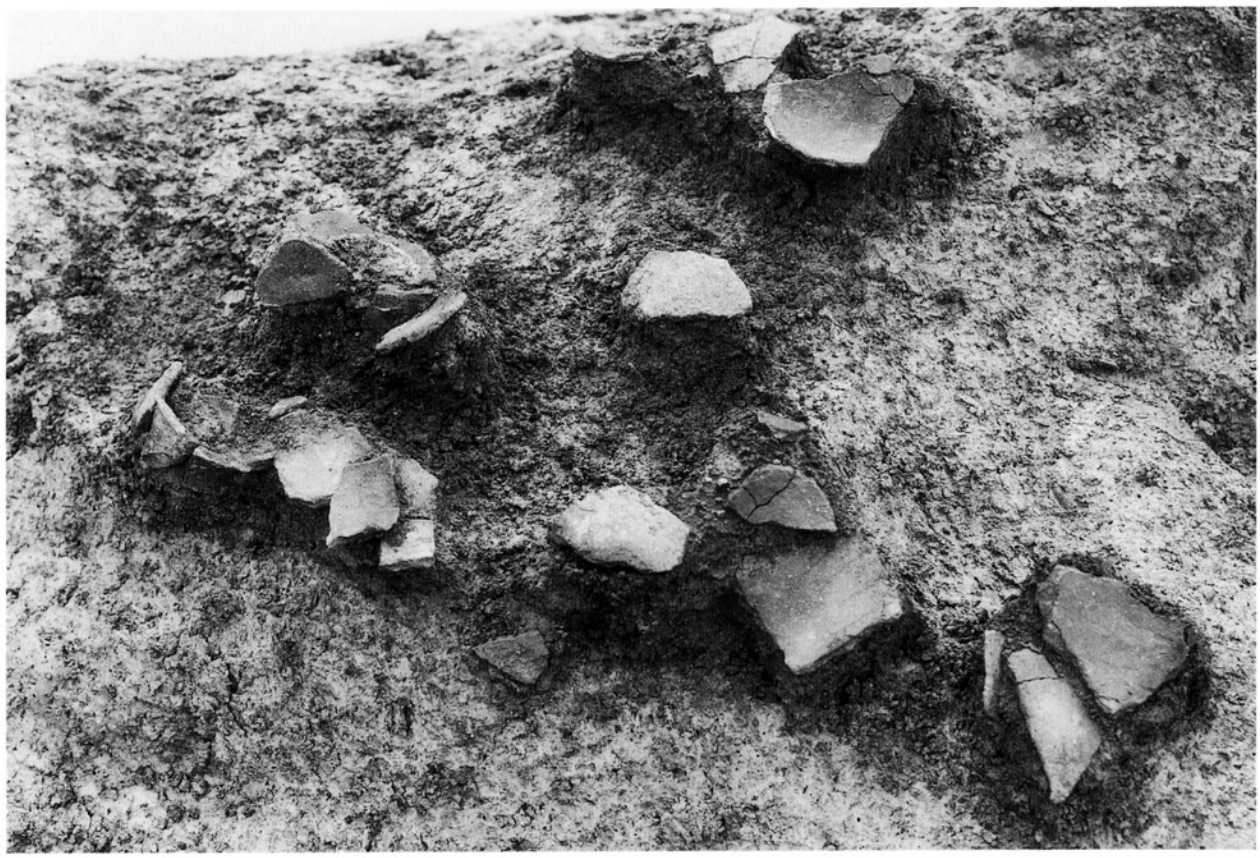
A調査区 SK61 完掘状況

Ｂ調査区完掘全景



Ｂ調査区完掘全景

B調査区 SX93 完掘全景



B調査区SX92土器出土状況

Ｂ調査区SX93土器出土状況

Ｂ調査区SB94土器出土状況

B調査区SB95完掘状況

B調査区SD61完掘状況

Ｂ調査区SD80土器出土状況

Ｂ調査区ＳＤ８０土器出土状況

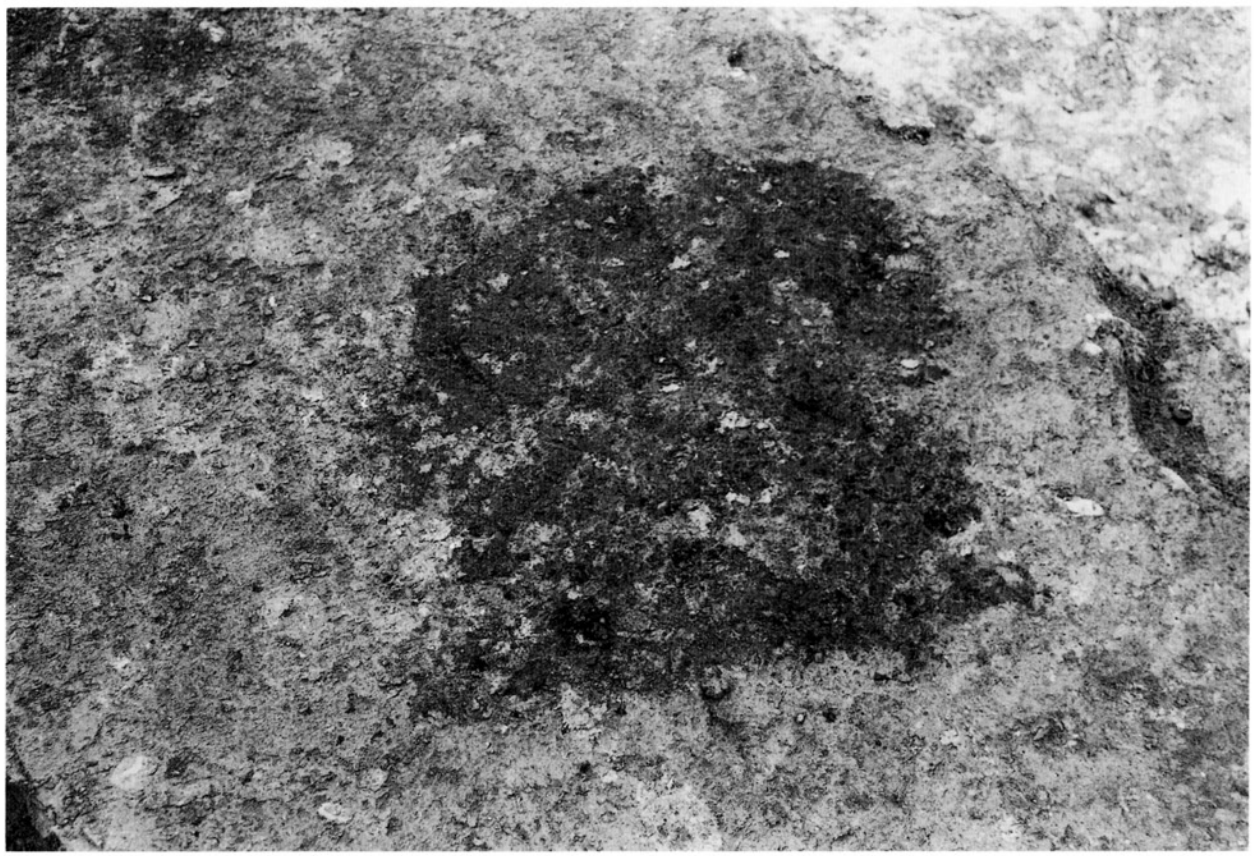
B調査区SD80完掘状況

B調査区SE42完掘状況

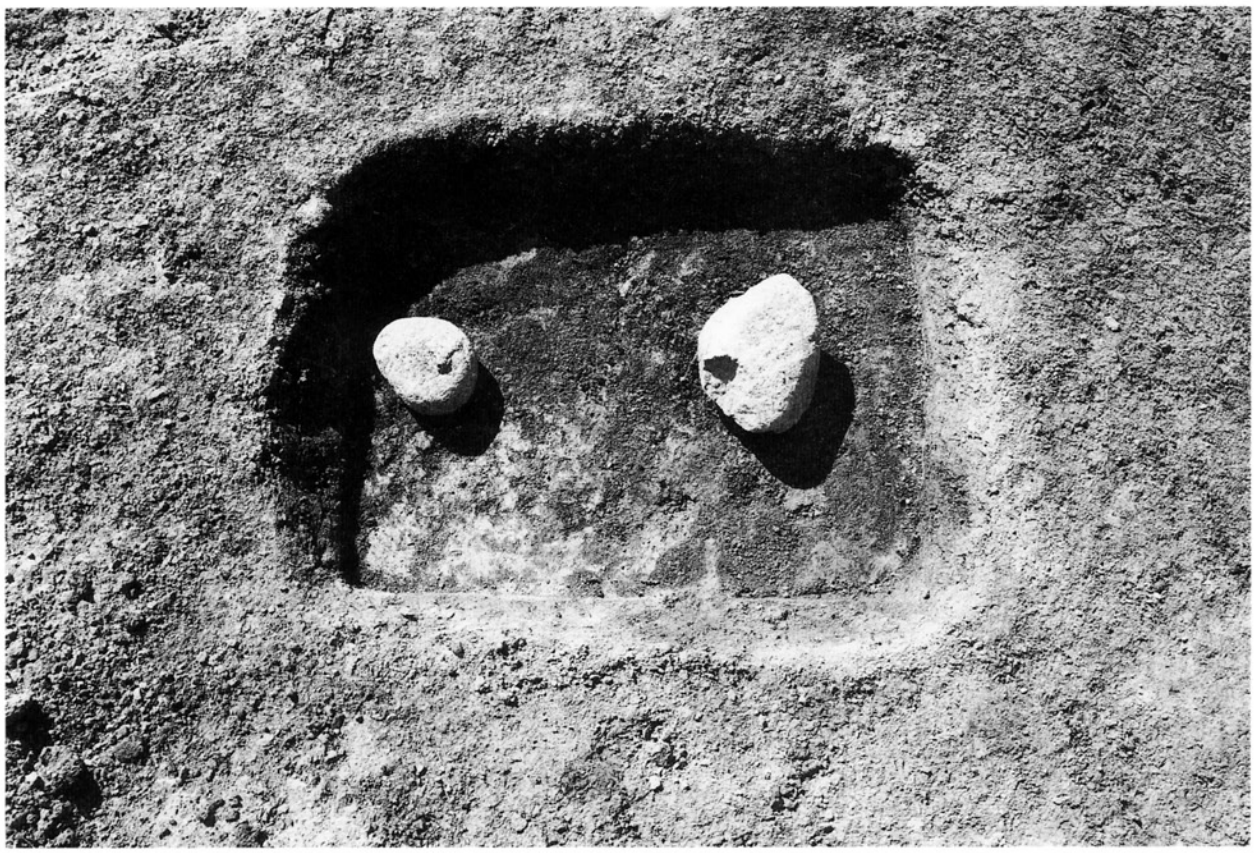
Ｂ調査区SE10断ち割り状況

Ｂ調査区SE7断ち割り状況

B調査区SE3断ち割り状況



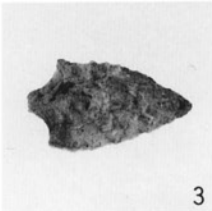
B調査区中世墓ＳＸ６２断ち割り状況



Ｂ調査区中世墓 SX62完掘状況

Ｂ調査区作業風景

ＰＬ 14　出土遺物


3

12

10

11

16

14

53

57

56

29

76

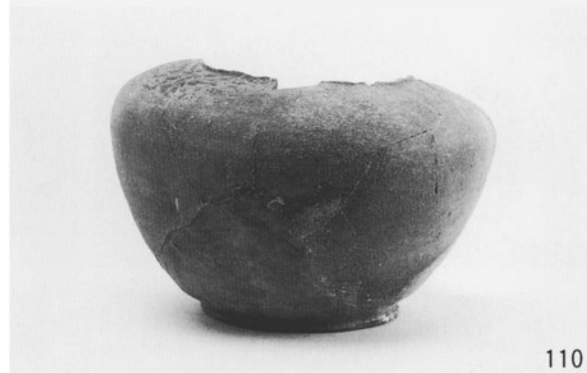
92

79

77

93

107


110

108

113

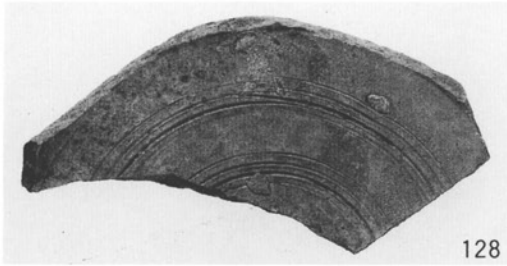
112

114

115

116

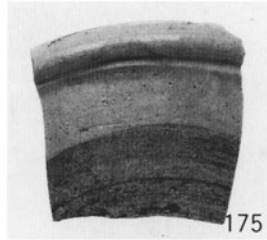
ＰＬ 16　出土遺物

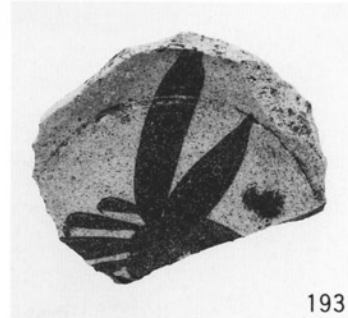

128

158

176

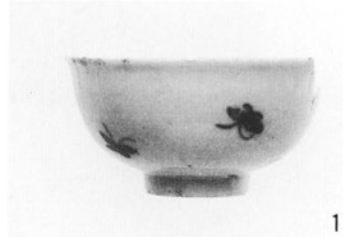
177

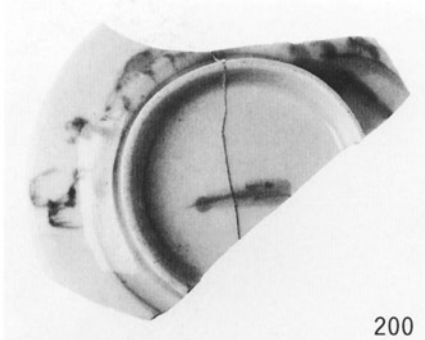

175


193

194

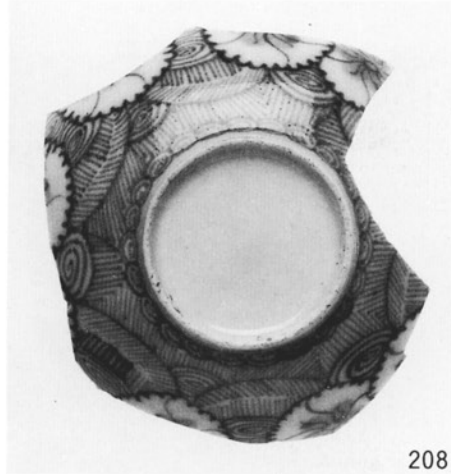
195


196


200

203

205

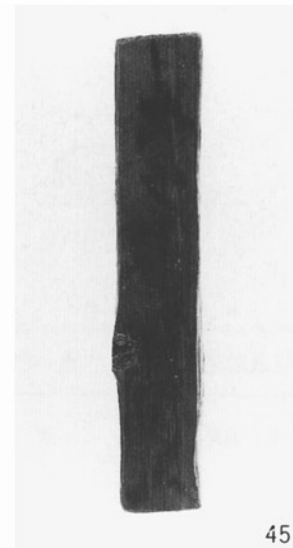

208

211

217

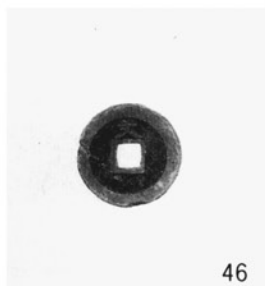
90

121


45

151

197


46

148

報告書抄録

ふりがな	たむらにしせこいせきはっくつちょうさほうこく
書名	田村西瀬古遺跡発掘調査報告
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	179
編集者名	萩原義彦・坂倉一光
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515－0325　三重県多気郡明和町竹川503番地　TEL 0596－52－1732
発行年月日	1999年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
たむらにしせこいせき 田村西瀬古遺跡	みえけんいちしぐん 三重県一志郡 うれしのちょうたむら 嬉野町田村			34° 36′ 27″	136° 29′ 50″	1997.9.16 ～ 1998.1.30	2,500	平成9年度県道松阪久居線緊急地方道路整備事業に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺物	特記事項
田村西瀬古遺跡	集落跡	弥生時代	弥生土器ほか	方形周溝墓
		古墳時代	円筒埴輪片	
		奈良時代	須恵器・土師器	掘立柱建物・溝
		平安時代	灰釉陶器・土師器	
		中世	陶器・土師器	井戸・溝
		近世	陶器・磁器	掘立柱建物・溝

平成11(1999)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年9月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告　１７９

田村西瀬古遺跡発掘調査報告

１９９９・３

編集・発行　三重県埋蔵文化財センター

印刷者　東海印刷株式会社